桂菴の講侶は、雲桂二翁と關係あるを以て、桂菴傳の前に之を叙するを便なりとす。

蘭坡景淳

景淳字は蘭坡、別に雪樵と號す、法を南禪の大模梵規和尚に嗣げり、聰慧にして書史を該研せしより、桂菴稱して心宗洞達外學兼全と云へり、所謂外學は程朱派なるべし、或は云く、嘗て要到尼丘道德中と吟せし學而齋(瑞巖龍惺)に學べりと、其の據を知らず、景徐周麟と共に雲章の講を聽きし人なれば、雲章に得る所も多かりけん、又桂菴と同じく學を惟肯の門に講じたりき、故に景徐の桂菴に贈れる詩に、

蘭坡と桂菴

桂翁先友是蘭翁の句あり、蘭坡の桂菴に和せし詩に、學業傳聞至聖涯、行將相問驛程賒と云へるは同學の情にして、別來書信幾回傳、望斷孤雲落日天と曰ひ、舊社秋深歸去晚、也知陳榻爲君懸と曰へるは、江雲渭樹の恨なり、蘭坡南禪に住して、後土御門帝の寵を得たりしが、文明中、帝親ら和漢の故事各三十題を選びて詩人歌仙に賜ひ、御前に召して吟詠せしめられし時、蘭坡は心經を講じ、吉田兼倶は神書を講じたりき、文龜元年に終れるも、其の享年を知らず、桂菴とは同年輩なりけんか、(此の時桂菴年七十五)、遺著に仙館集雪樵獨唱集あり。

了菴桂悟

了菴は別號を鉢袋子と曰ふ、應永三十二年を以て生る、法を眞如寺の大疑和尚に嗣ぎ、文明中勢州の安養寺に出世し、後ち東福に遷れり、後土御門帝召して法要を問ひ、了菴の二字を書して之を賜へり、永正六年命を奉じて明に入りし時は、了菴年已に八十三なり、風に遇うて歸棹し、永正九年更に舟を艤して明に至り、壬申入明記(寫本一冊)あり、明の武宗詔して育王山に住せしめ、金襴の袈裟を賜へり、公卿縉紳德を慕ふて來り謁する者多かりし中に、明朝一代の儒宗たる王陽明あり、永正十八年桂悟東に歸るに臨み、諸儒言を贈り、王陽明も亦序一篇を作りて、其の歸裝を飾れり、其の眞蹟は後ち伊勢山田の祠官正住隼人の家に藏し、摹勒も亦世に傳はりしが、今は松方侯の文庫に在り。

了菴と王陽明

王陽明の送序

送日東正使了菴和尚歸國序

世之惡奔競而厭煩拏者、多遯而之釋焉、爲釋有道、不曰清乎、撓而不濁、不曰潔乎、狎而不染、故必息慮以浣塵、獨行以離偶、斯爲不詭於其道也、苟不如是、則雖皎其髮、緇其衣、梵其書、亦逃租繇而已耳、樂縱誕而已耳、其於道何如耶、今所有日本正使堆雲桂悟字了菴者、年踰上壽、不倦爲學、領彼國王之命、來貢珍於大明、舟抵於鄞江之滸、寓館於馹、予嘗過焉、見其法容潔脩、律行堅凝、坐一室左右經書、鈐采自陶、皆楚々可觀、愛非清然乎、與之辨空、則出所謂預修諸殿院之文、論教異同、以竟吾聖人、遂性閑情安、不譁以肆、非淨然乎、且來得名山水而游、賢士大夫而從、靡曼之色、不接于目、淫哇之聲、不入于耳、而奇邪之行、不作于身、故其心日益清、志日益淨、偶不期離而自異、塵不待浣而已絕矣、茲有歸思、吾國與之文字交者、若太宰公及諸縉紳輩、皆文儒之擇也、咸惜其去、各爲詩章、以艷餞迪躅、固非貪而濫者、吾安得不序

皇明正德八年癸酉五月旣望　　餘姚王守仁

文中日本正使堆雲桂悟の上に、今所の二字、解す可らず、高僧傳引く所の文には、二字を除き去りしも、原本には慥に之あり、齋藤拙堂は、疑くば脫誤あらんと云へり、桂悟永正十一年九月十五日を以て寂す、壽九十一、桂菴より長ずること三歲なり、漢學紀源は桂悟が桂菴に和せる詩に、桂子天香我同稱、桫檀簪葛一家風とあるに據りて、同じく雙桂の門に出づと爲せり、此は桂の字に因て趣向を立てしのみにて、一家風は揚岐泓を言ふに似たれども、小引に往日識荊の雅ありと云ひ、前半に

了菴と桂悟

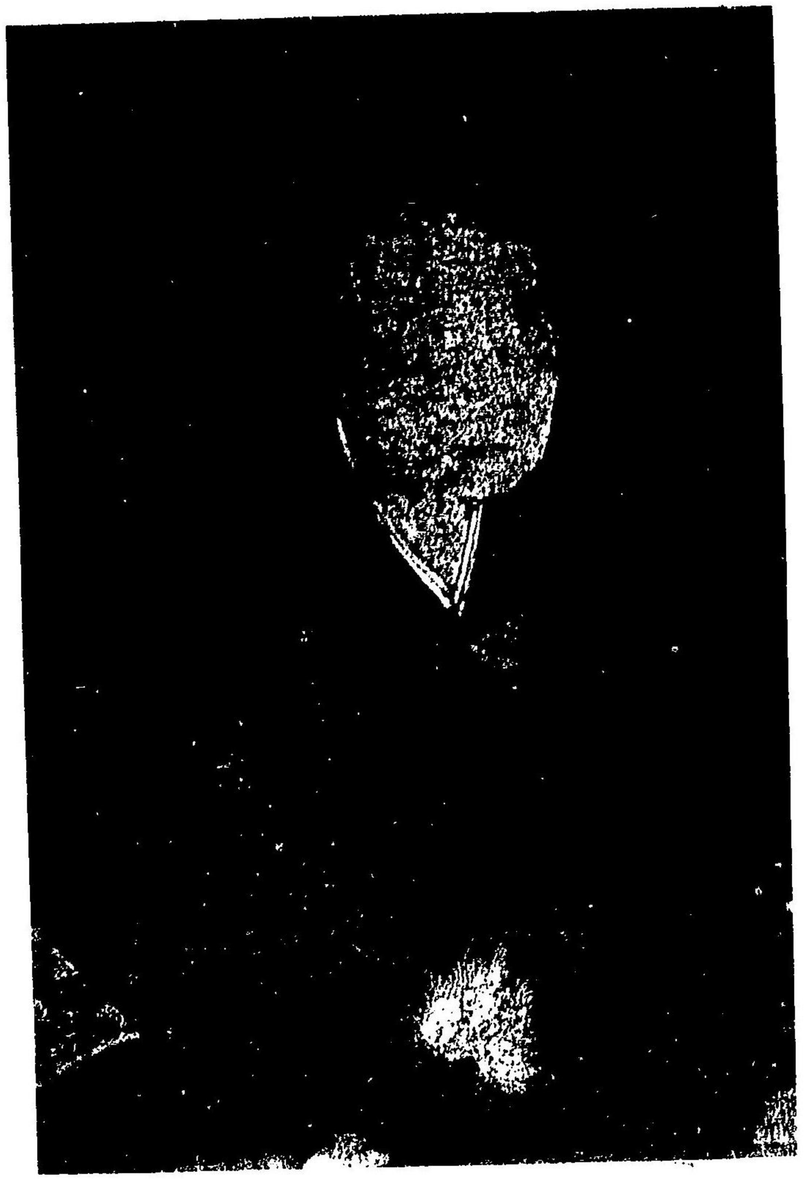
長安遠近日過翁輩刹會游在眼中とあれば、桂菴が雙桂の門に在りし時の學友なること明なり、景徐が了菴入明に送る序に、予忝同出自(身か)少師十六と、あり、了菴景徐は同門なりとせば、雙桂門下と云ふもの、亦據なきに非ず。

景徐周麟は宜竹と號し、多識文を屬す、四たび相國に住し、永正十五年に七十九にて歿せり、日涉記及び翰林胡蘆集十七卷の著あり、集中なる前住建長淳英和尚の像贊に、壓々以講四書五經、將謂迦葉現魯國とあり、淳英は亦是れ程朱を當時に講せしもの、景徐も亦此の人に學びしこともやありけん、巢松集跋に雪樵を稱して師友と云へり、景徐桂菴より少きこと十三にして、雲章の講を聽きし比は二十三四なるべく、雙桂門下の最年少なりしより、雙桂寂後は蘭坡に學びしならん、南浦文集の惟正景召は別人にして、惟肖景徐の誤と爲せるは、年代の遠へること既に之を辯じたりき、景徐が桂菴に贈れる詩及び序の意を察するに、桂菴とは面識なき者の如くなれば、二人は講侶に非ざりしかとも思はる、翰林胡蘆集中に

景徐周麟

景徐の師承

子程子曰、中心爲忠、夫子告參乎以一貫之道、參以忠恕二字釋之、子朱子曰、一是忠、貫是恕、又曰、一是一心、貫是萬事、是乃儒家之就心以論中字者也、吾能仁氏好



東京相國寺藏國寶院殿　　故徐周麟德像

居中所以昇中天降中國居中山說中道中道則中心也

など云へるもありて、程朱を尊奉するを見る、一派の學風知る可き也、

是より先き南北朝比迄の禪僧は、三教圖賛を作りて、佛を儒老の上に置き、以て咕々自ら喜ぶの風ありしが、室町時代に入りては、宋儒の行事を詩題とすること流行し、中にも周程二子を頌する者多し、今岐陽以下二三子の詩を擧ぐれば左の如し。

題濂溪愛蓮圖　不二遺稿　　岐陽　方秀

太極翁亡三百年、廬山風月尚依然、姚黃魏紫春如海、近有誰來愛此蓮。

伊川門雪　眞愚稿　　西胤　俊承

雪撲講帷凍不翻、先生瞑目到黃昏、當初二子傳何事、人仰醇儒一代尊、

讀濂溪愛蓮說　　同

愛蓮誰復似春陵、照世清文半幅藤、相見濂溪々上夜、寸心月浸玉壺冰、

村校夜雪詩　默雲集　　天隱　龍澤

師道不傳難決疑、青衿手卷雪殘時、諷聲綴度燈窓竹、今夜程門侍立誰、

程伊川贊

宋有醇儒稱二程。伊川獨得逸民名。門生夜侍講帷雪。滿坐春風想阿兄。

伊川門雪　鵲巢集　南江居士　同

講帷晴雪暮光沈。儒亦如禪造詣深。一色明邊唯眼目。游揚未悟祖師心。

程明道贊　小籟文集　横川景三

自孔孟來唯二程。獨非玉色識先生。伊川門外雪盈尺。一月春風梅是先。

伊川春雪　半陶橋　周與彥龍

九州四海一名師。君似游揚侍講帷。此夕伊川花滴雪。回思蕉雨斷腸時。

遺孫侍者出題詩意及桃源師蕉雨桃源自號

亦以て當時如何に禪徒の宋學に心醉したりしかを卜す可らずや。

## （十一）公武の學風

廷臣の學▲一條兼良▲中原康富と花山院中納言▲清原業忠と宣賢▲義尙將軍の好學

萬里小路時房　釋奠の興廢　學料と對策

南北朝より室町の初期に渉りて、禪林の學僧が宋學を皷吹せし狀態は、略已に之を說けり、而して當時の朝廷及び公家、幷に足利將軍の講筵は如何、請ふ二三の史片を湊合して其の梗概を說かん。

萬里小路內大臣時房は內大臣嗣房の子、長祿元年六十一にて薨せしが、其の家乘に建內記あり、永享十一年二月上丁の釋奠に、左傳の講を聽きて、同賦信國之寶也一首あり、此の比までは朝廷の釋奠も行はれけれど、應仁亂後は、節會大禮、悉く皆曠廢し、文武朝以來なる尊師の大典は、此に至りて中廢せり、然れど大內記菅原和長（東坊城秀長の子、後柏原帝御製の詩を了菴桂悟に賜ひし時、和長小序を奉れり）が、文明八年學問料を受け文章博士菅原爲學（五條）が、延德元年獻策して叙爵せしことゝも見もれば、科試は猶告朔の餼年を存しけん、畏しとも畏きは、淳和朝以來

東宮御讀初

東宮の御讀初に孝經を用ひられし皇家の恒例は、王室式微即位式だに行はせられざりし日にも行はれし事にて、後柏原帝文明二年始て孝經を讀ませられ、後奈良帝文龜四年十二月始て古文孝經を讀ませられし事とも史乘に散見せり、列聖佛に淫するも猶聖經を棄てたまはず、菅家清家も、亦儒業を世にして、經筵に出入せり、是れ文教の絶えざること縷の如きを得し所以か、但し廷臣の學風は、掌故歌詠有職等に偏して、聖人の道を講明するに遑あらず、其の文字に發する者も、亦唯詩と駢躰文とあるのみ、是れ王朝浮華の學弊にして、其の由來する所一朝夕に非す、帆足萬里曰く、詩の弊や愚、又曰く、中古以來、王朝の振はざる者は、詩敎の弊也と、未だ必しも一理なくんばあらず、而して此の際に於ける學者の異彩あるは一條兼良なり。

廷臣の學風

浮華の學弊

一條禪閤兼良

一條禪閤兼良は、玄惠法印が宋朝濂洛の義を正しと爲しゝに服して、程朱二公の新釋を肝心なりと爲せり、是れ當時に於ける隨一の宋學信仰者なり、茅窓漫錄に禪閤兼良公の四書童子訓は朱註に据りて編したまふと云へり、兼良は關白經嗣の子にして、義堂叡後十四年なる應永九年に生れ、桂菴が始て大學章句を薩摩に刻せし文明十三年に年八十歳にて薨せり、應兄雲章一慶は兼良より長ずること十六歳にして、兼良薨前十八年なる寛正四年に七十八歳にて寂せり、飯田忠彦の野史には、兼良を經嗣の第二子、雲章を第七子と爲せども、其の誤は辨せずして知るべし、兼良は桃華老人、又は三關老人と號せり、和漢の學に富みたりし成恩寺准后を父とし、程朱崇信の雲章一慶を兄とし、當時の名儒菅原秀長を外祖父とせる兼良の素養も亦知る可きなり、然れば予れ菅丞相に勝る者三あり、攝家たること、太政大臣たりしこと、且延喜以後の事を諳んずること是れなりと誇れる人にて、博覽多識にして神儒佛に渉り、當時推して才學絶倫と稱せられたり、一條桃華坊の第に文庫を作りて、和漢の群書を藏めたりしが、應仁の亂、一條は兵燹に罹り、文庫は幸ひに災を免れしも、軍兵の爲に蹂躪せられて、奇籍珍書も道路に委棄し、平生の秘愛、忽ち一空に歸しければ兼良聲を放ちて痛哭しけるこそ理なれ、其事蹟及ひ著述は野史に詳なるを以て載せず。

兼良の三絶

兼良のオ學

桃華坊の藏書

正齋書籍考には、中原康富の康富記に、「寶德元年八月、孝經並論語孟子中庸等、以相傳之說、授申花山院中納言殿御方訖」とあるを引き、「記に又玄惠法印抄書論語也と

中原康富

玄惠抄書の論語

花山院中納言

藤原長親

玄惠の遺澤

晦翁集の代價八百匹

みも、是も新註なるべし」と註せり。康富は當時の有職家にして、永享二年大嘗會記、永享十年石清水放生會記等の著あり、長祿元年に年五十九にて卒せり、其が玄惠抄書の論語を傳へたるを見れば、亦篤志の人なり。花山院中納言は、蓋し太政大臣政長にして、此の比は猶中納言にてもやありけん、花山院家の支流なる藤原師賢は、後醍醐帝に事へて忠節を盡しゝ人なるが、二子あり、長子信賢、次子家賢、並に南朝に仕へ家賢の子長親、後村上後龜山二帝に歴事して、文章博士と爲り、右大臣從一位に進み、和歌を能くして耕雲口傳を著はし、無文禪師と交深かりしと云ふ。康富記の花山院中納言は其の子孫には非ざれども、彼此思合して書香の人を襲ふを覺ふ。康富が玄惠相傳の論孟中庸等を花山院中納言に授けし寶德元年は、雲章の百文清規を講せしより十一年前にして、桂菴は二十三の時なり。兼良は程朱の新釋を庶兄雲章に受けしことあらんも、其の信仰は玄惠を宗とし、康富の花山院中納言に授けしも、亦玄惠の相傳に出づ。玄惠は實に宋學の祖にして、之を召出されし後醍醐帝の遺澤も亦遠しと謂ふ可し。

時房の建內記に、嘉吉元年四月、晦翁朱子の集（の寶本ありしを、八百匹にて買取りて禁裏に召置かれ、清大外記に送られければ、大外記一見を加へて返せし由見も、清大外記は即ち清原賴業が子孫なる清原業忠にして、兼良と同時代の人なり。賴業九世の孫良賢、後光嚴後圓融後小松三帝に侍讀し、文學を以て鳴れり、是れ業忠が曾祖父にして、父宗業少納言大外記たり、業忠は明經博士に補し、直講大外記と爲り、大藏卿正三位に進めり、清原氏は舍人親王以來の儒家にして、世先業を繼ぎ、業忠に至りて家名を墜さず、學庸を講ずるには朱子章句を用ひ、論孟は猶何晏趙岐の古註を用ひ、子孫世々之に從へり、蓋し學庸に新註を用ふるは、公時行親以來已に然り、業忠始て之を用ひしにあらざるも、此に至りて定めて家法と爲しゝなるべし、業忠の孫なる宣賢は實に卜部兼倶の子、業忠の子宗賢の養子と爲り、藏人直講より侍從に任じ、從三位に進み、天文十九年に年七十六にて越前に薨せしが、環翠軒と號し、家學を繼ぎて學庸には新註を用ひ、朱註を抄解しき、其他甘露寺元長の文學ありて擊劍を學べる、三條西實隆公條父子の篤學にして史記を手寫せる等、亦附傳するに足れり。

清原業忠

學庸新註の家法

環翠軒宣賢

甘露寺元長

三條西實隆

足利將軍家は、義滿が義堂禪師に新註を勸められてより、程朱の說も亦講筵に絕

義尚將軍の好學

えざりけん、然れども此の時彼等は殆ど禪宗、中毒の徒のみ、惟肯得巖が勝定院殿（義持將軍）蓋七法語に、「外現を以て之を視れば、巍々堂々たる聖朝の輔弼なり、內祕を以て之を推せば、玉雪瑩然たる一高僧なり」とある程なり、其の學を好めるは獨り義尚將軍あるのみ、義尚は一條兼良を師として道を問ひ、兼良爲に樵談治要を著はして之に與へつ、治兵の暇、小槻雅久に論語を、卜部兼倶に神代記を講せしめ、或は禪僧と詩を賦はし、江州の陣中にも學者を召して孝經左傳の講を聽き、以て文武を兼修せしより、父老手を額にして眞の大將軍なりと相慶びしと云ふ、蓋し十三代中の名將なりしに惜しき哉早世せり、其の餘言ふに足る者なし、而して足利氏の尤も誇るべき者は足利學校あり、以て北條氏の金澤文庫と光を爭ふに足れり。

## 附載

永享十一年二月上丁釋奠、聽講左傳、同賦信國之寶也一首

萬里小路時房

釋奠の詩

守信逢原懷八紘、黃金非寶豈相爭、春風二月宣尼廟、又來瑞鑾薦至誠、

懷馬場菴室詩

一條兼良

憶得三生石上緣、一菴風雨夜無眠、今朝更下山前路、老樹雲深哭杜鵑、

兼良の詩

掖墻春柳

甘露寺元長

元長の詩

宮門開處粉墻新、御柳陰々吹不塵、雨露恩如聖恩遍、青烟深鎖漢宮春、

○

三條西實隆

實隆の詩

三十年來朝市塵、扁舟歸去五湖春、平生慚愧無功業、合對白鷗終此身、

金澤文庫

學校參詳官通直郎行秘書省著作佐郎臣李善上表

永徽六年十二月十七日

太子詹事臣許敬宗等奉

令撰

能化九華雙闕

加朱墨點　三要

## （十二） 足利學校と宋學

尊氏の興學▲上杉氏の篤志▲學校の司業▲九華叟と北條氏康氏政

足利學校の來由

小野篁學問處の說

摩氏再興說

叙して足利學校に到るは、予の尤も樂む所なり、本邦唯一の舊學、亂離の間に儼存して、許多の古籍寶典を人間に留めたればなり。

足利學校の來由は、前賢の力を考據に費しゝ者いと多し、今諸說を參括して大要を記さんに、學校は下野國足利郡に在り、小野篁が下野守たりし時の學問處なりしを、上杉憲實創めて學校を立てたりとも云ひ（大日本史）、足利義兼始て學校を立てゝ孔子を祭り、一百餘年を經て災に罹りしが、尊氏西國に沒落して、菊池氏と多々良の濱に戰ひし時、先祖の山緒ある足利學校の聖廟に向つて、遙に祈願を籠めしに、果して勝利を得しより、聖廟を再建して之を崇拜せりとも云ひ（分類年代記）學校興隆の事は、鎌倉管領足利基氏之を奉行せりとの說坂本覺兵衛鑁阿寺日記）もあり、上杉再興の後、應仁中に至りて長尾景久といふもの、其の衰頽を中興せり

國學現存說

との說鎌倉大草紙)もあり、上杉憲實が五經を寄附せし時の狀には、足利學校を野の州學と稱せり、是れ王朝の比、國毎に學ありて國學と稱せし者皆廢れて、野の國學のみ僅に存したるが足利學校なりと爲す說なれば、小野篁の學問處にあらず、且つ篁は陸奥守にはなりたれど、下野守たりしことなし(東海談)とも云ふ、桂菴禪師の家法和點に引ける岐陽和尙の講說書入本論語の卷尾に云く、

上杉憲實の寄附狀

日本綫足利一處學校、學徒負笈之地也、然在彼而稱儒學敎授之師者、至今不知有好書、徒就大唐所破棄之註釋、敎誨諸人、惜哉、後來若有志本書之學者、速求新註書而可讀之云々。

岐陽は應永三十一年に死し、其の十五年後なる永享十一年に至りて、上杉憲實は五經を學舍に寄附せり、且其の狀にも、足利學校が僧を以て主と爲すは乖戾なれど、文字敎授を庶幾すべきを言へり、然れば憲實の寄附以前より校長學舍ありしを知るべく、憲實の創立に非さるや明かなり、予因て之を案ずるに、足利學校は古の國學の存する者にして、小野篁も東に下りし時、書を此に讀みけん、由來の久しき如此なるより、遣唐使などの齎來したる唐以前の古鈔本、卽ち支那に亡せたる逸書も傳はりけん、足利氏の領地と爲りては、義兼も聖廟を修理せしことありて、尊氏も聖廟再建學校興隆の事ありしなるべし、基氏は菅原豐長を鎌倉に聘して、管領府の僚佐に敎授せしめし程の人なれば、足利の學事を奉行せしも理なり、憲實の曾祖父なる憲顯は、天岸惠廣に師事して弟子の禮を執り、義堂に參して文字政務を輔くべしと勸められし人なり、其の曾孫憲實に至りて、好古篤學、名敎を尊信し、永享十一年五經を寄附すると共に、學規を定めて文敎を興隆せしは、家風の然らしむる所なるべきも、亦希代の賢人に非ずや。

學校の藏本

學校の藏本に古本宋版足利本等あり、古本は卽ち唐以前の古鈔本にして、天下無二の逸書あり、遣唐使の齎來する所なるべしと傳ふ、宋版は刻本の王にして、宋末元初の舶來なるべく、彼國に存せざる者多し、足利本は學校にて印行せる活版本なり、(目書は略す)想ふに學校には古來保存の藏本なきに非ずして、古書を覩んと欲する者は、必ず走りて此に就きしならん、戰亂の世儒敎衰頹の時とて、固り絕えざること縷の如き狀態なりけんも、禪僧を山長として儒學を敎授せしなるべし、五山雲水の東國を徧歷する者、必ずや錫を此の地に留めしより、學校の消息は岐

陽等の耳にも入りしなり、然ればこそ學徒負笈の地と云ひ、儒學教授に古註を用ふるをも說きしならめ、然れども上杉氏が古鈔宋版の如き珍重すべき古典數多を寄附し、且學政を監督するに及びて、學校の興隆昔日に倍蓰せしを疑はず、其の子憲忠、孫憲房等も亦遺志を繼ぎ家法を承けて典籍を寄附し、學事を奬勵しけるほどに、干戈倥偬の間に立ちて儒學を維持し、一たび關白秀次の什物を取去りしことあるも、德川家康に依りて舊處に復し、且其の保護を加ふるありて、古典を後世に儼存するを得たり、其の偉功豈之を上杉氏に歸せざるを得んや、先賢之を論じて、上杉氏が足利將軍の外戚(尊氏の母は上杉憲房の女)を以て足利學校を興せしは、北條氏が鎌倉將軍の外戚を以て金澤文庫を創せしと、並に千古の雙美たりと云へり。

上杉三代の寄附

德川氏の保護

千古の双美

憲實狀、に本朝州學の存する者、率ね僧を以て主と爲し、野の學を最と爲すとありて、足利學校の校長は、古來僧侶なりしと見ゆるが、一說に尊氏興學の時、京師の儒官を招きしも、水土に慣れずして早世し、其の後儒官は東行を厭ひしより、又も禪徒を以て之を領し、俗人のやうに先生と稱して、長老和尚とは稱せずと云へり、後には學校とだに云へば、足利學校の先生の事と爲れりと見え、第八世閑室和尚の事を、單に學校三要など稱せり、扨上杉氏興隆後より德川氏の初期迄の司業は左の如し。

學校の校長

第一世快元和尚、出身不詳、文明元年四月二十一日卒▲第二世天矣和尚、肥後人、延德某年二月十六日卒▲第三世南斗和尚、出身歿年不詳▲第四世九天和尚、出身不詳、永正某年六月二日卒▲第五世東非和尚、諱之好、姓吉川氏、大永某年三月五日卒▲第六世文伯和尚、出身歿年不詳▲第七世九華和尚、諱瑞璵、號九華叟、又玉岡、大隅伊集院氏支族、天正六年八月十日卒、年七十九▲第八世宗銀和尚、日向人▲第九世閑室和尚、諱元佶、一名三要、肥前小城人、德川家康幕僚、慶長十七年五月二十日卒、年六十五。

中興第一世快元は、蓋し憲實の師爺として學校興隆に功ありし人ならん、快元僧都記は其作也、永亨十一年より其の歿せし文明元年迄は三十餘年なり、岐陽が足利學校の教授に古註を用ひて、新註の好書あるを知らずと云ひしは、快元が校長たりし以前の消息なるべし、第二世天矣和尚の時に至りては、文明九年に紫陽の

宋儒の書を讀く

大奇(負笈の學徒か)といふ者、泰軒周易傳を置き、其後近江の宗理といふ者、書經集註を置き、延德二年には建仁寺大龍菴の一牛藏主といふ者、禮記集說を置きたりといふ、宋儒の書は此に至りて亦足利學校に入り來れり、文明九年は桂菴が肥後の菊池氏に賓師たりし時にして、延德二年は大學章句再板の前年なり、程朱派の禪僧は關東にも歷住せしを以て、宋學の夙に東國に入りしを疑はず、而して足利學校の如き、教授は古註を主としけんも、新註の書漸く學校に入來るに至りしは、禪徒の交通、文化を分布せしに因るなり。

禪徒傳歷と文化分布

且上杉氏と宋學とは緣故深し、憲顯が宋學皷吹者の義堂に參せしは前に述べたり、學校興隆の功ありし憲實は、後ち其の主足利持氏に疎まれ、退きて異志なきを明しゝが、持氏亡後、世を厭うて出家し、西游して周防山口の大寧寺に至り、竹居正猷に參して、遂に山口に客死せり、竹居正猷は薩摩の僧にして、宋學信仰の惟肖得巖が弟子、即ち桂菴と同門なり、其の未だ世を遯れざりし時も、程朱派の學僧に參せしことなかりしや否や、後ち上杉氏の重臣直江山城守兼續が、宋學を崇信して道を藤原惺窩に問ひしが如きあり、古今に俯仰して、其の由來の久しきを思へば、

遯實の西游

好學の家風

好學の家風、誠に欽仰に堪へず。

扨又學校中興後の校長を見るに、九人の中、四人は九州の出なり、是れ九州文化の早く開け居たりしを證する者なり、肥後の天炎和尚は、菊池文學の產かあらぬか、大隅の伊集院氏より出でたる九華叟は、蓋し石屋眞梁の流を酌みし人なるべし、

九華叟

石屋は薩州隨一の禪僧にして、亦伊集院氏なり、石屋出でゝより名僧其門に輩出しつ、竹居正猷の如きも、初め其羽翼中に育まれたりき、金澤文庫の印ある足利學校藏本の宋槧文選奧書に據れば、九華は永祿三年一旦歸國せんとして、相州小田原を過ぎしに、北條氏康氏政父子、請ふて三略の講釋を聽聞し、談話の次に、此の書を九華に賜ひて學校に寄進し、又請ふて再び學校に住せしめたり、此の時九華年六十一なりしと云ふ、當時氏康父子威を關東に振ひしかば、足利學校の學事をも世話しけるにや、其の好學も亦尙ぶべし、九華は學業甚だ盛にして、在校十年の久しき、受業三千に及べりとあれば、戰國の世にも學問の絕えざりしこそ宜なれ、日向の宗銀は如何なる人なりしを知らず、飫肥の安國寺福島の龍源寺などより出でし僧にもや、然らんには亦桂菴の遺澤中より出でし人なり、三要は佶長老と稱

北條氏康氏政の問學

三要

して家康に賜せられ、活字を賜ひて孔子家語貞觀政要武經七書等を印刷し、大に文學に功ありしは、世人の知る所なり。

## (十三)　足利時代の新文藝

### 宋學と元曲△元曲と謠曲

宋學と元曲、そも何の關係か之あらん、況や堅苦しき道學先生に至りては、聲色の樂みなど云ひて、聲曲雜劇を惡むをや、支那小說の隨一なる紅樓夢を讀むに、子弟が心を奪はれて科學の妨と爲ればとて、元曲百種を燒棄せしことも見も、此は當時士人の家庭に於る事實を取りて小說中に入れし者ならん、元曲百種は元曲選、とも名けて、元代の淨瑠璃を集め、明の萬曆中に刊行せし者なれば、相去る遠からざる淸朝に、其の書のいと稀なるべき筈なけれど、之を坊間に求めて殆ど得易からざるは、之を燒きし道學先生多かりしにも因らんか、然れば道學と劇曲とは敵同士に似たれども、我が邦に在りては頗る緣故あるぞ面白き、其は內容を言ふに非ず、傳來の時期、及び元曲と謠曲との關係より之を言ふなり。

元曲百種燒棄

新井白石の俳優考、及び物徂徠の南留別志など、皆我が邦の謠曲が、元曲より脫化し來れるを言へり。

謠曲は元曲より脫化すとの說

白石の俳優考

俳優考に云く、傳奇と申すは、古に在りし奇事を詞曲に作りなして歌ひ舞ふこと也、我國の猿樂のうたひ物も、かの元曲に倣ひしものにて侍る也、委しき事は下に見えたり、今も元曲選元人百首など云ふ物我國にも傳はり侍る、△鎌倉の末、室町殿御代の始に當りて、傳奇雜劇など云ふこと、元朝に盛に行はれき、其代には我國の人も彼の國に行き、彼の國の人も我國に來り、彼是もきかよひしかば、彼邦にすなる雜劇を、我國の人見もし又は聞も傳へしを、田樂猿樂を業とせし輩、やがて彼國の傳奇など云ことに倣ひて、古に有りしことの悅べく恐べく驚くべく喜べきことなどを、歌ひものゝ詞に作りなして歌ひ舞ひけるなり、是古の雜樂散更の餘風にて、其の事は又一變して元朝の傳奇雜劇の體に倣ひし者也。

徂徠の南留別志

南留別志に云く、能は元の雜劇を擬して作れるなり、元僧の來り敎へたるなるべし、こればかりの事も、此の國の人のみづからつくり出だせるわざにてはあらじかし、

元曲と謠曲との關係を說きし者は、此の二者や始なるべき、白石果して元曲選を讀みしや否は知らず、元曲選元人百首を二部の書と爲したるいと疑はし、元曲選は一名を元曲百種、又は元人百種曲とも稱すれど、予未だ別に元人百首といふ書あるを知らず、此は二樣の書目を見て、二部と誤想せしにはあらぬか、其は兎まれ角まれ、流石に白石は該博の大儒とて、二者の關係に想到せし創見は、驚歎に餘あり、徂徠の說は後出ならん、剽竊に非ざるべきも、語り而して詳ならず、且こればかりの事も國人のつくり出せるわざならじなど、好んで冗辯を弄べるは、崇外卑內の見にして、面憎き書振なり、然れども近人謠曲固有說を執りて、元曲との無關係を主張せるは、徂徠の言に激して尊內卑外の大義を伸ぶるにてもあるまじけれど、頗る武斷の嫌あり、予は猶白石の說を以て、文藝上の一卓見と信ずる者なり。

白石の創見

謠曲固有說

元曲の發達

或は宋詞元曲と云ひ、或は唐の傳奇、宋の戲曲、金の院本雜劇と云ひ、樂府一變して塡詞と爲り、塡詞一變して曲子と爲ると云ふの類、皆元曲の發達を語る者にして、俳優考も亦略之を說けり、予は元曲を以て主題と爲さゞるが故に、必ずしも詳說せず、予れ嘗て元曲を讀みて我が謠曲の體製、果して之と相似たるに興味を感じたりき、每篇四折(別に楔子あるもあり)にして、第一折はワキの道行、第二折はシテ

二曲の體製

の出、第三折は後シテ、第四折はキリとも云ふべきか、旦淨末の場に上る毎に、先づ詩を唱へて後に身分を述ぶるは、次第と名乘とに似たり、科の簡古なる、白を曲中に挿めるも能く相似たる者あり、元曲に地謠なく、假面を用ひざる等、固り相同じからざるも、其の體製は殆ど弟たり難く兄たり難し、想ふに能其者の本質は、クセと共に我の固有に屬しけんも、シテワキツレ等の役々を備へて、科白唱の三者を備へ、以て一曲の體製を完成せしは、元曲傳來の結果に非ざるか、而して元曲を傳來せし者は、誠に白石の言へるが如く、元明往來の禪僧なるべし。

禪僧の謠曲　上堂法語は戲曲

禪僧は不立文字を標榜するも、其實は尤も韻語を好めり、駢體を好めり、而して上堂の法語は宛然たる戲曲なり、彼の堂に上る者はシテなり、彼の公案を問答する者は白なり、拂子を揮ひ柱杖を卓つる者は科なり、結ぶに偈を以する者は唱なり、彼等は豈元曲に一種の趣味を有せざらんや、況や元僧一山は稗官小說に通せしをや、雜誌「能樂」に、觀世の二世にして作曲尤も多き世阿彌の著作十六種を近比發見したりとて、吉田洛城氏の記載せる文に曰く。

謠曲作者と宋學

五音曲條々の末尾に、天之命謂之性。循性謂之道。の語を引きて、危げにも「祝言は天性なり、此の性を和して幽玄となし、又感を深めて慈慕と爲し、而も亡へては哀傷と爲る、是等を習得して道をきはむるを闌聲とす」云々亦一考に直す、蓋應永の當時、儒書の漸く僧家武家の間に讀誦せられんとせる機運にあたり、夙くも世子の此に着目して、其の講談に聞きて、更に自家の藥籠中に儒書を收め來りしは、以て其の篤學聰明を想ふべし、又當時の世俗が、既に宋學性理說の新流行に會ひ、游樂社會にも、高く性理を談ぜざれば、人の信用を博し難かりし實際ありしを想ふに足らん。(能樂第六卷第十號)

新文藝と神儒佛

世阿彌は桂菴二十九の時なる康正元年に、年八十一にて歿したれば、中巖圓月の寂せし天授元年(北朝永和元年)に生れし人なり、其の父觀阿彌は應永十三年に年五十二にて歿したれば、元僧歸化の殿たる東陵和尚渡來後五年なる正平十年、北朝文和四年)に生れし人なり、元代の文學は此の時已に我邦に入るや久し、而して世阿彌に至りては禪僧に從つて四書をすら學べり、彼等が更に元代文學を禪僧に受けて、謠曲の體製を一定するに至りしことなしと謂ふ可からず、其の餘此の新文藝に從事せし者、亦皆儒佛を研究し、神道歌學をも講習したりと見え、八島に

異樣の文章

は「智者は惑はず勇者は懼れず」の經語を引き、養老には「神といひ佛といひ唯是れ水波の隔」と說きて、當時の神佛混淆の理想を現はし、古來の歌物語を縱橫驅使して錦繡を織出せるこそ、實に室町時代に於ける一種異樣の文華なれ、而して其の中を一貫せる者は浮屠氏の說なり、眞言あり、念佛あり、法華あり、固より一宗に偏せざるは、愛嬌を賣る所以なれども、其の幽玄を尙べるは、亦何となう禪味に近し、予は宋元僧と宋學元曲と謠曲、謠曲作者と宋學とを聯想し來りて、元曲と謠曲との關係を無視する能はず。

雜劇の詩

## 附載

南泉翫月　大覺禪師語錄　　蘭溪　道隆

戲出一柳川雜劇。神頭鬼面幾多般。夜深燈火闌珊甚。應是無人笑倚欄。

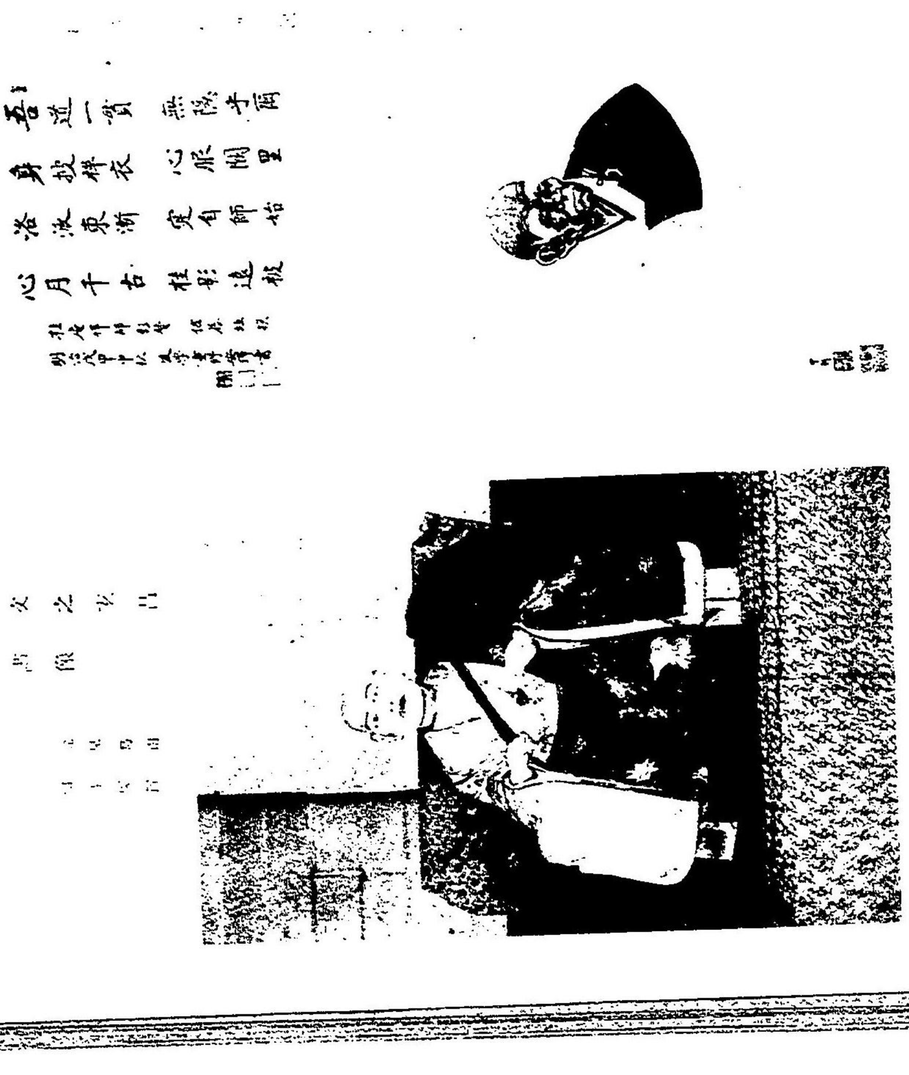
○　南山錄　　南山　士雲

隨處開場打雜劇。神頭鬼面得人憎。今朝脫却戲彩去。手裏拈來一枯藤。

村田樂　仲芳和尙語錄　　仲芳　圓伊

除夜小參垂語云。能拍板無孔笛家燕團欒唱村田樂。者裡却有賞音者麼。　看戲劇　了幻集　　古劍　妙快

秋風鼓笛發清狂。笑一場兮笑一場。識得從來無實法。玄沙只是謝三郎。



# 下編

## （一）桂菴の前半生

桂菴の出身▲入明と宋學研究▲歸朝後の桂菴

桂菴以前及桂菴時代の宋學に關する事蹟は、略已に之を說けり、今は本邦の宋學史に異動ある桂菴禪師の事蹟を叙述すべき順序と爲れり。

桂菴名は玄樹、後に島陰又は海東野釋と號せり、岐陽寂後三年なる應永三十四年丁未を以て周防山口に生れ、九歳の永享七年に上洛して、惟肖得巖に南禪寺に依り、年十六の嘉吉二年に剃髮得度しつ、漢學紀源には、此の時惟肖は退老して双桂和尚と稱せしより、桂菴の字を得たりと云へり、扨甚麽に因てか其の名を玄樹とは呼べる、宗派目子と云へる寫本に左の法脈を示せり。

桂菴の師

双桂和尚

宗派目子の系圖

大明國師――道山玄晟（傍註筑前「禪光」寺開山也）――平田慈均（傍註在南禪菴「中刹也」）――前南禪桂菴玄樹（曰雲與）――前壽福方田玄圭――豐州萬壽單察景蒲玄忻――前南禪桂菴玄

◎桂菴の前半生

玄樹の名ある所以

●樹（傍註豐州人薩州鹿兒島陰有寺曰桂樹院）――前建仁鄂渚玄棟（傍註日州人）

――前建仁一翁玄心（傍註隅州人）

目子に又云く、桂菴早歳より南禪の雲興菴に在りて禪を問ひ、十七にして有磬一聲の頌を出せり云々と、周防の人なる桂菴を、豐州の人と爲し、薩州犬迫の人なる鄂渚一翁兄弟を、日州の人又は隅州の人と爲せるが如き、頗る疑ふ可き者あれど此の寫本は故紙の裏に寫せしものにて、故紙には天正六年の年號も見え、禪居菴の名も見え、文之靈三承兌等が事をも記したれば、慶長中建仁寺の僧の手に成りし者にもや、一二誤記ありとも、大體は信ずべき者ならんか、此の系圖に據れば、桂菴の嗣香を捧ぐる者は景蒲玄忻にして、入元僧の平田慈均が弟子なる方田玄圭以來嗣法の兒孫、皆玄の字を以て名に冠するなりけり、扨桂菴の師なる景蒲玄忻は如何なる人ぞ、豐後萬壽寺の住持と見もれど、京鎌倉の五山十刹中に出世したる事なしと見えて、其の傳記未だ詳ならず、桂菴が早歳京に入りし比は、或は平田開山の南禪雲興菴に在りて、桂菴禪を玄忻に問ひしにやいと覺束なけれども、玄樹、玄棟、玄心、玄昌（文之）、玄碩（學之）など、皆其の法統は玄の字を冠するに觀れば、宗派

景蒲玄忻

遣明使才の試驗

大梅々子の偈

天與清啓

戊子入明記

桂菴の入明

目子の系圖は信憑す可き者なるべし、然るにても景蒲玄忻が事蹟の詳ならざるこそ口惜しけれ。

桂菴後ち長州赤馬關の永福寺に居たりしが、義政將軍使を明國に遣はさんとし、五山禪僧の使才を試み、惟肖其の任に在り、知名の衲子八十餘人を召集して、命ずるに大梅々子の偈を以す、桂菴も亦試に應じて、大梅々子鐵團々。八十餘人下觜難。今日當機百雜碎。那邊一核與他看の一偈を作りしに、惟肖等鑑拔して正使の隨員たらしむ、正使は天與清啓なり、天與は信州諏訪の神官の子、萬里集の著あり、二度目し、博學能文を以て名を得、嘗て一たび（寛正四年）明に使し、萬里集の著あり、二度目には再度集あり、文明中建仁に視篆し、長祿中に寂せり、桂菴四十一の應仁元年丁亥を以て明に入り、翌年戊子元旦には、燕京に在りて大明宮に朝賀せり、是れ明の憲宗の成化四年なり、戊子入明記（寫本一冊）といふものに、三號船（大內新介の船）宮丸に乘りたる土官玄樹の名あるは即ち桂菴なり。

是より先き桂菴が惟肖に從ふて南禪に在りし時、建仁寺に惟正名は明貞と云ふ者あり、東福に景召名は端棠といふ者あり、並に不二岐陽の門人にして四書を講

◎桂菴の前半生

惟正景正二老

じければ、桂菴二老に從ふて內外の學を受けたりと漢學紀源に記しゝは、彼の南浦文集に據れるなり、惟肖固り岐陽の上足なれば、桂菴は四書を惟肖に受けつらんとこそ覺もれど、南浦が前輩に聞きし所を記すこと如此なれば、之を惟正景召二老に受くと云ふ者も亦必ず據あるべし、但二老の事蹟未だ詳ならざるを奈何にせん、扨潛隱が桂菴の入明は岐陽和點の適否を知らざるを以て、四書研究の爲なりとやうに記して、强ひて重を和點に取らんとするは、戰國英雄集に據りしものにて、頗る誇張の嫌あるも亦事情を得ざるに非ず桂菴少時より四書を學びて宋儒の學に通じ、又詩を好み文を能くしたれば、此の度の入明を幸ひに、明國に留學して內外を綜究せん志切なりけん、貿易の公務を果して後は、轉じて文學の淵叢なる杭蘇の間に游び、賢士大夫と交りて、內外淸蘊、通悟せざる莫きに至れり、桂菴書經を讀むに蔡傳を用ひ、國史眼に天與淸啓が書經蔡傳に通ぜしとあるは、桂菴の誤りにあらぬか、抑も天與も學僧なれば、蔡傳に精通せしにや、又四書を講ずるには、常に倪士毅の輯釋曹端の詳說を以せりと云ふ、輯釋は義堂が義滿の爲に講せし者なれば、禪徒は皆其の遺風を學びしにも因るべく、二書並に盛に明に行

入明と宋學研究

杭蘇游學

桂菴と書經蔡傳

はれしより桂菴杭蘇の諸儒に受くる所もありしなるべし、明僧嘗て日本僧の心を外學に馳するを詆れり、桂菴も亦蓋し然り、四書五經大全の欽定されてより、宋學は尤も明代に用ひられ、讀書人として程朱を崇ばざるはなき時節に游學したりし桂菴が、內典の研究よりも專ら力を宋學研究に盡しけんは、誠に卓見と謂ふべし、如何となれば宋元の間こそ禪宗は彼の土に盛にして名僧をも出したれ、元末に至りては爐韛漸く冷なりしより、烱眼なる夢窓は徒弟の南游を留めて、彼の土我に如く者なしと云ひし程なれば、まして明代をや、桂菴如何に良師を求むとも、我五山十刹の諸長老に勝れる者あるべくもあらず、寧ろ未だ廣く我邦に行はれざる新註を研究して虛往實歸せんに若かざればなり、其結果は偉大なる功績と爲りて當時と後世とに益したりき、桂菴明に在りしこと五六年にして、文明五年に歸朝し、人に說くに不宗朱子元非學、看到匡廬始是山の句を以せり、曰く、宋朝以來儒學は晦菴に原かざれば、學問に非ずと爲せり、故に兒童走卒も皆此句を誦す、其の意味は、漢以來儒者多けれど、晦菴を宗と爲すこと、山は多けれど匡廬山の衆美備れるが如しとの譬なりと、此の明話を以て誦せられし明人の流行語は、如

桂菴の着眼

明人の流行語

準行歸の新博士

何に耳新しく邦人に聽取されけん、猶維新後の洋行歸の新博士が、歐洲の新學說を吹聽するにも似たりしなるべし、蘭英の學は久しく傳はりたれど、維新の際は猶寥々たりしが如く、宋學の傳來日久しきも、桂菴時代迄は猶晨星の如くなりしが故なり。

宗派目子は又一新事實を載せたり、其の文に云く。

桂菴南游して蘇杭の間に在るもの七年、終に天童の第一座に居す、歸朝の日天童の第一座より、直に建仁の台帖を傾し、晩年は位南禪に至る、中華に在るの日、學校の諸先生に依りて、四書六經新註の講義を聞くこと熟せり云々(以上原漢文)

桂菴と天童第一座

雪舟が天童第一座に居りしは世の知る所なれども、桂菴が亦其の後を襲ひたりしことは、諸書の記さゞる所、果して此の事ありたらんには、桂菴如何に名を好まずとも、日本僧の榮として、其の島陰集若くは桂菴關係の書に漏れざるべきに、絕えて見る所なきこそ訝かしけれ、桂菴が遙に建仁を傾せしは明應中(漢學紀源は明應七年、雜貨舗は同六年と爲せり)に在るを、明より歸朝して直に建仁の台帖を傾したりとあるも、諸書に合せず、頗る疑ふ可き者あり、雪舟名は等揚、備中赤濱の人、相國の洪德建長の玉隱に參し、常に周文如拙の書を學び、禪理より書聖の域に進めり、是れより先き寛正四年明に入て、四明天童の第一座と爲り、桂菴が燕京より杭蘇に游びし比は、雪舟猶彼の地に在りしかば、桂菴往きて之を訪ひしこともありけるにや、雪舟は桂菴に先ちて文明元年に歸朝せり、桂菴或は其の後を襲ひて第一座に居せしか、猶後考を待たざる可らず(雜誌「禪宗」一六七號上村閑堂氏の雜貨舗始て宗派目子を引けり)雪舟は歸朝後、周防山口の天花山下なる雲谷菴に在り、石州益田郷の益田氏と舊あるを以て、後ち彼の地に游び永正三年二月十八日大喜菴に終れり、享年八十七なり。

桂菴と雪舟

歸朝後の流寓

桂菴の歸朝せし時は應仁の亂にて、東福を除くの外、京師の諸山皆兵燹に罹り、僧徒亂を避けて離散したりければ、桂菴乃ち去て石州に寓せり、石州の何處に在りしやは、諸書之を詳にせず、伊地知潛隱の宋學傳統系圖、巢松以安の下に、以安文明七年周防に使して、始て桂菴に逢ひしことを記せり、然れば桂菴は京より石州に入り、石州より赤間關に歸りて、永福寺に劫塵を避け居たりしが桂菴在明中の詩

九州飛錫

に、歸夢飄然落海東、赤城舊院杏花紅とあり、赤間關の舊院は、其の夢にも忘れぬ所なるに見て知るべし、斯くて文明八年、九州に飛錫して豐筑肥諸州に歷游せり、豐後には鎌倉の末に大友出羽守貞親(初名親平號玉山)といふ禪宗歸依の大檀那ありて、萬壽寺を創建し、足利泰氏が子なる直翁智侃禪師とて、宋僧道隆及び聖一國師に參し、後に入宋したりし名僧を請ふて開山第一世と爲し、其の弟近江守貞宗は直菴と號し、彼の明極歸化の時に、太宰府より出迎へて唱和し、其の餘禪宗の名僧に參せし人にて、榮西六世の法孫なる闡提正具和尚を崇信し、顯孝寺(寺在筑前)を建てゝ開山と爲せり、貞宗詩を好みて江湖の緇流と唱和し、編して一卷と爲し

豐後の萬壽寺

大友貞宗

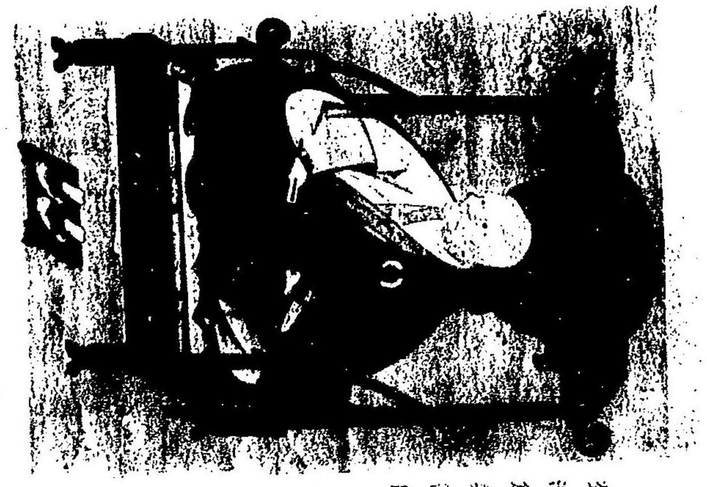
千載佳話集

しを千載佳話集と云ふ、天境靈致之に序して、此の軸は豐州の明山秀水と光を爭ふべしと云へり、(無規矩集)其後大友宗麟に至りて耶蘇に歸依し佛宇を破壞して、文化の史證を滅却したりと雖も、其れ迄の大友氏は、儒雅の風あり、亦實に佛法の外護者にして、豐後は禪宗盛行の地なるが、當時萬壽寺には、師僧の景蒲玄忻住持し居たるより、桂菴も師を訪ふて此に寓しけん、豐後にも兵亂起りければ、去りて筑後の大竹山二尊精舍に至り、源東谷醫者)及び秋月種朝(中務太輔)、幷に天秀、周泉、

筑後の學者

大極等の諸僧と唱和し、翌くる文明九年の春には、肥後の菊池に入りて、聖廟の釋奠を觀るの詩あり、菊池氏の釋奠には來山あり、請ふ小考を試みん。

新疆現地婦人像　　國立中央圖書館藏



新疆現地婦人像　　國立中央圖書館藏

# （二）菊池文學と桂菴

## 上、菊池武時武光の學問

### 征西宮と孔孟▲明國交通と文化

菊池氏釋奠の事は、諸書皆桂菴の島陰集に出でたる詩を以て史證と爲せり、其の詩に云く。

桂菴閲覧の詩

菊城客舍上丁日、觀孔廟春祀之盛禮。

太平奇策至誠中、春奠賁筵陪泮宮。泗水吹添菊潭碧、寒(一寒)雲染出杏壇紅。一家有政九州化、萬古斯文四海同。絃誦未終花欲暮、香烟撲袂畫簾風。

國府緇素詣泮宮、各獻詩文、或獻歌詠、緇郎某有詩求和、仍次韻。

千百年先集大成、道從之者致昇平。神壇布瑞花如雪、人蹈白櫻桃下行。

此の詩に據て之を見るに、菊池氏の隈府に於ける釋奠は、いと盛大なるものなりしと見え、且此の日は僧徒も士人も、詩文歌詠を聖廟に獻じたりとあれば、文學風に開け居たりしさまも推測らる、近人或は菊池氏の釋奠を以て桂菴の慫慂に出

づと爲す者あれども、菊池氏の文學は一朝一夕に非ず、而して四書の行はれたりしも亦桂菴以前に在る者の如し。

九州の舊家

菊池氏は九州一の名族舊家にして、其の鼻祖則隆が太宰少監として、始めて肥後の菊池郡に居りしは、後三條帝の延久二年とかや、其の十二代目は則ち建武中興の功臣第一なる菊池寂阿入道武時なり、武時殉難の際、長子武重を誡めて曰く、我れ今義に赴き命を授く、固り其の分なり、汝速に國に還りて、城を全くし兵を聚めて、以て乃父の讎を報いよと、武重同じく死なんと請ひしも許さゞりければ、涙を揮つて去りき、後ち功を論ずるに及びて、楠正成奏して功臣第一と爲せしが、正成の湊川に殉するや、其子正行を誡めて、國に還り兵を養ひ、以て皇家に盡さしめしは、武時と符節を合するが如し、肥後の先賢木下眞弘(韓村の弟)が、正成は武時を學べりといふ者、其れ或は然らん、正成の學問は前にも云へり、武時も亦豈不學にして如此きを得んや、傳へて云く、武時の師は僧大智なりと。

武時の遺誡と正成の遺訓

武時と大智

大智字は祖機、肥後の人、七歲にして同國大慈寺の寒巖義尹に投せしに、寒巖云く、汝は小智慧あり、宜しく小智と名くべしと、大智諾せず、是に因て其の名を知らる、寒巖は順德帝の第三子、道元和尚の嗣法にして、建長癸丑に入宋、十餘年後に歸朝し、博多の崇福に居りしが、去りて如來寺を肥後に創し、募緣して大渡の長橋を造りしより、嚮慕甚だ多く、遂に大慈寺の開山と爲り、正安二年に八十四にて寂せり、大智の生年詳ならざるも、寒巖に侍すること二三年なりけん、後ち入宋の南浦紹明に參して、機語契はず、加賀の瑩山和尚を師として忽然了悟し、偈を元僧東明和尚に呈して稱許せられ、遂に元に入て游學し、(或云年二十四の正和四年入元)正中元年(據菊池軍記)に歸朝して加賀の那陀寺を創し、晩年肥後の水月菴に退老して、正平年中(二十四の正和四年入元とすれば正平二十二年なるべし)に七十七にて寂せり、大智尤も偈頌に長じて、刻本一冊、叢林に行はる、武時の大智に參せしは何年比なるを知らざるも、大智の爲に廣福寺を創したりと云へば、崇信淺からざりけん、其の水月菴に退老せしは、武重の代なるを以て、父子並に之に師事せしなるべし、而して康永三年には、元僧滑拙の弟子にして百家を涉獵せる天境靈致も肥後の淨土寺に在りしが、菊池氏との關係は記載を見ず。

寒巖義尹

天境靈致

十五代武光は武時の子、征西將軍懷良親王を奉じて、忠を南朝に盡しゝが、當時正

武光と大力元恢

觀寺を創して開山と爲しゝは大方元恢禪師なり、姓は菅、肥後の人、入元僧の嵩山居中に學びしもの、親王幷に武光も崇信いと深かりき、前に寒巖あり、後に大智元恢あり、皆内外に通せし名僧なれば菊池氏は禪學以外に儒學をも學びけん、更に注目すべきは、征西の宮に隨從して西下せる者の中には、五條頼光の如き儒臣あり、(宮薨後、筑後矢部城に居る、今の五條山是なり、子孫仍存す)其の他にも或は後醍醐朝に於ける文學を嗜らしゝ者ありけんこと是れなり、其の證據には弘和元年

征西府の儒臣

國書の失體

(明洪武十四年)征西將軍宮より明主に贈られし書に「臣聞陛下(明史陛下作天朝)有興戰之策、小邦亦有禦敵之圖、論文有孫孔道德之文章、論武有孫吳韜畧之兵法」の語あり、本居宣長痛く臣の字を用ひしを非難して、いと淺ましくつたなき事と云へる、誠に其の言の如しと雖も、亦菊池氏の學が徒らに教外に偏する者にあらざるのみならず、孔孟の道德文章を尊崇すること盛なるは、征西府君臣の家法なることを證して餘あり、蓋し入宋の寒巖、入元の大智は菊池文學の泉源にして、武時武光之を受け、征西將軍の下向には、朝廷の文學を持贈して、武光武政之を奉じ、以て孔孟道德の益明なるを致しつゝ、世々忠義の氣を養ひしなるべし。

孔孟道德の文章



菊池氏と倭寇

元亡びて明興るや、我が邊民の侵掠に苦めり、菊池氏も亦餘勇を明の邊疆に振ひて軍資を獲んとしたりしが如し、明の太祖使を遣はして邊禁を訴へしも、當時菊池氏の勢力九州に震ひしかば、明使を抑阻して通せしめず、侵掠猶甚だしかりしより、太祖趙秩を遣はして征西府に訴ふる所あり、武政乃ち懷良親王の命を奉じ、

使僧祖來

日本國王の名を以て、使僧祖來を明に遣はし、明の邊民をも送還せしは、貿易の利を求めんとてなりけん、太祖大に喜び、翌二年(洪武四年)には彼の祖闡克勒二僧を遣はして祖來を送還せしに、菊池氏は之を博多の崇福寺に抑留すること二年に及べり、足利氏に通せざらしめん爲なりしか、尋ぎて足利義滿の大擧西下と爲りて和を講じ、二僧も亦京都に聘して、其の往復に春屋妙葩と唱酬せしが、是より先き武政は、文中元年(洪武四年)に僧如瑤を明に遣はし、明も亦答使を送り、其の子武朝の代と爲りて、天授元年(洪武八年)にも同人を明に遣はしけるが、明の邊寇猶已まざりければ、太祖恫喝するに勦兵の意を以てせしより、弘和元年の書と爲りて、

明使抑留

使僧如瑤

禦侮の圖あるを示せしならん、其の後元中元年(洪武十七年)に、如瑤が明の胡惟庸の亂に關係せしより、交通姑く絶えつれど、菊池氏の明國貿易は、史上に見えたる

兩三回に止まらずして、盛に侵掠貿易の二策を取りしかと思はる、而して其の交通に伴ひて文化も亦輸入されたりしや明なり。

## 下、爲邦重朝の聖廟創立

菊池氏の四書▲隈部忠直の賢

元志寳中

武朝の子持朝の師僧は元志寳中とて、大方元恢の弟子、小足氏、肥後の人、建仁南禪に學びて、後に入明せし人なるが、持朝は寳中の爲に成道寺を建てたり、其の寂せし時年八十三なりしを以て、持朝の子爲邦も亦寳中を師として、內外二典を極めけん、爲邦は實に學問に達したる武人なりき、岐陽和尙の門人なる惠鳳翱藏主が竹居淸事に、投贈和答詩の序あり、惠鳳が寛正中西游して肥後に來りし時、爲邦唱和の詩七十三篇を惠鳳に示して、批評を求めたるものと見も、其序に爲邦が文武兼全の名將なるを稱して曰く、

爲邦の內外二典

文武兼全の名將

惠鳳の評

爲邦公武藝集成、掌內に六韜三畧を握りて、以て祖父の家風を墜さず、文名俊秀、胸中に五史九經を收めて、而して孔孟の儒雅を中興す(中略)儒書釋典兼學、文經武緯精通、兼全の才明哲の君と謂ふ可き也、其の德の溫厚粹和なる、發して文藻と爲れば、則翰苑に煥乎たり、詩塲に賁乎たり、譬を六藝の圖に騰け、彩を百氏の叢に散す、那ぞ圖らん菊池澆漓の世に、茲の臘月の蓮花を生ぜんとは、(原漢文)

明國交通再興

孔孟の儒雅を中興すとあるに據れば、菊池氏の文學は爲邦に中興せしこと、確乎動かすべからず、且つ菊池氏の明國交通は、爲邦に至て復た興り、康正二年と文明二年との兩度に、使を明に遣はしゝこと明なれば、其の貿易船載せし所の書に典籍もありけん、彼の孔子堂に掛けたりし孔子及び十哲の畫像も、或は此の時に明より齎しゝ者にあらざるか、然れども其の孔子堂を立てゝ之を祀りしは世に重朝の時なりと傳ふ。

菊池野乘

菊池野乘(木下眞弘著)に云く、重朝文學を好み、歌詩を能くし、始て學校を城西に建て、聖像及び十哲像を畫きて、春秋舍菜し、施爲する所、一世を皷動せり、(註)

菊池軍記、菊池傳記、風土記、但し諸書に年月なし、傳記は又言く、重朝は世人に日本の聖人と稱せられたりと、今菊池の邑人、當時掛くる所の聖像一幅を傳

ふ識して云く、文明四年二月吉日孔子堂附藤原武運と、之に據れば聖像を掛くるは武運の時に在るか(原漢文)。

菊池聖廟の畫像

予も亦嘗て菊池の人右田以德氏が、菊池氏の聖像一幅を藏するを聞き、請ふて其の寫眞を觀しに、十哲像の一にもやと覺しく、古色蒼然たり、而して別に寄附年月ある一幅の寫眞をも觀しに、果して文明四年二月吉日孔子堂附之藤原武運の十七字あり、案ずるに武運(一名能運)は重朝の子にして、永正九年八代に卒せし時、年二十五、菊池系圖二種、並に二十五に作り、傳記軍記は二十三に作る)なれば、文明十二年に生れし人とて、文明四年に聖像を寄附すべき筈なし、而して重朝が一名武運と稱せしことも見えず、いと心得ぬことなり、或は云ふ孔子堂の聖像は今細川家に在りと、抑聖像及び十哲像は重朝が畫かせたりと云ふ者果して信か、將た爲邦船戢せしより孔子堂建立を思立ちしか、其は知るべからざるも、爲邦は三十七にして板井村に結べる草菴、後に神龍山碧巖寺)に退隱し、封を年十八の長子重朝に讓りて、自ら碧巖を講じ、年五十九の長享二年に卒し、重朝は五年目の明應二年に、年四十五にて歿したれば、其の孔子堂建立は、父子生存の時なるべく、父爲邦の

聖廟創建の時代

命を奉じて、子の重朝之を創立せしにこそ、孔子堂の墟は隈府の高野瀬と云ふ處に在りて、字をグウジ堂と云ふとかや、一帶の田畝、敗瓦殘礎も求む可からず、往年心ある人々石を立てゝ孔子堂之遺址と大書深刻し(熊本藩の書家大槻藍溪翁筆)と傳ふ、游覽の客をして低徊去る能はざらしむとなり。

孔子宗の墟

聖廟創立の重朝は、菊池氏二十一世にして、夙に家學を承け、又清源寺の季材育和尚に參したり、季材和尚上洛の時に、重朝及び老臣隈部下總守忠直等、詩を作りて、別を送れり、重朝の詩に云く、

重朝の詩

驛路迢々萬里餘、長安到日定何如、天顏咫尺五雲上、著紫伽梨拜詔書。

季材之を五山の學僧に示せしに、衆皆感嘆已まず、希世靈彥之を評して曰く、美なる哉此の詩、誠に微意あり、所謂天顏五雲は、其れ諸藩に處して、而して闕を戀ふの心か、大節藤公の如きは、今に於て罕見なる者なりと(村菴稿)、重朝の忠誠は父祖に恥ぢず、平生の學ぶ所知るべし、横川景三其の詩に和して云く。

藤公の大節

依肥州大守菊池藤公送新惠日季材老人赴京師詩韻

方外論交行化餘、參寥玉局不曾如、西州風俗聽人說、戶々民村夜踊賣、補菴京華

肥後の教化普及

集）

民村戸々、絃誦の聲ありと風聞せしほど、教化の普及せるは、清時猶希なり、況や戰國の當時をや、日本國中、豈菊池氏ほどの文化あらんや、是れ爲邦重朝二公の中興に因るも、之を輔佐せし隈部總州忠直の賢なくば此に至らじ、希世和尚は曰く、忠直は菊池公の賢佐なり、最も武略を以て稱せられ、兼ねて文雅ありと、天隱龍澤は曰く、肥の國たるや、文あり武あり、民は禮節を知る、實に邦君仁化の覃ぶ所なり、隈部公習武の暇、尤も文雅を嗜むと、桂菴も亦詩を贈りて曰く、載道元依大器成、人如白璧價連城、一鄕好學九州化、能使斯文日月明と、以て忠直の天資玉の如く連城の寶たりしを知るべし、上に好學の君あり、下に尊儒の臣あり、心を一にし德を合して、以て文化を布き、春秋釋奠を行ひて、孔孟の道德を明にす、戸々書を讀み民禮節を知りしも亦宜ならずや。

隈部忠直の賢

桂菴と菊池氏

桂菴の筑後より肥後の菊池に入りしは爲邦四十八、重朝二十九の時なり、會釋奠の盛典を戰亂の餘に觀て感慨如何に深かりけん、欽仰の情は五十六字の中に溢れたり、好學尊儒の菊池氏君臣は、優禮を以て之を遇し、桂菴も亦彼の不宗朱子元非學の句を以て之に勸めけん、源基盛號を朶雲子と云へりし人、能書にて四書の本文を寫し、桂菴の口授を受けて、旁に和點を加へしと云へば、從ふて程朱の說を聞く者多かりしや知るべし、然れども四書は桂菴に因て始て行はれしにあらで、桂菴來游以前より、早く既に展轉傳寫せしならん、大智大方に師事せし武時武光武政等、皆儒と禪とを兼學せさる莫く、征西宮の下向には、文學持贈の機會を得、武政の明國交通は、文物輸入の利益あり、以て文化の淵源を開き、入明僧の寰中は儒學中興の爲邦を敎育せしが如き、宋學の菊池氏に入るや久しかるべきを想像せしむ、況や爲邦は親しく敎を岐陽の高足なる惠鳳に受け、重朝忠直は岐陽の法孫にして惠日第一座たりし季材に參し、雲章雙桂の徒なる希世横川天隱等と應酬したるをや、蓋し宋學の菊池氏に行はれしや久し、宜なる哉元弘以來忠烈赫々、世々厥の美を濟せしや。

原基盛手寫の四書

宋學の菊池氏に行はるゝや久し

詩歌は又菊池氏の家學なり、武時死に臨みて妻に寄せし歌に、「古鄕はこよひはかりの命ともしらてや人の我をまつらむ」とよめるが如き、至情惻惻千古人を泣かしむ、其の十二男武士の年二十一にして世を遯れたるを、大智が劍難の相ありと

菊池氏の詩歌

武士の讓國

云へる妖言に惑ひし者なりと傳ふるも、想ふに決して然らず、彼が諸兄を越えて長兄武重の嗣と爲りしは、蓋し心に忍びざる所なり、故に遯世して國を兄の武光に讓りしは、亦儒學の感化なるべし、其の歌に「袖ふれし花もむかしをわすれすはわか墨染をあはれとは見よ」と云へり、其志を知る可らずや、獨り怪しむ忠烈の家風、道德の庭訓、如此く深く且久しきに、後世往々兄弟墻に鬩ぎ、天又名家に福せず、

名家の滅亡

遂に强隣の乘ずる所と爲り、重朝の子能運に嗣なくして、阿蘇氏と大友氏とに國を奪はれ祀を絕たれしを、深く悲むべきなり。

桂菴と忠直

扨も桂菴は菊池氏の隈府に在ること一年許、忠直を初め、源武貞、源重清、藤原重貞等の名士と唱和し、僧專岳と阿蘇山の勝を探り、文明九年の暮には、隈府を立出でて薩侯島津氏の禮聘に赴けり、薩侯の桂菴を聘せしは、其が豐後より筑後に入りし時に在り、九年の春には薩摩に赴かんとしゝも、兵亂の爲に阻せられて隈府に滯在せしなり、忠直は尤も桂菴を尊信して、其の二愛亭に欵留し、或は詩を官閣に

師弟の情義

論じ、或は禦冬の衣を贈りしが、其の去るに臨みては惜別の作あり、別後も音問を絕ず、師弟の情義に厚きこと、後世の模範と爲すに足れり、誠に菊池氏の賢佐なりけり。

## 附載

總管府隈部公、辱賜一領之禦冬衣、北段至精、南地所重、潔如香羅之疊雪、溫似青陵之裘春、諒非夫蘇章二天相比者、何以及范叔一寒如此哉、光被惟夥、感服不已、謹賦小詩、呈鈐閣下。

桂菴

色與香羅疊雪同、溫存拜賜白頭翁、滿天霜月僧床夜、身在春風仁愛中。

菊府隈部公、有送學雪詩伯西行詩、曰、寄言方外舊相識、一錫先君在薩陽、予甞受閣下之知、倍千恒、一別以來、居遐荒之地、而遠再覿之期、今也歷五秋螢、有來自閣下者、必告以言之及于予、是以予亦馳心惓々、寅昏不克喪于懷、況今珠玉餘潤、華衮粲然、何可敢默耶、仍次高韻者一首、托學雪、肥之行在近、爲予說了、不亦幸乎。

桂菴

佳菊庭前花吐黃、官家想見好風光、五年一別悲秋客、立盡朝陽與夕陽。

## （三）島津氏の桂菴招聘

桂菴以前の薩摩文學▲桂菴の教育法

初め桂菴が島津氏の聘を受くるや、肥陽城外薩陽城、聞説今年收甲兵萬里雲飛鵠言遮、風流太守愛僧清と賦して、香を詩神に獻じ、以て彼の國の安平を祝したるは、薩侯禮意の盛なりしと、桂菴が道を大國に行ふを喜びしとを知るに足れり、其の薩摩に着せしは文明十年戊戌二月二十一日にして、十二世の太守忠昌の時なり、

桂菴の入薩

案ずるに薩隅日三州は西南海隅に僻在するも、古來佛寺甚だ多く、最も古きは坊の津の一乘院にして、日羅の開基と傳ふ、坊の津は筑前博多伊勢の阿濃津と共に、皇國の三津と稱し、隋唐交通の要口にして、入宋入元も亦往々此の地を經たれば、古來文明輸入の門戸たり、各種の文物を齎す者、或は其の餘光を此處に散布しけん、島津氏以前は豪族の三州に割據せし者多し、是を國人と曰ふ、亦皆僧を以て師と爲せしか、想ふに風氣夙に開けたり、建久中島津氏の高祖忠久封に就くや、首として淨光明寺を建て、且廢寺を再建せしは、國人の心を繫ぐ所以なりけん、三世久

文明輸入の門戸

國人

蒙古役の功臣

經蒙古寇に盡瘁する者前後十年、遂に筥崎の營次に卒しき、前年從四位を贈られたり、四世忠宗も亦父と共に筥崎の戍衛に任せしが、尤も和歌を善して、後撰集續千載集に三首あり、薩摩歌人の祖とも謂ひつべし、南北朝には足利氏に屬せり、當時九州の中獨り國人に大伴姓なる肝屬八郎兼重といふものありて官軍に屬しき、是れ薩摩に於ける南朝無二の忠臣なり、其旌表せられざるは、豈憾事に非ずや、

薩摩歌人の祖

南朝の功臣

明國交通は七世氏久に始まれり、八世元久に至りて南北統一し、九世久豐十世忠國の比に朝鮮貿易發達せり、是より先き入明して柳子厚の文を學べりといへる天祥一麟は薩の大願寺に出世し、洞派の高僧石屋眞梁を公室伊集院氏に出しゝも亦此の比なり、石屋は延文己亥(南朝正平十四年)に南禪の蒙山和尚を禮し、十六祝髮、貞治壬寅(南朝正平十七年)中嚴圓月に建仁に師事せしが、其の字は元僧東陵の命せし所なりとぞ、中嚴は禪林宋學の祖なれば、石屋も亦外典を學びしなるべきも、彼は元久に勸めて其の一子を出家せしめ、遂に嗣なからしめしより、罪を正義に得たり、元久石屋の爲に福昌寺を立てゝ開山と爲してより、薩摩も亦多く名僧を其の門下に出せり、高足仲翁和尚は即ち元久の世子にして、年十七足利學校に學べり、薩の儒學は蓋し仲翁に興りしが、南英謙宗は石屋に從ふこと五年、備後の種月寺に出世す、竹居正猷は亦伊集院氏、化々禪と號す、初め石屋に投じ、後ち惟肖得嚴に南禪に依り、天游爲璠は隅州甑島の人にして、初め竹居に從ひ、後ち惟肖に雙桂院に依り、二人並に桂菴の同門たり、不思議なる哉、我が薩摩は防州の產なる桂菴を得て儒學を興せし時代に、我は又竹居天游二僧を防州龍文寺に興へて法燈を揭げ、以て楚材晉用の義を交換したりき、斯くて禪宗大に行はれて儒學も亦隨つて地に墜ちず、禪僧韻語を好むより、敎を禪僧に受けたる士人も亦能く詩を賦せしは、桂菴を迎へたる薩の名族が、皆能く唱和したるにも知らるゝなり、桂菴の薩に入て先づ錫を留めたる龍雲寺は、十一世立久の創建する所、立久の夫人に子なし、側室男を生みしを、夫人嫉妬して之を殺さんとしゝより、龍雲寺に送りて喝食と爲し、名を源鑒と曰ひしに、立久の病める時、還俗して又三郎と稱せしは、即ち十一世忠昌なり、時に年十三にして、文明六年に封を襲ひ、文明十年桂菴を聘せし時は、年十六なり。

南英謙宗

竹居正猷

天游爲璠

楚材晉用の交換

十一世忠昌

忠昌の師僧

忠昌寺に在りし時より書を讀みつらん、然れば襲封後も讀書興學の志ありしな

るべく、肥薩往來の禪僧より、學僧桂菴の筑後に在るを聞きて招聘の議と爲りしは、學問の師と爲さん爲なりけん、桂菴先づ市來の龍雲寺に入り、前年の韻を用ひて、花柳風前春滿城、太平家國不言兵、白頭老炎紅塵客、幾入此門心跡清の詩あり、薩の君臣は只道德を論じて兵革を言はず、以て千里を遠しとせざる老師を欵待し、亂世塵途を奔走したる桂菴は、此に至りて心迹の安を得たりけん、兩情藹然として二十八字に溢れ、並に主客の賢を見るなり、桂菴一年許りは龍雲に在り、翌十一年には、忠昌桂菴の爲に、島陰寺（一名桂樹院）を鹿兒島の田の浦に創して之に居らしめ、帝釋德林二寺の田產を割きて寺祿（十人口）と爲せり、桂菴が太守忠昌の爲に書經蔡傳を講せしは此の比に始まりしなるべく、國中の賢士大夫、來りて程朱の學を受くる者亦多かりければ、日州の小野克盛（漢學紀源は野邊左衛門尉克盛に作れり）が、文明十二年某官人に寄せし詩の序に、國都頃與仲尼之道移東魯之風、と云へり、桂菴即ち其人に代りて次韻酬答しき、序中に斯文に齒すとあれば亦島津家に仕へし學者なりけん、桂菴の性理に關する學說を窺ふべき者なしと雖も、敎育の宗旨は、人若讀書師孔孟、士寧輕命學孫吳、の句に徵すべく、文武兼備の薩摩

主客の賢

島陰寺と寺祿

齊師蔡傳の講義

仲尼の道興る

文武兼育の興隆

敎育は桂菴に因て興隆したりけり。

## 附錄

左金吾小野克盛、予之所宗、而舊交之最厚者也、不面三四年于茲、通使來、自山東、贈以佳篇一章、詞翰共妙、几席有照、其序曰、國都頃與仲尼之道、移東魯之風、寔傳者之妄也、剩於予之虛譽、慙汗惟夥焉、一亂之後、衰廢日加、而徒充官而已、縱雖齒於斯文、何益之有耶、攸思歸臥鄉曲、共樂餘年、何幸過之乎、公圓之、竟次嚴韻、作三章、　桂菴

江山千里舊知音、喜見書來情義深、他日休官我歸去、河南河北共君吟、

華牋花落兩詩篇、書似張顛艸聖傳、春坐花邊秋對月、非君誰記昔游年、代人

老來難讀聖賢篇、愧我虛名箕斗傳、鄉里兒童若相問、冷官無補奈衰年、季秋日代人

寄一枝翁詩（一枝肥後清源寺僧也）　桂菴

昔游回首事空徂、不奈亂來風俗殊、人若讀書師孔孟、士寧輕命學孫吳、異鄉至樂閑爲是、故國歸心夢亦無、何日迎君掃門逕、薜蘿四壁一菴矚、

在前十五篇前四章統論綱領旨趣
後六章細論條目工夫其第五章
乃明善之要第六章乃誠身之本
在初學先為當務之急讀者不可
以其近而忽之

延德板大學卷尾　　[illegible]

## （四）日本最初の大學刊行

朱子著書刊行の祖▲眞の首倡者▲家法和點

伊地本大學

桂菴薩摩に在ること四年にして、文明十三年には、國老伊地知左衛門尉重貞と謀りて、朱子の大學章句を梓行せり、之を伊地知本大學、又は文明板大學と曰ふ、是れ我が邦に於ける朱子の著書を刊行せし先鞭なり。

文明板

伊地知重貞の盛學

伊地知重貞は畠山重忠の兄重光の末孫にして、其の祖先越前の井筒城に居りしことあり、非筒轉訛して伊地知を名乗りけるが、世々鎌倉幕府の右筆たり、尊氏の時罪を得て來りて島津氏に仕へし者あり、後ち國老と爲りし家筋にて、重貞は桂菴に學びてより、深く程朱を信じ、遂に師の勸に從ひ、資を捐てゝ此の書を刻せしなるべし、豈不朽の盛學に非ずや。

文明板大學は伊地知潛隱の推想せし如く、當時盛に薩隅日三州に行はれたりしと覺しく、十餘年の後には、其の板已に磨滅して用ふ可らざりしより、桂菴は更に

延德板大學

延德四年（此の歳改元明應）を以て、其の桂樹禪院に再刊したりき、之を延德板大學

學界の至寶

藏本の奥書

と曰ふ、文明板大學は、天保中に潛隱力を搜訪に盡すも、得る所なかりきと云へば、早く已に亡せて存せざりけん、延德板大學すら、當時希有の物たり、況や今日をや、殆ど學界の至寶たり、予が月川に獲たりし藏本の奥書に曰く。

此一冊サ州羽月村大聖寺從住持被下候、持主、同村號若王寺住僧東持院賴傳之

延德板大學の板式

慶長十一年丙午霖雨八日給之

羽月は伊佐郡に屬し、世尊山大聖寺は曹洞宗の福昌寺末にして、熊野山東持院若王寺は、眞言宗の大乘院末なり、延德四年より慶長十一年まで百十五年にして、慶長十一年より今年迄三百五年、合して約四百二十年の星霜を經たれば、蠹蝕に加ふるに頑童の塗抹を以てす、善本に非ずと雖も、罕覯の靈物、寶護せざる可らず、本書の板式は、匡廓横四寸二分、竪五寸三分四周單邊にして折目には、上に大學の二字、下に丁數を記し、行間に界なく、字の大きさ三分餘、楷法端正、筆氣溫雅なり、註の字の大きさも本文と同じく、只一字を下げ、右經一章は二字を下げ、凡傳文云々は三字を下げたり、潛隱の說に云く、此は本文に連ねて註をも讀ましめん爲にして、

薩藩の素讀法

卷尾の文

薩藩の素讀法は今も亦然り、蓋し古の遺俗なりと、卷尾には左の文あり、

文明龍集辛亞夏六月左衛門尉平氏伊地知□(一字あるに似たれど不分明)

重貞命工鏤梓於薩州鹿兒島

延德壬子孟冬桂樹禪院再刊

桂菴の自筆

文物輸入の四處

文明鏤梓の三行三十字は、行書にして小さし、蓋し重貞の自署なるべし、延德再刊の二行十二字は、楷書にして本文と同形同筆なり、潛隱は本書の字を以て桂菴の自筆なるべしと爲せり、今其の再刊識語の本文と同筆なるに徵すれば、桂菴自筆の說、確乎動す可らず、豈貴重すべき古本ならずや。

按ずるに南北朝以來二百三四十年間は、戰亂相踵ぎて、文敎振はず、武家の刊書は、正治寛元の比、鎌倉將軍佛經を摺寫し、弘安二年秋田泰盛大日經疏を開板し、同六年北條顯時傳心法要を刻し、曆應二年高師直楞嚴經疏を刻するの類あるも、未だ儒書の刻あるを聞かず、此の時に當りて風氣早く開け、文化覩る可き者は、京師を除くの外、海內唯筑前博多、泉州堺、防州山口、薩州鹿兒島の四處あるのみ、四處皆外國交通の門戶にして、文物輸入の便あり、資力も亦隨て裕なりしが爲なり、京師五

五山板

正平板論語

天文板論語

大內本

山の文學は、朝幕の外護に依倚して、刊書の業も亦興り、世に之を五山板と稱したるが、其の書は虎關が聚分韻略を除くの外、概ね皆禪書にして、亦未だ儒書に及ばず、當時儒書を刻したるは、正平十九年甲辰、泉州堺の道祐居士が刻せる論語集解を始と爲す、世之を正平板論語と曰ふ、後ち百七十餘年後の天文二年に、同書を刻せしも亦清原宣賢が所謂泉南の佳士にあらずや、世之を天文板論語と曰ふ、所謂大內本は義隆の時に在りて、亦天文中に屬す、應永中の左傳明應八年の論語を說く者あるも、其の事確ならず、今此の文明板大學は、正平板論語に後るゝこと百十七年、天文板論語に先つこと五十三年にして、鉛槧史上に重要なる位地を占むるのみならず、正平天文、並に古註に屬し、其の程朱學派の神髓たる四書の一部を刻したるは、實に此の文明板大學章句に始まれり、四書を讀むに、大學を先にして中庸論孟に及ぶは幼學の順序なり、是れ蓋し古來の定法にして、義堂も亦嘗て之を義滿に告げたりき、桂菴先づ大學を刻せしは、其順序に據りしものなるべきも、朱子を宗とせざれば元と學に非ずとまで信じたる桂菴として、先づ程子の表章して朱子の章句を著せる大學を刻し、以て治國齊家修身の第一義を明にせんとする

洪寶の遺

潛隱の表彰

一齋の手鈔

述齋の影寫

內閣の寫本

深意に出でしか、然るに世人唯正平板天文板の論語あるを知りて、伊地知本大學あるを知る者なく、宋學の儒宗と仰がるゝ林道春の日本書籍考、御書物奉行として紅葉山の祕庫に據りし近藤守重の正齋書籍考を初め、木板の起原を叙し、本邦鉛槧の沿革を記す者、概ね皆此の洪寶に說き及ぶ者なきは、豈地僻にして弘く潛外に流布せざりしが爲か、天保中伊地知潛隱は薩摩が宋學の首倡たるを表彰せんと欲し、桂菴の影寫を佐藤一齋に請ふに當り、示すに此の書を以するに及びて、一齋始て古人に此の盛舉ありしを知り、感嘆措かず、手自ら首尾二葉を鈔して、文一籍を其後に題し、本邦刻「新註」之嚆矢也と云ひ、本邦宋學の盛興は、惺窩羅山兩先生の時に在りと雖も、而かも其の我に入るの始は、則ち覺かに百有餘年の前に在り、而して薩は殊に先鳴たりと云へり。

一齋轉じて之を林大學頭述齋に示せしに、述齋も亦之を奇とし、命じて一本を影寫せしめ、之を學館に收めたりきと云ふ、今內閣藏書目錄の漢書の部に、延德板大學寫本一冊あるは、豈此の影寫本にあらざるか、桂菴畫像は雪舟門人秋月等觀の筆なり、秋月は高城氏薩摩の人、罪を得て上國に出奔し、雪舟に從ふて入明せし時

桂菴肖像と秋月等觀

に、桂菴とは彼の地にて相識りしや否は明ならず、厥の後ち秋月明應元年を以て國に歸り、桂菴と相唱酬せり、其の畫きし像の眞に迫りけんは論を待たず、原畫は元と大龍寺に在りしを、潛隱大山等雪をして摸寫せしめ、一齋に寄示して贊を求めたり、一齋の贊に云く。

桂菴禪師影贊

吾道一貫　無隱乎爾　身披禪衣　心服闕里　洛派東漸　寔自師始　心月千古　桂影遥被

桂菴禪師影贊

後ち碑文を作るに迨びて、影贊を以て銘詞に代へつ、潛隱は大學刊行を以て宋學首倡を證し、一齋も亦新註を刻せし嚆矢たるを知りて、薩摩の先鳴に驚服せしは、世恐らくは異辭なからん、予は繰返して曰ふ、程朱學の傳來してより頗る年所を經て、後醍醐朝に講せられ、後醍醐朝に講ぜられてより約百六十餘年の間に、健叟中嚴義堂岐陽の徒ありて、宋學を皷吹せしといへども、未だ嘗て其の書を刊行して其の學を標榜する者あらず、其の之あるは實に重貞と桂菴とに始まる、是れ宋學傳來史上の偉功にして、首倡中の首倡に非ずや、一齋の洛派東漸寔に師に始まる

首倡中の首倡

島津國史の大書

と爲す者は、刊書の功を推奬する所以にして、薩摩の大儒山本秋水名正誼、稱傳叢、左傳に長せしより、左傳傳叢の稱あり)の編せし島津國史に、蓋唱程朱學於薩摩者自禪師始と大書せしは、健叟中嚴義堂岐陽の功を掩はざる所以なり、後人宜しく前輩立言の深意を翫味して、先賢の功績を記憶すべきなり。

家法和點

桂菴已に大學を刊行し、四書を門下子弟に授くるには、家法の和點を以せり、後世傳ふる所の家法和點(一冊)に二本あり、一は慶長十六年九月八日俊正といふ者の奥書ある寫本にして、表題に四書五經古註與新註之作者幷句讀之事とあり、一は如竹散人が寛永元年江戸に刻したりし板本にして、即ち是れ家法倭點と題する者なり、寫本は板本に比して紙數も多かりしと云へば、出板の時に要を摘みし者ならん、此は桂菴が程朱學の由來及び四書の讀法を門人に授けん爲の筆記なりけん、古註は虚字助辭を略する習にて、譬へば子曰學而時習之不亦悅乎とやうに讀む風なりしを、桂菴は學んで而して時に之を習ふまた悅しからずやとやうに、而の字之の字をも讀ませ、則の字も古註には「ときんば」とのみ讀みしを「すなはち」と讀ませたるなり、又古來子のたまふばくと讀ませたりしを、此は鄉談なり、平家

四書讀法の一定

物語にも賴朝のゝたまはくとこそあれとて、子曰を子ののたまはくと讀ませ、君長との應對には子曰くと讀ませたり、又反點レ點及び一點の法をも一定し、音は右にして訓は左に一を引くべしと爲せり、譬へば古點に不亦悅乎とあるを、不亦悅乎と附け、毋自欺也を、毋自欺也と附くるが如し、其の他古點の誤を正し、漢音吳音、何れにても讀癖の便に從ふべしと定めしが如き、いと面白けれど、煩はしければ一々擧示せず、古點のみ行はれし世に、斯く新註の讀法を一定して、後學の蒙を啓き後世の範を垂れしは、獨り程朱の忠臣なるのみならず、誠に敎育上の一大勳功なり。

## 附載

### 題延德板大學鈔本後

佐藤一齋

鹿藩有伊地知季安者、往日寄示其同族先輩左衛門尉重貞所刻大學章句一本。蓋其所編漢學紀源、以明其國爲朱學首唱、受而觀之、大學本文章句並大學板樣古朴可敬、卷末記文明辛丑重貞鏤梓延德壬子桂樹禪院再刊、案文明係後土御門天皇年號、實爲東山義政盛時、距今適三百六十餘年、因驚爲本邦刻新註之嚆矢也、及讀漢學紀源、則知薩人寇肇傳宋學、遞相授受、以至於今、其言娓々足以取證矣、此本再刻爲桂樹禪院、而所謂桂樹、即釋桂菴字玄樹是也、桂菴嘗航明國、居七年、尊信程朱之學、初其入洛也、董席南禪寺、後去老於薩、時掇桂樹禪院、以敎援一方、詳載於紀源中、可就攻焉、由是觀之、本邦宋學之盛興、雖在偃窩羅山兩先生之時、而其入於我之始、則尙覆在於百有餘年前、而薩殊爲先鳴也、但以其僻在南裔、不如京畿人文之盛、其學雖存、而繼之者或乏乎人、遂亦如是之寥々也、獨至於今之伊地知氏、能紬釋舊事、揭標先賢、乃撰述以成編、不使其至於湮沒、則豈可謂國無其人哉、聞伊地知氏爲薩之著姓、余未識其人、然其爲重貞之同族、則顯然也、今遠見示此本、其意豈徒然乎、因別影鈔一通、以存始刻之式、幷錄略於末云

天保辛丑春仲中澣十六日　　愛日樓主坦

大學文明初刻在辛丑、今年亦歲在辛丑、余今日作此跋、偶檢曆本、此日亦爲辛丑、奇哉復書。

文明中有桂菴禪師者、崇信宋學、當時薩人伊地知左衛門尉、受學於禪師、始棄大

學章句。寔本邦刻新註之嚆矢也。歷年已久。再刻亦爲罕覯。曩者伊地知季安偶獲此本。介人寄示之。余。余又轉示司成林公。公奇之。命摹謄收於學館。今還原本。因并及此俾之永珍襲云

天保辛丑天開月下澣

江都佐藤坦手識

## （五）桂菴の後半生

### 一、桂菴の晩年

桂菴の歷住

是より先き桂菴居りし所の島陰寺は、海岸に在りて風濤の虞ありしより、長享元年寺を城西射圃の傍に移せしが、是の歲十二月には日州伏肥の安國寺を董し、明應元年には鹿兒島に在り、七年遙に建仁を領せしかば、其の友蘭坡道舊の疏を作りて之を賀せり、其の文蘭坡の遺稿に逸したるに、宗派目子には之を錄し百緡參軍五經博士の語ありと記せり、其の全文こそ見まほしけれ、九年南禪に陞りしことは漢學紀源に記したるが、建仁にては二百四十世に居るも、其の南禪に陞りしことは、同寺の住山簿に脫漏せりとぞ、漢學紀源に據れば、桂菴南禪董席の爲に一たび上洛せしが如く見えて、既而歸藩の文字あり、然れども南禪の松蔭景脩が和韻詩の序に、

建仁二百四十世

「是より先き六七年、東山玉府の釣帖を榮領し、雪檮蘭坡翁、駢驪を製して賀辭を抒へたり、寔に九峰の一疏なり、是に繇て吾山故舊相賤して曰く、禪師の如きは本是

れ宗匠なり、出てゝ而して席を董さば、則ち亦盛ならずやと、然り而して往きて之を勸めんと欲すれば、則鯨浪海を阻て、狼燧山を塡む、比年首を矯けて而して慈航の來歸を候視するのみ」(原漢文)とあり、明應七年建仁の帖を領してより六七年とすれば、此の和韻の詩は永正二三年(漢學紀源は永正三年と爲せり)に成りし者なり、永正二三年迄も慈航の來歸を望まれし桂菴は永正五年に寂せり、遂に入洛せざりしに相違なく、漢學紀源の既而歸藩は失考なるに似たり、且つ景修の序に「桂菴和尙大禪師は、廼ち吾が龍山の才、望なり」とのみ云ひたる、南禪の釣帖を領せし人に對する文字に非す、「出てゝ席を董さば亦盛ならずや」の意は、未だ釣帖を領せざる人に董席の望を屬せし意味なり、然れは南禪一山の輿論が、董席を望みしに過きずして、明應九年南禪の釣帖を領したりと云ふ者、亦未だ確ならざる者の如し、然らされは前龍蟠の景修が、明應九年の釣帖を知らずして、如此き文字を作る筈なし、故に永正二三年迄は桂菴未だ南禪に陞らずして薩摩に在り、明應九年說も亦失考なるべし、而かも現に桂門の高足巢松以安が、享祿五年桂菴廿五年忌辰の詩の序に、前建仁後南禪桂菴和尙大禪師と書し、宗派目子も亦晚年位至南禪と

桂菴上洛せず

後南禪考

明記したるを見れば、永正三四年比に、桂菴は一山の輿望を負ひて遙に南禪を領せるなるべし、記して以て後考に供す。

東歸菴

扨も文龜二年には東歸菴を伊敷村の梅が淵の上に構へて、(今に小字を御菴と云へるは其跡なり)此に退隱せしが、永正五年の二月には、桂菴を招聘せし太守忠昌卒し、同じき六月十五日、桂菴も亦菴中に示寂して公と終始せり、時に年八十二、菴後の山に葬りき、墓上に杉を栽えて冢と爲せしもの、歿後百七八十年を經て荊棘の中に埋沒せしを、國老島津圖書久竹、同主計久年等、之を愛甲喜春に問ふて其の所在を知り、享保七年十一月有志の緇素相謀りて石を立つ、今の墓是なり、題して

桂菴の墓

正興三十世前南禪桂菴玄樹大和尙禪師墓と曰ふ、其側面に左の文あり。

師之墓胃有大杉樹、近年樹亡、株痕僅存、殆乎泯沒其處矣、故立石識之

于時享保七年壬寅十一月十日現住大龍寺六世判山叟宗玉書

天保九年遣士館教授市來政正を初め、藩中の學士大夫數十人(小松清穆、島津久宗、小松清猷、島津久籌、町田實右、町田實次、平原景福、久保行英、伊集院兼亩、三原定從、黑田清直、伊藤祐乘、兒玉貞雄、相良政乂、江夏直義、田中資存、井上祐賢、山田有裕、田中國

道、宮內維濟、木原澄規吉田清矩、友野長裔、山本正巳、毛利正經、森長陽、横山安容、肥後、正心、森元永、肝付兼寮、堀起善、左近允尙志、伊地知季安(以下字體不分明)相謀りて墓を修め、石燈を立つ、石燈に文あり。

石燈の文

嗚呼桂先生、自主唱道學我邦內、象到于今、被其餘風、可謂有萬夫之功而已矣。嗚呼英風何處、幽丘仍存、今建石燈於丘墓之傍、以照其遙夜、乃是同盟之志也、嗚呼守墓之人、能並護之、則庶幾乎其不圮矣。

天保之九年季冬六月　　市來政正記之

桂菴の碑

天保十三年伊地知潛隱、桂菴禪師碑銘を昌平學敎官佐藤一齋に請ひ、同志と謀りて之を貞珉に勒し、以て墓側に立て、且つ畫人大山等雪をして大龍寺所藏秋月等觀筆の桂菴畫像を摸寫せしめて、之を守墓の人に附したりき、秋月の原畫は廢佛と共に亡せて傳はらず摸寫の畫像は、今も墓下の民家に在り、長髯修眉、一白銀の如く、溫乎たる童顏、其人と爲りの如く、千載の下、人をして其の學德を欽せしむ。

桂菴の畫像

## 二、桂菴と京師名流

### 二大醫と五山名僧

桂菴の島陰集中、緇素唱和の作固り多し、而かも最も興味ある者は、陳祖田と竹田昭慶との二大醫を送れる詩なり。

送大醫陳祖田詩　文明癸卯

古方靈藥舊家傳、赫々皇華碧海天、祇爲上醫元活國、細論太守近安邊、九夷鬼界三千里、一夢龍山二十年、兄是高僧吾故友、屋梁殘月曉猶懸、洛陽使者到天涯、東望歸程路轉賒、落葉千山五更雨、早梅十月一枝花、客中送客堪爲客、家外尋家未到家、故舊周南若相問、衰殘白首命如紗。

送大醫竹田公還京師詩

方術如神來活國、榮旋赫々照江東、天機巧織楓人錦、蠻菓新羞荔子紅、祖席題詩難待月、官船解纜欲呼風、愧吾塞外無名草、難入良醫藥錄中。

海外三州都太守、東誅元惡固吾城、心淸藥石山川氣、夢穩轅門風雨聲、醫國醫人

又醫病論天論命却論兵朝廷若問安邊策功在皇華誰敢爭。

陳外郎

陳祖田は杏林と號し、員外郎と稱す、其の先は元末の員外郎陳順祖字は宗敬とて、江南路總管陳友諒の宗族なるが、明初亂を避けて我が邦に歸化せり、宗敬は宗寄（一に宗壽）を生む、宗寄字は大年、狀貌魁偉にして能く唐音を解せり、足利義滿命じて醫術を明に學ばしめ、歸朝して其の術大に行はる、常に細川右京大夫滿元（法名岩栖悅道）の第に出入せしに、滿元其の醫學に精しきを以て、先武州（頼之）の所藏せし聖濟總錄二百卷を付與せり、祖田は實に宗寄の孫なりと、一條兼良より聞きつる由、希世靈彥が村菴稿に出づ、名醫傳には宗寄の子常祉、常祉の子方治といふも

頼之の配濟總錄

外郎の由來

の宇野氏を冒し、其の孫定治北條早雲に事へて小田原に住すとあり、方治は宗寄の孫なれば、此の陳祖田の事にや、將た其の兄弟にや、其の祖先が元の員外郎なりしより、世々員外郎とは稱せしなり、彼の外郎と云へる齎藥は、祖田が祖父の宗寄、明より獲たりし奇藥なるを以て此の名あり、其の曾孫の小田原に召抱へられしより、小田原の名物とはなりしなりけり、祖田も亦箕裘を繼ぎて醫術に精しかりければ、薩摩の太守忠昌の病めりし時、近衛家の命を以て來り診せしものなりといふ。

竹田昭慶

竹田昭慶法印は、太政大臣藤原公經の子なる昌慶法印の第三子なり、昌慶は兄公定に關東の配所に從ひて竹田に居り、赦に遇ふて京に還り、儒より醫に入り、明に游んで秘方妙訣を金翁道士に受け、太祖皇后の難產を治して安國公に封せられ、歸朝して法印と爲りしが、三子ありて直慶善慶昭慶といふ、昭慶は養浩又は快翁と稱し、博學多聞にして、十能の士と稱せらる、足利幕府の命を以て、亦來りて忠昌の病を診せし者なり。

足利氏の醫學

足利氏の一功績は醫學の奬勵なり、陳氏竹田氏の外に、入明して醫學を傳來せし名家多し、坂淨運は張仲景の方を傳へて、續添鴻寶秘要鈔を著はし、潤德齋月湖は全九集濟陰方の著あり、田代三喜は李朱の術を傳へ、吉田宗桂は和藥を辨知して日華子と稱せられ、金持重弘は針灸術に妙に、和氣明親は熊宗玄に學びて歸朝せし等、皆當時に益して後代を啓きし者なり、是れ獨り將軍家の奬勵に出でしのみならず、管領細川氏の心を醫術に留めしにも因らん、絕海に師事して人生五十愧無功の名什を傳へし武藏守頼之が聖濟總錄を讀みしが如き、桐の御紋を賜はり

◎桂菴の徒半生

陳元の靈隱集

し右京兆勝元の、醫學に精通して靈蘭集を著はしゝが如き、亦以て證すべき也。

島陰集は年を以て詩を編めり、題大醫陳外郎杏林圖の詩は、文明十三年辛丑に在り、祖田此の時を以て薩に來りしか、其の祖田と昭慶とを送るの詩は、並に載せて文明十五年癸卯の部に在り、然るに島津國史は陳祖田の入薩を逸し、竹田昭慶の入薩を文明十七年閏三月に記し、其の歸洛は長享元年の事と爲せり、蓋し詩集編次の誤りにして、祖田前に來り昭慶後に來りしにや、祖田の兄は禪僧にして周防に在り、桂菴の故舊なりけるより、祖田とは交情最も親しかりしが如し、祖田歸洛して桂菴の詩を五山の諸老に示しければ、和韻の作多かりけるが、後年桂菴其の稿を失ひて、再び祖田に求め、祖田一絕を賦して五山の和を請ひ、以て桂菴に寄せたりしは永正三年比の事なり、其の事略前に記しぬ、昭慶も亦歸洛して、桂菴の詩を人々に示せしより、往々之に和する者ありけんと覺しく、周興彥龍が半陶稿に和韻の詩あり、此の贈答に因て、桂菴西海に高臥するも、其の消息は上國に聞えしなるべし。

桂菴と祖田

周興彥龍の和

## 附載

茲春薩之桂菴禪師。作四韻二章。贈別皇華陳外郎。蒼英在洛者皆和之。予亦次其韻。聊述舊懷。轉以傳於薩。則可無交友星殘之嘆乎。北山雪樵書。干等特篇室。

新詩偶自九夷傳。也識星河共一天。草嫩塞垣雪消地。花濃野館雨殘邊。我無遠夢堪娛夜。君似故交俱忘年。緬想離亭風笛暮。斜陽西落月東懸。

學業傳聞至聖涯。行將相問驛程除。瘦於詩者髮先雪。老矣自然心不花。但爲與君住潛邸。幾回和夢宿漁家。衰殘强欲賡高韻。卷舒窓前四景紗。

薩州桂菴老人贈別皇華陳外郎之歸京。以八句二章。吾山諸產賡其韻。

予亦備員聊述下情。伏希刪潤。蘭披叟景蓋

別來書信幾回傳。望斷孤雲落日天。早得佳名五峯上。今橫老氣九州邊。一場法戰已驚世。萬里壯懷空歷年。舊社秋深歸去晚。也知陳榻爲君懸。

漢使寄蹤燈水涯。過君日慰客途賒。枯腸攪盡一瓶茗。雙鬢燒殘半篋花。燕足懸詩

傳幾處。蝶翅數夢到誰家。想看太守論文地。啼鳥畫閑垂絳紗。

## 寄竹田法印詩并序

周與達與

本朝盧扁竹田養浩公。去歲銜國君命。遠赴海西。意在醫人醫國。已而民之疢痗愈矣。所謂不辱君命者耶。及其歸也。桂菴老人作詩并文餞公。一時盛事也。余自幼多病。樹立于今者。公之賜也。頃者片塊生腹。諸醫拱手。得公於此。如早天見雲霓焉。一日謁其私第。公欵曲慰誘。一談一笑。頓覺沈痾去體矣。因出示桂菴詩文。且以彩扇一把。麥光二十番爲貺。皆出撫愛之餘。感荷感荷。不可不裁謝。卒借桂菴韻。作七八二章。以呈座右。如公之才之美。則兒童走卒。誦而知之。桂菴又區々說項。余猶何贅也。聊爲後會之起本耳。一笑。

萬里西游多少難。無人不道待公東。陪談時賜一双白。醉德猶斟半盞紅。十樣蠻牋修鳳日。五明倭扇馭鸞風。洛陽再見老司馬。甘草紫參評品中。

草木塞垣皆識名。歸來高價重連城。壺中日月琪花影。座上秋風書葉聲。葛井丹成煎北斗。倉池綠淨洗西兵。人才間出如君少。口舌分明非所爭。

## 京五岳諸老詩節錄

陳員外郎杏林祖田九拜

恐夫嘗從公事于薩州淹留也。日洲安國堂上大和尚。垂慈憐寬。旅懷惟聊矣。歸洛之日。辱賜佳章。以壯行色。仍求和篇於洛下諸老。而奉呈金貺座下。承聞昨失海南。今見求其遺蘖。諸公存亡相半矣。雖寬於各所。不獲之。恐夫亦連書佳篇於一紙。藏于篋笥。日久矣。八人奪而成烏有。彼此可慽矣。今又弗顧醜拙。謹賦短章。付于便呈。上貺側。式矣區區萬一者焉。來便刪潤。尤展老眉。

曾傳雪山洛翁翁。萬里海山瞻望中。聞說道香難掩處。一枝丹桂紫宵風。

日州安國堂上桂菴大和尚。乃瑞龍遺局。南遊東歸以來。道價被于九州。王道尚化。以故不屈駕而舉視於名刹東山之篆焉。頃有陳氏外郎。京師所居號杏林。西遊之日。謁見于桂菴師。神交道契。雖然東西阻脩。鴻鯉鮮

音耗。今茲夏末。安國僧徒往來之候。杏林製二絕。抒離索之情。仍請洛下諸名稱。令同于韵。老拙任皇明入貢之節。留滯泉南。杏林遣書求屬和。顧往日既有識荊之雅。而同好宜減於陳公哉。初篇應其請。後篇寫區區老懷。解一槳於千里之外。

大明正使老釋桂悟拜

鹽鹺今時一郡翁。名聲籍々播關中。杏林交義辱支許。海外九州會向風。
長安遠近日過翁。華刹曾遊在眼中。桂子天香我同稱。栴檀簷蔔一家風。
杏林老人與余講方外交者年久矣。頃作詩投簡日州安國堂上桂菴大禪師。仍請洛社諸老。次韵同賦。兼見及余。辭弗獲。疊和二章。奉寄。伏希采納。

宜竹竹隱子周麟（名也字瑞徐）

陳耶扣寂說禪翁。置我諸山唱和中。世事紛々心在彼。葵花向日絮因風。
桂翁先友是關翁。聞昔龍山會坐中。前輩凋零吾老矣。洛陽寺寺見秋風。

## 三、桂菴の學統

其の門人▲東林居士▲巢松以安

桂菴薩摩に在ること總て三十一年に及び、自ら關西の村夫子（其の詩に關西今有村夫子、笑來周時歌式微の句あり）を以て任じければ、其の徒に授くる所以の者も、亦教外の傳よりは、程朱の學說を主とせしならん。從ふて業を受けし者は、太守忠昌（申すに及ばず、一門に薩摩守國久集中の薩州閣下、修理亮忠廉、集中の匠作殿下）、其の子豐後守忠朝、新納刑部忠親、重臣に伊地知左衛門尉重貞、鳥取播磨政秀、野邊左衛門尉克盛等あり、他國より來れる者に、近江の佐々木永春、越後の長尾某等あり、叢林に在りては、三州の禪徒、概ね皆桂菴に從ふて儒禪の要旨を與り聞きしなるべく、其の尤も著はるゝ者は、法を桂菴に嗣ぎし龍源中興の釣雪玄貫（上野人）、前建仁の鄂渚玄棟（薩州人、鹿屋氏）、龍源寺に住す、永祿十年正月十一日化年七十六）、桂樹院の玄章、及び日州安國寺の月渚（隅州安國寺の雲夢、崇澤（薩州人伊集院氏）、谷山皇德寺の舜田耕翁等あり、雲水の衲子に至りては、洛の巢松以安を初め、肥後の

隅四の村夫子

從學の徒

雪溪、肥前の自擇、筑前の大年、美濃の玄勤等が如き、亦皆關西の村夫子に參する所ありし者なり、其の餘肥薩の間に於ける受業の徒、豈指數に遑あらんや、或は云く、南學の祖南村梅軒も亦曾て桂菴に學ぶと、(別に傳あり)而して桂門中尤も傳ふ可き者は佐々木永春なり。

桂菴と梅軒

佐々木永春は東林居士と號し、島陰集に江州兩佐々木氏の華諸なりと見も、佐々木氏系圖を檢すれども其の人なし、蓋し六角京極二家の何れかの支流なるべし、此の時代の禪僧の外集にも、未だ其ぞと覺しき人を見出さゞれば、或は醫者か、又は居士にして出家にはあらざりけん、明應二年來りて桂菴に日州安國に從游せり、桂菴が名下虛士なしと云ひしに見れば、其の比名ある人なりしか、明應三年桂菴鹿兒島に在りし時、亦來て桂樹院を訪ひしが、桂菴別に臨みて二絕あり。

東林居士

江國源流兩大家、門々才秀世堪誇、此即胸次虹霓氣、一語雲飛五色花。

日南一別兩天涯、倒履相迎喜上眉、禪榻茶烟落花雨、詩如小杜鬢無絲、

其の詩は尋常惜別の詩にして、長風波浪の意なければ、直に入明せしにあらで、此の時一旦洛に歸りしと見も、東林は翌明應四年を以て明に入り、桂菴の島陰集を

東林の入明

四明の洪子經嚴克正二人に示して、序及び贈詩を請ひ、明應六年明より歸朝せし時、徑に桂菴を薩摩に訪ひて之を致せり、案ずるに村菴稿の佐々木前賀州太守正源居士の眞贊に、家に三萬軸の牙籤あり、世五十家の兵略を傳ふの句あり、其の文學ありしを知るべし、東林或は其の子姪か、而して其の日州飫肥に來りしは、幕府又は佐々木氏の姻戚なる細川管領の明國貿易事務を帶びしにや、飫肥の福島港は當時明國交通の策源地なればなり、桂菴は應仁二年の元旦燕京に在りて明の天子に朝賀せし以來、其の榮を記せん爲に、毎年元旦記齡の詩を作れり、島陰集は此の記齡の詩あるを以て、編年體なるを知る、而して其の詩は東林入明の明應四年乙卯に盡く、乃ち知る此の島陰集は、東林居士が入明に際して序を明儒に請はんが爲に編次せし者なるを、序を作りし嚴克正は、桂菴在明中の舊知なり、島陰集中に逸して明の四明の洪子經が手に存したる過舊の詩に曰く。

毎年記齡の詩

島陰集と東林居士

過舊

途中適遇四明人、一咲如同骨肉親、可有扶桑新到客、報言東魯送殘春、

此の詩は蓋し桂菴彼の地にて嚴克正に贈りし者なるべし、東林は斯くて序と詩

とを得て歸りしは、亦舊師に忠なる者なり但彼土の俗士、尊大自ら喜びて、辭令甚だ傲るも、東林之を怪まざりしは、時代思想の罪なり、而して東林の編次に因て島陰集の散佚せざるを得、以て史料を後世に留めしは、最多とす可き也、島陰集は續群書類從文筆の部に在り、別に南游集として、游明中の詩ありけれど、長享二年門人雲夢崇澤が京に游びし時、携へ去て後、散逸して傳はらず。

禪師に忠なる者

巢松以安

以安名は光建、巢松軒と號す、京師の人、長祿二年に生れ、桂菴より少きこと三十二年なり、人と爲り、穎敏、少より學を好み、蘭坡に南禪に師事し、內外を精勵する者十八年に及べり、文明□年七年か義尙將軍以安をして周防に使せしむ此の時始て桂菴に見えたりと云ふ、蓋し桂菴歸朝の當時にもやありけん明應五年高麗に使し、王を見て詩を献じ、六年歸朝し、東福に居て乘拂九年、平生吟詠を嗜み、尤も桂菴の人と爲りを慕ひ、遂に京を辭して、來りて桂菴に薩に從ひしは文龜元年十一月なり、此より日として詩を賦せざる無し、桂菴の以安と老壯異なりと雖も、並に南禪に在りし人とて、臥雲橋上の月を翫び、鎖春亭畔の花に醉ひし昔を思ひて、共に羈旅の情を慰めたる由、桂菴の巢松集序に見えたり、翌二年秋、小菴を福昌寺畔に結びて之に居らしめしに、從學の士多く、國侯も亦恩遇を加へて、慶宴に陪して詩を爲りしが、去留常なく、惟詩是れ樂めりとぞ、享祿五年桂菴二十五年忌辰に、以安報恩の一偈あり、後ち其の終を知らず、予未だ巢松集を讀まざるを以て憾と爲す。桂菴の學統は月渚英乘之を二州一翁に傳へ、二州は之を文之玄昌に傳へ、文之は之を泊如竹に傳へ、如竹は之を愛甲喜春に傳へ、喜春は之を東郷重經に傳へ重經は之を伊集院仁左衛門俊矩に傳へて、一種の薩摩學風を開けり。

## 附載

### 贈日本桂菴樹禪師詩

賜進士出身廣東參政劉洪

設道維摩不出家。也能說法動人誇。日東老宿多時別。看到菴前幾度花。

老禪歸臥海天涯。渭樹江雲想白眉。課罷楞嚴無一事。閑將金偈寫烏絲。

都察院經歷宗顯

苦行潤心是釋家。上人高致稻神誇。吟窩容滕紅塵遠。只種琅玕不種花。
蓑壽多方未有涯。童顏兒齒更芝眉。島陰老去成眞隱。不見王言出似絲。

味易老翁倪光

上人東住楚天涯。珠玉詩林獨可誇。萬里乾坤雙老眼。白雲深處看飛花。
夢中騎鶴到天涯。西竺東林老白眉。一別石橋雲雨地。春風怨入柳絲絲。

賜進士南京兵部郎中金亮

遠播詩名有幾家。上人贏得鉅卿誇。珠璣奪目龍蛇口。傳到扶桑錦上花。
聞說蓬萊接島涯。老僧應擬淺黃眉。慚余亦夢尋眞訣。塵事紛紛飛若絲。

穿山居士雜圖

海國多才是故家。名高支遁衆堪誇。當年曾拜天王龍。看盡長安寶樹花。
東去扶桑天一涯。雲開望斷遠山眉。箇中老衲參空相。不著鹿儿一縷絲。

贈進士出身四川按察僉事俞澤

自是緇流第一家。墨名儒行是堪誇。獻珠曾過中華地。得見春風紫陌花。
欲向遠公結遠社。愁聞戒酒使攢眉。于今老去都忘却。日々江頭理釣絲。

老僧到處即爲家。詩律清新豈浪誇。前度入朝承燕賜。醉來銀海欲生花。
幾年高臥島陰涯。頭上霜毛映秀眉。心靜自無流注想。任他嬌管雜清絲。

賜進士廣平太守前都給事中盧鴻

江邸讀隱鮑垣

四海車書混一家。昔曾納貢連人誇。桂花高臥應多趣。幾向蒲團夢笙花。
中華遊遍與無涯。詩社于今想白眉。何日覯光重有會。高山流水奏桐絲。

頤心子沈暘

禪學詩才號一家。明珠無價不爲誇。菴前老桂天香別。壓倒祇園簷蔔花。
憶昔浮盃過海涯。儒林爭喜識長眉。翟曇老去知無恙。自咲昌黎翼易絲。

友梅方震

聞君日城老詩家。出語驚人足可誇。借問禪房幽寂處。優曇幾樹已開花。
上人家住海東涯。勘破塵寰只皺眉。獨有詩魔降未得。滿頭短髮盡成絲。

正菴張瑛

獨憐之子大方家。辭賦春容不待誇。爲導正庵曾有問。蚤年應夢笙生花。

大明日本隔天涯、翹首空懷馬白眉、獨札新詩再三詠、相逢惟恐鬢垂絲、

石泉倪鍾

上人少小便離家、一入山門衆所誇、揮麈談玄登法座、繽紛繞膝雨天花、
悟得眞如浩莫涯、蒲團長日下修眉、當年曾聞三生事、飛盡爐烟細雨絲、

## 四、桂菴月渚と薩摩外交

忠首座と汪五峰

外交史中の人

桂菴は又薩摩の外交と關係あり、其の高足なる月渚英乘に至りては、日本外交史中の人也。

薩摩の貿易品

日明貿易の海口

七世氏久の明國貿易、九世久豐十世忠國等の朝鮮貿易は、前にも記したるが、我が重なる貿易品は硫黄なりき、而して日州飫肥の福島港は、當時日明貿易の海口たり、島津氏が伊東氏と此の地を爭ひしは、貿易の利を失はざらんとするも亦一原因なりけん、幕府の官船に硫黄を附載し、又は明商を招徠して、得る所の利大なりけんと思はるればなり、十二世忠昌の時、驍將島津修理亮忠廉をして飫肥を守らしむ、文明十五年四月、飯尾大和守布施下野守奉書を以て、日向國の要害渡唐船警固の事務めて嚴重を要すとの命を島津氏の族人に下しゝこと、島津國史に見ゆ、族人は卽ち忠廉なるべし、然れば飫肥の安國寺には、學僧を置きて外交文書を掌らしむべき必要あり、桂菴の島陰集に、匠作殿下卽ち修理亮忠廉との應酬多きに見れば、桂菴は太守忠昌の師たるのみならず、一には入明の學僧たる故を以て、忠廉の外交顧問として聘せられしにあらざるか、桂菴が長享二年日州安國に住せしは卽ち之が爲にして、忠廉卒後其の子忠朝の代に、島陰集中日州飫肥の幕に赴くの詩あるは、亦外交の幕僚たりしを證す、忠廉の家は豐州島津家と稱し、外交に關する古文書數通あり。

桂菴は外交顧問

日州飫肥の幕

月渚英乘

月渚英乘は薩州牛山の人、肥後高瀨の清源寺に在りて、栖碧和尙に隨侍し、又桂菴の友なる一枝に從學せしが、一枝歿後、其遺軒を守る者六年、桂菴嘆じて子貢の風ありと爲せり、明應六年より桂菴に從學して、遂に高足と爲りき、桂菴月渚を薦めて日州福島の龍源寺に住せしめ、後安國に轉せり、亦外交の簡牘を掌りしなるべし、大永三年管領細川右京大夫高國、瑞佐と宋素卿とを明に遣はしゝ時、(此時の船

月渚の入明

月渚の負傷

は種子島にて造れり)大内義興も亦宗設を正使とし、月渚を副使として明に遣はし、同じく寧波に至りて、眞假先後を爭ひ、大騷動の果は、瑞佐遂に宗設を殺し、月渚と共に逃げ歸れり、月渚此の時の爭亂に、破瓦飛來りて傷を負ひしが、常に西湖を觀ざるを以て恨と爲せり、天文中大内義隆使を明に遣はしゝ時、再び月渚を以て副使と爲さんとしゝを、月渚年已に老い、且つ破瓦に中りてより身體不快なればとて辭退せしが、義隆は厚書を豐後守忠朝に贈りて、月渚の承諾するやう取成を頼みければ、月渚も已むを得ずして承諾しけれど、遂に再渡せざりき、當時建仁に補せしは大内氏の推擧に因れりしが、天文十年二月九日伏肥に寂せり、其の門に二州一翁あり。即ち文之の師なり。

織部丞の策謀

月渚渡後二年なる天文十二年癸卯には、葡船一隻、隅州種子島に至る、文之の鐵砲記に據れば船中に明人五峰といふ者あり、之と筆談して兩情を通せし者は、西村織部丞時貫と爲す、邊境の士、亦此の文字ありしは、薩隅日三州の文化早く開け居たりしを證す、是れ種子島が當時渡唐船の艤裝地にして、出入必經の要港たりしより、京師との往來頻繁にして、使節の大名、或は五山僧などの足跡を印し、隨て

忠首座の經書

文化を分布せしに因るなるべし、時に忠首座といへる禪僧あり、經書に通じて筆を揮ふこと敏捷に、又支那語を能くして種子島氏の通譯官たり、五峰之と語りて知己を異邦に得たりしを喜べりといふ、忠首座は日州龍源の徒とあれば、正しく是れ月渚の門人なるべく、其經書に通じたるは、亦新註にあらざりしか、其の支那語を能くせしは、或は月渚に從ふて寧波に至りしことあるに因れるか、又は日州福島に來泊せる支那人に就きて學びしにや、五峰は即ち汪直にして、後には平戸に巢窟を構へて、支那沿海を劫掠せし海賊の張本と爲りたれど、元は安徽歙縣の人にして、任俠氣を尚び施與を好めりと云へば、意を科擧に得ずして功名場外に任意恣情を求め、遂に惡少を嘯集して海に浮びし者なるべく、其の初は亦書を讀みしことありて、經書に通じたる忠首座との談論に、掌を拍ち快を叫びしならん、

汪五峰と忠首座

三島の文化

當時種子屋久永良部は三島一宗にて、法華盛行の地なれば、忠首座も渡唐船の用事などにて此の地に來りけんに、法華一乘の妙理を聞きて、遂に禪を改めて法華に歸し、住乘院と稱して島中に留まりしかば、桂菴の學派は忠に因て此の地にて行はれしなるべし、(後ち屋久島の如竹を出せしも亦法華弘布の賜なり)二人の大

備出れば其の學は其から其へと風行して文化を分布すること如此き者あり。

## 附載

### 豐州島津家文書

一日州安國寺英乘首座事、先年池永船爲居座渡唐候之條、來春又種子嶋渡唐船爲役者、御乘船候者可然候、就其御出世公帖事被進調候趣、對座元直被申候、無餘儀渡唐候之樣被加御意見候者、肝要之由得其心可申之旨、委曲傳芳院可令申候、恐々謹言、

卯月十日　　興重(杉三河守)

嶋津豐後守殿

御宿所

一去卯月十日御芳書、今月九日到來、具令披見候、抑至安國寺英乘首座建仁寺御公帖被付下候、面目之至、於拙者忝長入候、仍先年爲池永船役者渡唐候、以其筋目、種子嶋に乘船之儀承候、歸朝以來氣力相盡候、通連々被申居候、重而渡唐難量候歟、定而直御返事被申候哉、可然樣御取成所希候、恐々謹言

八月　　忠朝

杉三河守殿

御返報

一日州安國寺爲副使渡唐、可有御入唐之通、被申遣候、然者御領納候樣、被仰達候者、可爲快然候之由、以狀被申候、猶得其心、能々可申旨候、委細釣雲可被申候、恐々謹言

十月六日　　持長(陶)　　興重(杉)

嶋津豐後守殿

御宿所

一當國安國寺爲副使渡唐之儀、以直書蒙仰候、雖掛酌千萬候、加意見候間、可應御下知候由被申候、肝要存候、先年入唐之時、被當瓦破候、其謂候哉、連々不快氣候、爰元難令申述覺悟候、難默御意之條、先中途迄參入候、可然樣可預御取

持候、恐々謹言

二月廿六日　　忠朝

陶安房守殿

杉三河守殿

種子嶋氏家譜

就渡唐船之儀、吉川出雲守令下着候處、無別儀由候、彌入魂可爲喜悦候、恐々謹言

十一月十六日（天永元年）　　高國（細川右京太夫）

種子嶋武藏守殿（忠時）

（右は編者手帙に寫取りし者なれば誤寫なきを保し難きも姑く錄して參考に供す）

## （六）大内文學と南學

### 上、大内義隆の講學

即位獻資の故事▲小早川隆景の學校

大内文學の淵源

明韓交通と文物輸入

文敎を隆摩に興しゝ桂菴と、南學を土佐に開きし南村梅軒と、並に周防の大内氏に出づ、大内氏の文化は由來する所久し、然れども大内文學の時期は、義隆の世を謂ふ、世人桂菴を以て大内文學の產兒と爲すも、大内文學は桂菴以後の事に屬して、義隆の時、宋學頗る行はれ、而して梅軒出でたりき、請ふ其淵源を尋ねん。

大内氏は其の祖先が百濟王餘璋の子琳聖に出でしと、其の歸化土着せし周防が、朝鮮交通の要衝に居りしとに因て、古來海外の文化を輸入する便宜を有せしが、防長石豐泉紀六州の守護として威を中國九州に震ひし義弘の時に至りては、足利幕府の明韓交通事務を管掌し、祖闡克勤の來聘せし時は、之を其の日新軒に館し、朝鮮の使者朴敦之の來朝せし時も、義弘其の接待に任じき、義弘の文學ありしは、義滿伏見の花見に赴かんとして雨降らんとしゝ時、義弘「雨しばし雲にやすら

義弘の歌

へ木幡山ふしみの花をもきて見んほど」と詠じて天霽れたりと傳ふるに徴すべし、持世敎弘政弘を經て義興の時には、明國交通の勘合符を得て、貿易の權と文物輸入の便とを掌握し、兵を出して威を朝鮮の全羅道に示し、且つ始て南洋貿易を營みしといふ、是れ足利氏の外務大臣と謂んよりも、殆ど外交權の自主を保有せし者の如し、大内氏が海外の新空氣を呼吸して郁々乎として文なりしも亦宜ならずや、文學の僧をして外交の簡牘を掌らしむるは當時の慣例なり、是れ禪宗の防長に盛行せし所以にして、義弘の時には、宋學の泰斗たりし岐陽方秀が周防の長藩寺に住するあり、其弟盛見が守護職を襲ひし比には、岐陽の高足なる惟肖得殿を崇信して、碧山別墅の詩に序せしむるあり、我が桂菴が此の時代に生れて、持世の時に惟肖に師事せしも、斯る緣故にや因りけん、桂菴同門の竹居正猷は、敎弘の時に周防龍文寺に住し、天游爲璠は政弘の時に其後を嗣げり、竹居天游二僧は宋學に關する證左なきも、此の比の禪僧にして外典に通ぜざる莫く、岐陽惟肖の兒孫にして外典を學ぶに、宋學を與り聞かざるはあらじ、乃ち知る岐陽學派の大内氏に入るや久しきを、義隆の宋學尊信も亦蓋し其の流風餘韻に出る者なり且

大内氏の海外發展

岐陽學派と大内氏



つ足利學校を再興せし上杉憲實は、遁世して高巖長棟と號し、一錫飄然、周防に來り游んで、竹居正猷に龍文寺に參し、遂に山口に客死せり、憲實は關東の名族にして、足利氏の重臣たり、大内氏の優待知るべし、時代は違へども、憲實尊經崇儒の精神は、亦豈感化を義隆に及せしことなからんや。

義隆は義興の子、桂菴示寂の前年なる永正四年に生る、九州の群雄を征服して、威名父祖に邁ぎしのみならず、文學を好み聖經を尊びて、名敎を干戈倥偬の際に講せしが如き、實に憲實以來の一賢者なり、儒釋の一致を論して、大藏經を朝鮮に求め、已に五經大全を獲て後ち、重ねて朱子新註五經を請へり、其の書に「朱子新註五經の如き、上古弊邦の諸儒、之を嘗ふる者、家々汗牛、戸々充棟、而して近世一秦、殆ど坑灰と成る」と云ひしは、蓋し外交的辭令なるべし、日本程朱學の源流に、近藤清石氏の大内氏實錄を引きて、五經を求めしは其臣南村梅軒の誘導に出づと云へり、予未だ其の確據を知らず、時に朝鮮は詩書二部を時計に添へて送り來りき。

義隆は數多の文臣を京師より招聘し、五山の僧徒も亦多く集りしより、流寳公卿墮落沙門の譏あり、(維新前の七卿落も其の先蹤を繼ぐに似たり)是に於て京師の

上杉憲實の流離

大内義隆の好學

大藏經と五經大全

義隆と梅軒

文臣招致

文化は山口に遷移せり、儒者には小槻伊治清原業賢あり、(業賢は環翠軒宣賢の子)藤原資之基親及び官醫竹田定慶等と、會日を定めて經書を講じ、疑義は之を二儒に質し、且つ侍臣の爲に自ら大學を講じ、業賢の父宣賢が四書五經諺解を藏すと聞き、錢五萬貫を贈りて、借りて之を寫し、以て講說の助と爲せり、豈篤志の至に非ずや、義隆又朝儀に精しく、左大臣藤原實隆(遺遙院)に質問して、多々良問答を著はせり、世或は其の文に偏して武を忘れ、驕奢國を亡すを誹るも、其の敗因は文に偏せしが爲に非ず、文學の功を論ずれば、則盛に典籍を輸入し、或は自ら書を刻して所謂大內本(老人夜話に、紙を明に送りて書物を摺らせたりとあり、或は紙を朝鮮に送りて板を摺らせたりとも云ふ、其の事猶朦朧氣也)なる者を後世に留め、以て名敎を裨補し學術を興隆する所以の者、北條上杉二氏に亞ぐ、而して外國貿易に因て富海內に冠たりしより、奏請して後柏原天皇即位の費用を辨せしが如き、尊王の大義、千古に赫々たり、流石に孔孟の道を尊び程朱の說を奉せし儒將たるに負かず、後ち毛利元就が數を獻じて正親町天皇即位の費に供せしは、先君の故事を修むる者にして、元就の子小早川隆景が、肥前二筑を傾して立花山城に治せし時、遂實が足利學規に摸倣して、學校を設け聖廟を建て、士庶人をして學に入らしめしは、亦其の遺法を繼承する者たり、義隆の功も亦偉ならずや

四書五經諺解を賈ふ

大內本

義隆の尊王

毛利元就の獻數

小早川隆景の興學

## 下、南村梅軒と南學

### 梅門三叟▲元親の興學

南村梅軒は名字詳ならず、諸書傳へて周防の人大內氏の臣と爲す、或は云く、周防國吉敷郡上宇野鄕白石に居りきと、天文中土佐に來りて、吾川郡弘岡城主吉良宣經の賓師と爲れり、人と爲り冲澹恬靜、榮利を羨まず、心を聖經に潛め、常に四書孝經七書を講じて、學者を提撕せり、其の別號を離明翁と稱せしは、易學を好みしが爲にや、初め梅軒宣經に見えし時、世子宣直及び老臣吉良宣義も侍坐しけるが、梅軒は宣經の爲に儒學を論じて、世に君子儒小人儒の別あるを辨じ、道義の學は四書に備れり、日常の工夫は、身に反り獨を愼むに在りと云ひ、古今を援引し、和漢を對照して、天子諸侯皆宜しく書を讀みて大義に通じ、諫諍に從ひ人言を容るべきを勸めたる、眼明に識高く、論辯朋快にして、誠に當時の大儒たるに恥ぢず、而して

南村梅軒の經賈

梅軒の論學

禪理に說及ぶや、梅軒の言に曰く。

三綱五常の道は、眞に天地を維持するに足る、諸子百家、是を更め變ること能はず、但明に此の心を曉るは、禪法に若くは莫し、心は身の主にして、萬事の根なり、心定靜なるに非ずんば、何を以てか事を辨せん、或は千軍萬馬の馳驟する間、彈丸矢石の雨注する中に立ちて、此の心鎭靜せずんば、如何ぞ怖れて且つ惑はざらんや。

梅軒と禪

名敎の中、安心立命の地あるを說かざりしは、梅軒の爲に惜むべし、然れども當時の半儒半禪は、時代思想の圈套にして、梅軒も亦其の習氣を脫する能はざるは蓋し已むを得ず、其の學者を敎ゆるに、存心謹言篤行の三事を以せるは、程朱學者の本領と謂ふ可く、儒學を南海に唱へて、敎化を一方に興したりし功績固り卓々たり。

時代思想の圈套

梅軒の功

宣經は伊豫守と稱し、源頼朝の弟なる土佐冠者希義の後裔なり、天性溫和にして孝慈、人心悅服しけるが、嘗て軍律を選ひ、法令を定めたりと云ふ、天文二十年、長曾我部元國を討ちし時、病んで軍中に卒しき、時に年三十八、梅軒は昊天不憫奪元勳。恰若妖星阨獨軍。滿目潸然明未滅。丹心願染素絲裙の輓詩を賦して之を哭し、遂に之く所を知らず、或は云く、梅軒嘗て石見に桂菴に從學せりと、案ずるに桂菴の石見に在りしは文明六七年比にして其の時日久しからず、梅軒の土佐を去りしは天文二十年なり、文明六年より天文二十年までは七十七年なり、年代相及ばざるにあらねども、梅軒の石見に游びしは幼時か、又は其の土佐を去りしは百歲に近き比ならざる可からずして、聊か附會の嫌あり。

吉眞宣經

梅軒の輓詩

吉良宣義は右近と稱し、宣經の從弟にして老臣に列せり、木强方正、道を崇び學を好み、梅軒に從つて經義を講究せり、宣直禪を好みて、意を政に留めず、宣義屢直諫せしより、宣直之を疎んじ、遂に讒を信じて之を家に禁錮しければ、宣義食を斷ちて、

桂菴と梅軒

吉眞宣義

宣義の忠節

絕命詩

丹心一片斷無私。幾度朗吟正氣詩。沒後雙瞳先欲槁。勿看勾踐破吳時。

と賦し、先君宣經の畫像を揭げ、香を燒き衣を改め、三拜して死せり、實に永祿五年の春なり、幾ばくならずして宣直は本山梅慶が爲に殺され、宣義の子求馬難に殉し、其の女も亦貞烈の名ありき、嗚呼宣義は烈士なる哉。

梅門三傑

忍性如淵天室

長曾我部元親の興學

元親百箇條

梅軒門下に三傑あり、曰く忍性、曰く如淵、曰く天室、皆禪僧なり、忍性は忍藏主と稱し、夢窓開基の汲江寺に居り、儒を梅軒に學べり、如淵は信西堂と號し、吉良宣義の姪にして、京師の妙心寺、或は云く東福寺に學び、後ち梅軒に從學して儒に歸し、忍性と共に孝經論語を講じけり、天室は吾川郡の雪蹊寺に居て、梅軒に師事せり、如淵が異父弟にして、長曾我部元親の弟親貞が子に、秦左京進といふ者あり、吉良氏亡びて後ち、其の古墨に據りて吉良親實と稱しけるが、比江山親興、波川玄蕃、一宮飛驒等と共に、如淵に師事し、課を立てゝ學を講せしに、彼の威を四國に震ひし長曾我部元親も亦儒學を尊崇し、城中に學校を設け、如淵及び忍性を邀へて司業となし、一月六回、諸士を集めて文武を講究せしめたりき、元親が百箇條の一に、「仁義禮智信不可狽」など云へるは講學の賜なるべし、是れ九州の小早川氏と一對の美談なり、元親讒を信じて親實及ひ其の同志を誅してより、學問に一頓挫を來しけんも、猶衰廢に至らざりしなるべし、後其の寃を知りて悔恨し、廟を立てゝ親實を祀り、蓮池明神として今に存すと云ふ。

如淵忍性既に逝きて、天室獨り慶長元和の際に歸存し、能く梅軒の學を傳へて生徒に教授し、谷時中を得て墜緒を繼ぎ、小倉三省、野中兼山の徒相繼ぎて興り、以て程朱學を海南に講明せしより、惺窩派の京學に對して、南學又は海南學と稱せられ、尋ぎて山崎闇齋の吸江寺に起りて儒に歸してより、又別に一派を立てたり、其の始を尋ぬるに梅軒首倡の功なり、尚ばざる可けんや、事は日本教育史資料に詳なるを以て、今は唯其梗概を叙するのみ。

谷時中

南學の祖

# （七）四書の文之點

## 一、文之の出身

崇澤と天澤▲二州と江夏環溪▲浮田秀家と文之

桂菴の學三傳して文之和尚に至り、四書の訓點始て其業を完成せり、世之を文之點と稱す。

文之の父母

文之名は玄昌、字は文之、南浦又は懶雲、狂雲と號し、雲與軒時習齋の號あり、俗姓は湯佐氏、河內の人、其の父亂を避けて日州福島に至り、里人の女を娶りて、弘治元年乙卯、文之を伏肥南鄉の外の浦に生めり、因て其の號を南浦と云へり（外の浦も昔時明と貿易せし良港なり）實に桂菴寂後四十八年なり、六歲の時、父は文之を日州目井なる延命寺の天澤和尚に託して、故鄉河內に歸りしまゝ再會の期なかりけり、天澤名は崇春、又不閑と改む、日州伏肥の人、桂菴門下の雲夢崇澤和尚（薩州伊集院人、公族熙久の第四子初め大隅の安國に住し、後ち建長に隱れり）に師事し、大永七年足利學校に游學して、業を肆ふこと五六年に及べり、彼の永祿中足利學校に

天澤と九華

司業たりし薩付九華より少きこと八九歳なれども、其足利に游びしは九華より早かりしに似たり、弘治二年飫肥に歸り、初め西光寺に住し、後ち著室を延命寺に構へ、卜筮を以て業と爲せり、文之六歳にして天澤に從へるは此の時なり、(天澤六十一にて永祿十二年に化す、九華の死に先つこと十年なり)南浦の文に(琴記予れ少きより村校に在りと云へるが、村校は即ち寺にして、天澤卜筮の傍に寺小屋の師たりしなるべし、文之夙慧群童に異り、天澤之に法華を授けしに、眼に觸れて誦を爲しけるより、文珠童の名を得たり、年十三の時に歲旦の詩を作る、天澤之を奇とし、此の神童、吾が駑材の能く育する所に非ずとて、日州福島なる龍源寺の二州和尚に依らしめたりき。

村校は即ち寺

文珠童

二州一翁

二州名は玄心、字は一翁、薩州犬迫の人、俗姓鹿屋氏、桂菴嗣法の弟子なる鄂渚玄棣の弟なり、桂菴高弟の月渚英乘に師事して、月渚の手澤ある古籍百卷を傳へ、最も宋學に精し、當時我薩摩には歸化の明人多く、永祿二年に歸化せし郭國安(名は光禹)の如き、姓名を汾陽理心と改めて、義久義弘に事へ、朝鮮陣には帷幕に參して功あり、(寛文十六年卒す)其の翌三年に歸化せし黄友賢の如き、江夏友賢と名乘り、卜

汾陽理心(郭國安)

江夏友賢(黄友賢)



筮を以て後陽成天皇の寵賜を辱くせしあり、其他林百梅錢一官の徒に至りては、事蹟詳ならざるも、亦皆儒生にして、文化を裨補せし者の如し、而して文學は江夏友賢を推して第一と爲す、友賢は福建江夏郡の人、故に江夏を以て氏と爲し、號を環溪と曰ふ、幼より家學を受けて、尤も周易に精し、島津義弘聘して學を講せしむ、甞て公に從ふて上洛せしに、公卿大夫從學する者多く、洛の文士其の鋒に當る者なかりきと云へば、其の學植知る可きなり、一翁友賢と親善し、經義を討論せり、蓋し一翁の學は月渚に承けて桂菴の學統を繼ぎ、更に友賢に交りて易學を受けし者の如し、文之の詩の小引に、吾師一翁和尚教授於鄕校者年尚矣とあれば、程朱の學を標榜して緇素に教授せしなるべし、文之又一翁の人を敎ゆる所以を說明して曰く、各其の材器に隨ひて、或は經を誦せしめ、或は書を學ばしめ、或は假名の字を敎へ、材の高下に隨ふて、後學を成就すること、孔夫子の諸弟子に於けるが如し、予は記誦訓詁の學を授けられ、朝に大學論語の文を讀み、暮に廣韻玉篇の字を檢したりと、以て其の一翁に受くる所の者は專ら儒學に在りしを知るべし、一翁後日州安國に住し、尋ぎて洛の眞如建仁に陞り、八十六歳の文祿元年に寂しき。

林百梅錢一官

江夏友賢の學植

一翁の鄕校教授

文之十三の詩

文之十三の時の歳旦の詩は、傳へて京師に至り、相國寺の仁恕集堯は、辭翰共に老成の典刑ありと爲し、稍子の摸楷なればとて、義を天上の文昌星に取り、名は玄昌なるより、字を命ずるに文之の二字を以し、爲に二絶を賦して之に贈れるが、中に奇才可畏遠邦生の句あり、文之一翁に從學する者二年許、三體の詩を誦し、四書の義を學びて、章句訓詁に通せしが、年十五の時、笈を負ふて洛に游び、熙春和尚に惠山の龍吟菴に謁せしに、熙春も亦之を器重して英物と爲せり、年十九の天正元年には、一翁に從ふて隅州加治木の神護寺に在りしと云へば、其が龍吟に從游せしは四五年間なりけん、天正九年には文之一翁の薦に因て龍源を領し、隅の少林日の正壽に轉じ、尋ぎて島津義弘に招かれて隅州の安國を董し、慶長四年公に從ふて上洛し、同じき六年には正興寺に住せり。

仁恕集堯に激賞せらる

熙春和尚に惠重せらる

浮田秀家の激寓

是より先き關ヶ原の役に敗れし浮田中納言秀家薩摩に逃れて島津氏に賴れり、蓋は人目を忍びてや、夜のみ城に入て對談あり、之を夜のお客と稱しけり、或時夜深けて小坊主の坐睡しけるを秀家打見て、幼き者の嘸迷惑しつらんとて、錦の帛紗とやらんを賜はりけるに、其は太閤の遺物ならでは世に有るまじき品なりけるより、後に夜のお客は彼の秀賴なりけんと云ひ、秀賴薩に在りとの風聞隨つて起りきとの說あり、扨秀家は前田家の婿なるより、前田島津二氏より命乞あり、慶長八年薩摩よりは桂忠詮を正使に、文之を副使として駿府に遣はせしに、家康其の請を容れ、且つ文之を相州建長寺の住職に爲されけり、宗派目子の文之住建長目子に云く。

夜のお客

秀家と秀賴との關係

秀家護送の使節

文之建長に陞る

文之諱昌、嗣前建長一翁心、心嗣建仁鄂渚棟、棟嗣南禪桂菴樹、樹嗣景蒲忻、忻嗣蕎福方田圭、圭嗣南禪平田均、均嗣筑州禪光開山道山晟、晟嗣大明國師。

とあり、是れ彼の法脈なり、文之上堂提唱して、丕に祖法を振ひ、使命竣りて歸國し、正興に住する者前後十五年、家久の創立せる大龍寺の開山と爲り、元和六年九月、趺坐して寂せり、壽六十七、加治木の安國寺に葬れり。

文之の世壽

## 二、文之の學

### 其の學說▲經筵進講の評

文之は一翁に師事すると共に、一翁の友なる黃友賢にも學べり、友賢文之を誘ふ

文之と江夏友賢

に孔孟の道濂洛の流を以しければ、文之尊んで環溪老先生と云ひ、其の學問を稱して、中華文物の國に生れ、東魯德義の門に游び、目を五經六籍に染め、耳を諸史百家に漱すと曰ひて、崇信甚だ深かりき、一翁は文之三十八の文祿元年に寢し(年八十六)、環溪は文之五十六の慶長十五年に歿(年七十三)し、追隨の日久しかりしより、一翁亡後は、專ら環溪と商量して、其の業益進めるなるべし、蓋し文之の學は、訓詁を一翁に受け、義理を友賢に學びしか、予れ文之の南浦文集を讀むに、孔孟を孔夫子孟夫子と稱し、程朱の說を擧ぐるには、晦翁伊川先生と稱し、篇々經傳の語を引きて義理を辨晰せり、皆有道の言にして、誠に僧服の儒者たり、今其の所說の一二を擧げん。

訓詁は一翁義理は友賢

文之の學說

誠

天下の達道五あり、曰く、君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友なり、之を行ふ所以の者三あり、曰く、智仁勇なり、此の三を行ふ者一あり、曰く誠なり、子思の述る所、孟子の傳ふる所、誠も可らざるなり、誠あれば則天下國家均しくす可きなり、況んや父子昆弟をや。(衆樂記)

予れ昔少年の時、老師の諸生を誨ふるを聞くに、曰く、人の學を爲すは、汝其の要を知るか、蓋し文字の爲ならずして、而して其の人と爲るの道を學ぶのみ、其の之を學ぶ者は、父に事ふるの孝を以て、之を君に移して以て之が忠を爲し、兄に事ふるの弟を以て、之を長者と朋友とに移して、以て之が順を爲し之が信を爲す、之を舍てゝ豈復た他に求めんやと、今や諸生其の句讀を習ひ、其の訓義を詳にし、膏油晷に繼ぎ、兀々年を窮め、思を經籍に積み、心を聖言に潛め、多きを貪らずして而して一に心に得んことを務め、終日乾々、寢ねずして旦に達せば、久しくして而して能く其の文の己の爲にして而して外飾せず、斯の道を載するの器たるを知らんなり、且つ復た我心の衆理を具へて而して萬事に應ずるを知らんなり、斯の文籍に深からざれば、安んぞ能く其の道に至らんや。(勉學文)

人と爲るの道

誠なければ世に立つを得ず

古曰く、其の誠あれば則其の神あり、其の誠なければ則其の神なしと、至れる哉言や、人にして其の誠なければ、何を以てか斯の世に立つことを得んや。(刻石文)

古謂へるあり、曰く、妖は德に勝たずと、蓋し妖は怪異の事怪異は理の正に非

妖怪説

誠の一字

ず、宣尼の語らざる所なり、其の語らざる所の者は何ぞや、我の正德を亂せばなり、大凡そ事に應じ物に接するの際、理未だ明ならざれば、妖怪たるを免れず、必ず其の明なる者に於ては、何の妖怪か之あらん、然らば則怪異の妖邪、豈能く聖君の正德に勝んや、縱ひ千妖百怪あるも、何ぞ敢て德禮の門を望まんや、然りと雖も神明に禱る者、亦廢す可らざるなり、昔者武王疾ありて豫まず、周公金縢の書を作りて以て禱れり、夫れ禱る者は過を悔い善に遷りて、以て神の祐を祈るなり、武王悔も可きの過なく、遷る可きの善なし、然り而して周公の禱る者は、使臣の職、當に爲すべき所なり、(壽龍伯尊君文)

轉讀般若一部、其卷を積んで六尺に盈つと雖も、然り而して其の要處は只九箇の字、所謂阿耨多羅三藐三菩提なり、中華に在りて之を翻すれば、則一の覺の字のみ、中庸の誠の一字是なり、(轉讀般若配帙)

祭祀は誠を存するを以て其の要と爲す、齊明盛服、非常に出づ、其の祭るや、神明の其の上に在し其の左右に在るが如し、是に於て謹まずんば、何の處にか謹まんや、大凡人の世に於ける、耳目鼻口の欲あり、神明の盛德と相接する者、

心を洗はざれば神明と接す可らず

文之の經筵講説

公卿の愚口

俘虜刺鮮の日官

翅に齋戒沐浴するのみに非ず、其の心を洗はずんば、何を以て神明と相接せんや、(答重饒公書)

處長中文之洛に在りて、大學章句を東福寺に講せしに、聽衆多く聚りけるより、其の事禁裏に聞え、後水尾帝文之を召して新註を御前に講せしめられしが、意地惡き公卿ども、後に文之を評して、師は實に博識宏才なれども、西國の田舍者とて、其の詞辯卑陋、頗る文飾に乏し、折くては爭でか天聽に達すべきと云へりければ、文之心に愧ぢて、尤も千萬なり、佛も生王都難と云ひ、詩にも邦畿千里惟民所止と云へるは、此の謂なりと云ひきとなり、又或る書に、朝鮮陣の俘虜に日官ありて、加治木の賈人の家に養はれけるが、大守(義弘か)其の博學を聞きて召出され、其の欲する所を云へとありければ、日官が賦して獻じたる一絕に、鳥在山林魚在淵可憐失路在□□の句あり、公乃ち命じて國に還らしめらる、日官文之と交り善かりけるより、往きて別を告げしに、文之不在なりければ、筆を借りて柱に、小島蝙蝠と記しゝまゝ去りきとあり、異邦の俘虜、恩を蒙りて放免せらるゝに臨み、國侯の尊信せる師僧を譏謗するが如き、常情に反して世に有るまじきことなれば、此は後人

の附會なるべく、滿朝の公卿も、文之が田舍言葉をこそ誹りたれ、其の博識宏才は之を公認せり、亦當時に於ける一大儒たるを失はず、

## 三、文之と島津氏の文教

### 日新公以來の奬學▲門司光空

日新大菩薩

薩摩詩經

義久義弘の性格

太守義久(龍伯公)義弘(惟新公)の文之を信任ありしは、亦其の儒學を尊信してなり、桂菴薩に入てより君臣學に嚮ひしが、中にも太守貴久(大中公)の生父なる相模守忠良は、日新大菩薩と崇められ、薩摩聖人と尊ばるゝほどの人にて、桂門の舜田(字耕翁、薩州人、村田氏)及び其の弟子舜有(字三枝、薩州人)に參し、文武儒釋に兼通して、其の作る所のいろは歌は世に行はれて、薩摩教育の詩經とも謂ふ可き者たり、座右常に孔子聖蹟圖の屏風を立てゝ、道德の教を尊敬せられしと云ふ、義久義弘兄弟は貴久の子にして日新公の孫なり、義久は德を以て勝り、寛仁大度、人君の量あり、義弘は才を以て勝り、英武勇畧、名將の名を得、其の人格は同じからねども、互に相輔けて島津氏の業を恢弘せしが、並に名教を崇びて、少時より孔孟の書を學ひ、

三世に歷事す

門司光空

家久の心學

守入の故事

仁義の原を窺ふて、禮樂の緒を探れるは(兵術書跋)祖法を紹承する者たり、義弘の著に惟新公自記一冊あり、東鑑流の漢文にして、中に當家代々、崇佛神、敬先祖、修武畧、勤文教、加忠節、以故國代隆盛也とあり、其の家風知る可らずや、文之尤も知を義弘に受けしが、義弘は屢召して學を城中に講ぜしめ、又其の子家久(初名忠恒)の侍讀と爲せり、家久曾祖日新公の祕藏なる孔子聖蹟圖の屏風を摸寫して高野山蓮金院に寄附せし時、文之代りて其の跋を作りき、(刊本あり)文之三世に歷事して文教を裨補せし功や大なり、又家久の侍讀に門司光空と云ふ者あり、光空字は安意、謙柔齋と號す、豐前の人、父は亦六と稱して、永祿三年戰沒す、光空嘗て大內氏に仕へ、後ち禍を島津氏に釋き、家久の侍讀たり、朝鮮陣に從ひて、時に軍中に講誦せり、家久の文學に長じたるは、蓋し文之光空の力なるべく、然れば文之の作れる歷代歌にも、國務餘力嗜儒學、其本不亂一修身、就中心學探其賾、入禪教門轉兩輪、と稱せり、聞く薩藩士人の輕罪ある者は、之を僧寺に禁錮す、之を寺入と云ふ、此は義弘の時に始まりし者にて、公の侍臣に罪あれば、命じて之を寺に入れ、僧に就きて四書を讀み、以て忠孝の道を知らしめ、學業稍進めば赦されたりきと、是れ一には薩人

文之と外交

粗野にして讀書を好まざりしより、此の強制教育ありしを證すべく、二には義弘の心を文教に留むること如此く切なる者ありしを知るべく、三には當時の學僧は教育の權を握り居たりし者にて、寺小屋の山て來る所久しきを想見すべし。

文之は獨り島津氏の文教に功あるのみならず、外交の功も亦大なり、島津氏の海外貿易は、義久義弘家久の時に盛行し、明國及び南蠻阿媽港呂宋安南等の外商を招徠して、交通頻繁なりしが、外交文書は一に文之の手に成りしのみならず、家久の時に琉球征伐ありて、新附の外藩を懷柔するには、文之の力甚だ多かりき、蓋し琉球圓覺寺の住僧天叟は文之の友にして、二州門下の景叔春蘆二僧も亦在り、文之の學德は夙に琉球の君臣にも尊信せられしに因るなるべし、其の事南浦文集に詳なり、集中明の商船史記評林を載せ來りしこと見も、明國貿易の盛なると共に、儒書の船載も亦尠からざりけん、慶長中には朝鮮陣より書籍を齎し回りしこと、彼の文之が周易傳義を獲たりしに徵すべし、且太守家久の携へ歸りし數十部の書目は漢學紀源に出づ、此は門司光空の勸に因れりとぞ。

# 附載

## 日新公いろは御歌

近衛植家公御書入

古の道を聞ても唱へてもわが行にせずば甲斐なし
古の道も我行にせずば甲斐なきよしし也び調ひ末代の守となりて候
樓の上もはにふの小屋も住人のこゝろにこそは高きいやしき
人無高下心有高下
はかなくもあすの命をたのむ哉けふもくと學びをばせで
勿謂今日不學而有來日此言葉に相叶ひ候
似たるこそ友としよけれ交はらば我にます人おとなしき人
無友不如己者
佛神他にましまさず人よりもこゝろに恥ぢよ天地能知る
人心生一念天地悉皆知

へたぞとて我ともるすな稽古だにつもらば塵もやまと言葉

高き山も麓のちりひぢよりと侍るに相當候

科ありて人をきるともかろくすないかす刀もたゞひとつなり

非殺之爲生後輩非誠之爲助庶也(本のマヽ)

智惠能は身に付ぬれと荷にならず人はおもんじはつるもの也

理も法もたゞぬ世ぞとて引やすき心の駒の行くにまかすな

二首の心調銘肝入骨候

盜人よそより入と思ふかや耳目の門にとざしよくせよ

耳目の門の戸さし耳目をなぐさめ候

るつうすと貴人や君が物がたり初て聞ける顏持そよき

仕る人のためかくこそあらまほしく候

小車のわが惡業にひかれてや勤むる道をうしと見るらん

是を見てつとむる道に入侍らざらんや

私をすてゝ君にしむかはねば恨もおこり述懷もあり

尤私を捨むこと毎々存入候

學文はあしたの汐のひるまにも波のよるこそ猶靜なれ

學文の道のいさめ目をよろこばしめ候

よしあしき人の上にて身をみがけ友は鏡となる物ぞかし

見賢思齊焉見不賢而內自省也

たねとなる心の水にまかせずば道より外に名も流れまし

禮するは人にするかは人をまたさくるは人をさくるものかは

兩首いづれと申難く殊勝に候

そしるにも二つあるべし大かたは主人の爲になるものとしれ

衆惡之必察焉衆好之必察焉

つらしとてうらみ返すな我人にむくひくてはてしなき世ぞ

怨以報怨終不□草以火如消怨以報恩終□水(寫本のマヽ)

ねがはずば隔もあらじ僞のよにまことある伊勢の神垣

誠をねがへにや

名を今にのこしおきける人も人心もこゝろ何かおとらん
　幾度も吟返して此味を得度候
樂も苦も時過ぬれば跡もなし世にのこる名をたゝ思ふべし
　世にのこる名を大かたに心得けりと只今目を驚かし候
昔より道ならずしておごる身の天のせめにしあはざるはなし
　若人作不善得顯名者人不害天必誅之
うかりける今の世こそは前の世と思へば今ぞ後の世なるらん
　欲知過去因見其現在果欲知未來果見其現在因
亥に伏して寅にはおくとも露の身を徒にあらせしが爲
　下句感に堪がたく候
のがるまじ所をかねて思切れ時にいたりてすゞしかるべし
　最後の大事を兼ねてならせとこそ剛なるものもおしへしよしうけた
　まはり置候
おもほへずちがふもの也身の上の慾を離れて義を守れ人
おもほへずちがふべき事恥入候
くるしくと直道をもけ九折の末はくらまのさかさまの世ぞ
　始末の詞に見所おぼく候
やはらぐと怒るをいはゝ弓と犂鳥に二の翅とをしれ
　經文云慈悲忍怒譬如車輪
萬能も一しんとあり仕ふるに身ばしたのむな思案堪忍
　下句難有候
賢不肖用ひすつるといふ人もかならずならば殊勝なるべし
　晉中行氏尊賢弗能用賤不肖弗能去
無勢とて敵をあなどることなかれ多勢を見ても恐る可らず
　弓箭のいさめ無比類候
心こそ軍する身の命なれそろもれば生き揃はぬは死す
　軍の場見るやうに候
ゑかうには我と人とを隔つなよ看經はよししてもせずとも

回向の心を得て悦入候

敵となる人こそは我師匠ぞとおもひ返して身をもたしなめ

此師匠あたらしく驚愚眼候

あきらけきめもくれ竹の此世より迷はゝいかに後の闇路は

一簞醪不能味一河水といへり殊勝興を催し候

きく事も又見る事も心から皆まよひなり皆悟なり

こゝろからまよひさとり眼前に候

弓を得て失ふことも大將の心ひとつの手をばはなれず

得弓與矢豈離楚王之手

めぐりては我身にこそはつかへけれ先祖の祭忠孝の道

忠孝の道我身つかへと守るよし又眼前に候

舌だにも齒のこはきをばしるものを人は心のなからましやは

舌能存齒剛則折也

ゑゝる世をさましもやらで盃に無明の酒をかさぬるはうし

句々のことはりに今四の誡までおもひ出し候

ひとり身を衰と思へ物ごとに民にはゆるすこゝろあるべし

もろ〳〵の國や所の政道は人にまつよくをしへならはせ

ゆるす心もおしへならはせもとり〴〵哀のふかく候

善に遷りあやまれるをば改めよ義不義は生れつかぬもの也

過則勿憚改

すこしきをたれりともしれみちぬれば月も程なく十六夜の空

經文云少欲知足

右の歌は島津相摸入道日新此道をもてあそぶ心ざしの淺からざりしゆゑ

にいろ〳〵學び遠くもとめていひ出せる言葉の花殘れる木のもともなく

おもひの露もれたる草がくれもなしわかき老ひたるをいはず心をとゞめ

て見侍候は此の四十七首を出すしてよきあしき天が下のことわざをしり

侍らん教誡のはじめとなるべき物也童蒙求我のたぐひならむかしげにふ

かくねさせるこゝろのたねがくあらはれぬることの葉は呉竹の世々にも

まれなることになん是を見せ侍りし宗養法師一ふでしるしつけ侍れかしとわりなければはゝかりの關の憚ながらいさゝかおろかなる心をのべ侍る事になりぬ

已前度々以御書狀申候定て可相達候哉返事不到來無心許候抑此一卷遂一覽候執々面白絶言語候料酌書付候外見其憚多事候心事猶重而可申仲候也

狀如件

正月七日　　准三宮御在判

島津相摸入道殿　　近衛植家御在判

## 四、文之の訓點

恭畏の破收義と乾慈論

周易傳義和點

文之の訓點を施せるは、四書集註、及び周易傳義と素書との三部なり、文祿二年朝鮮陣より經史を齎し回る者あり、何れも缺本のみなりけるが、中に周易傳義三册ありしを、文之買取り、他國にて一二册を購ひ、猶缺けたるは人して寫させ、遂に完本と爲して、七年の間研究しつゝ和點を加へたり、彼の易に精しかりし黃環溪にも教を受けしならん、斯くて和點の業を卒りしは義弘に隨行して伏見に至りし慶長四年の春なりき、是れ實に周易新註和點の嚆矢なり、素書は行年六十の時、王氏直說一本を得て、更に門人學之の藏せる朝鮮本張註と對校し、之に和點を加へし者なり、楠本碩水翁(肥前針尾人)所藏の素書刊本一部を予に贈られしが、其の板式を觀るに、匡廓縱四寸五分餘、橫三寸六分、行間界なく、八行十六字、字の大きさ二分餘にして、本文より一字を下げたる註も同形に書し、序跋を合して總て三十枚あり、卷尾の跋文は八行十八字にして、末に慶長二十年乙卯閏六月下澣大龍老夫玄昌書とあり、本文と跋文と同筆なれば、正しく是れ文之和尙の手筆なり、誰が何處にて刻せしやは詳す所なきも、慶長二十年は大龍寺に在りし時とて、此の書も薩摩に刻せし者ならん、而して上木の事は潛隱の紀源も記さず、亦珍重すべき希本なり、(此に謹んで碩水翁の高義を感謝す)

素書和點刊本

四書和點

四書の和點は何年比に成りしやを知らざるも、夙に桂菴以來の家學なる四書輯釋、四書評說は勿論、四書集說四書潤色、

三州と四書塡註

恭長閣梨

四書開心切解等の諸書を參考して、新註の意義を尋釋し、以て和點を加へし者なり、四書の我が邦に入てより、多く年所を經て、始て岐陽の點ありしも傳らず、桂菴點も亦存せずして、僅に一冊の家法倭點を留むるのみ、慶長十五六年に成りし文之の砭愚論に、薩隅日三州之學、四書者、皆就朱子集註誦之、一百五十年于茲矣(文明板大學より此の時迄百三十年)とあれば、桂菴點の傳寫本、三州に行はれけんは無論なれど、果して四書悉く完かりしや否やは詳ならず、而して岐陽桂菴の說を祖述して、其業を完成せしは、實に此の文之點と爲す、易と四書とは、後年門人如竹に因て世に刊行せられ、初學に益し、文敎に資せしこと、擧げて言ふ可からず、其功は千歲に不朽なる者なり。

當時文之は此和點に因て緇素に敎授しけるに、一人の反對者現出して、花々しき論戰を開けり、其は眞言宗小野仁海派の恭畏阿闍梨と云ふ者なり、恭畏は京師西院の人、惠山の惟杏に詩書春秋を學びて外學の名あり、天正十九年律師と爲り、尋ぎて大僧正法印に進み、慶長元年嵯峨の法輪寺に住して、堂舍經藏の廢荒を修理し、三寶院准后義演(二條晴良の子足利義昭の猶子醍醐寺座主兼東寺長老)を請じて落慶を行ひ、中興と稱せられしが、慶長九年の雨乞に驗あり、爾後諸國を徧歷し、遂に明國に渡らんとして日隅の間に漂泊すること三年(或は云く五年)到る處に觀喜天供を行ふこと九十四回と聞えたり、誠に是れ文之に取りては、ゆゝしき大敵なりけり、初め恭畏慶長十四年に文之を正興に訪ひ、文之も其の文學あるを稱して唱和せり、翌十五年の秋冬の交には、恭畏其の講席に於て、宗密の說に交もるに儒敎の義を以しつ、元來淸家の古學派なりければ、果は文之が新註の和點を誹毀して、童蒙を誤るを難じけれど、文之は知らざる爲して打棄置きけるに、恭畏は遂に總持院の苗堯淸水寺の順泉といへる二僧を隨へつゝ、文之が許に詰掛けたり、此は論義を好める密徒の習と、將た當時三州に名ある文之を破して己のが學力を誇らんとてなりけん、扨其の論點は、五十以學易の五十を新註に卒に作れる、沽酒市脯不食の沽市を新註に皆買の義と爲せる、以子妻之の子は男子なるを、新註に女子と爲せるなどを難じたるなりけり、文之强ひて爭はずして返しけるに、恭畏は文之を破し得たりと爲して、人每に己の長を誇りて文之和點の非を說き、遂に三州に學者なしとまで放言しけるより、文之怒つて與恭畏閣梨書を作る、總

古學派と新註派の大論戰

ゆゝしき大敵

與恭畏閣梨書

恭畏の著書

て二千四百餘言、新註及び和點の由來を述べたり、恭畏此書を得て、更に破收義一篇を著はし、亡慮一萬三千六百餘言、集註和點の非を說きければ、文之も亦駁思論一篇約六七千言を作り、以て之を反駁せり、其の爭點は何れも字句の解にして、儒學の大體に關せざれども、恭畏は古註を墨守し、文之は新註を崇信して、鏑を削り火花を散したるは、亦當時學問上の一偉觀たり、駁思論中に擧げし恭畏元旦の詩及び序、幷に和歌を見るに、彼れ文學なきに非ざりけんも、其の詞藻才華は文之の敵に非ず、且其の文之を難じたる節々は、新古二學の冰炭相容れざる者にして、未だ必しも其の甲乙を判じ易からざるも、其の論旨は堅確にして、往々文之をして窮せしむる者なきに非ず、其の學力の膚淺ならざるを見る、蓋し恭畏は古學派が新註に對する發難の功臣たるを失はず、而して其の論爭の薩摩に起りて千古を照映せるは、文之傳中の光彩ならずや、翌十六年六月十三日、三寶院准后義演より島津家久に贈れる書に云く、

文之の才筆

恭畏の學力

嵯峨法輪寺別當恭畏、依有渡唐之望、久在國故、彼地之佛法、既及斷絶了、歎敷思給候、早令上洛候樣ニ、於御異見者、可爲本望候、乍卒爾申試候、御許容所希候、穴賢々々（大日本史料）

六月十三日　判

島津少將どのへ

勇僧の嘉賞

義演准后日記には、坊主恭畏薩摩國久在國、殊頃禪宗と不慮申分出來、旁令上洛樣、國司島津少將へ被成御書、忝可奉存由、種々懇望、依難默止遣之とあり、禪宗と不慮の申分は、即ち文之との大衝突にして、其の事洛中に取沙汰し、恭畏召還の理由と爲りしほどなれば、二人の論戰は一世を驚倒せし者なり、恭畏は此の年十月歸洛して、義演の爲に論語三略などを侍讀し、寛永元年高雄山神護寺に遷住し、七年六月寂す、壽六十六、權僧正を贈らる、著書は密宗血脈鈔三卷あり。

## 附載

### 恭畏阿闍梨儒釋一致論　（三寶院文書載在大日本史料）

是歲八月初吉、吾法門々主法務大阿闍梨耶准三后僧正大和尙位義演、使予講論、爲其來意也、先是受請義之命、再三不得辭諾、吾將侍矣、蓋門主在儒釋一致

之法位而使其門弟子知仁義之源得禮樂之節也又不宜哉原夫我遣三聖之佛說孔子得其一焉我乘內證經說龍猛當其仁並是爲如來識文加之吾祖師弘法大師曰聖者驅人教網三種所謂釋孔李也雖深淺有隔並皆聖說入一雖何乖忠孝矣富哉是言乎孔門日用言行比於我密教豈爲非即事而眞之法門哉雖法身如來密敎傳之至今者以龍猛爲祖雖聖人先王仁道覺而好古者以孔子爲師嗚呼人能弘道其斯之謂與今於其人非門主誰焉于朝于夕住菩提道場密誦觀察之德大哉生覺月於無相之心殿色即空觀惠日於有相之識界空即色尋常入得此觀門則儒道釋三教何爲隔絕之乎圓融無得之德行仰彌高哉不足歎其高德重之以一偈云爾

儒釋同歸德有隣　金剛生法子恭畏百拜
孔門仁近胸天月　時哉與廢亦於人
　　和我佛光師事眞

慶長十八年八月吉日

大進殿　參人々御中

文之筆題　　武野文學博士所藏

慶長板素書跋　　著者所藏

其点畫而議之論之非復一日於是使南京邵光道謄写之顔正其誤旁加倭点与鄉友之好古者讀之猶有所未至者闕之以俟知者焉。

慶長二十年乙卯閏六月下澣。　大龍老夫玄昌書

寫本南浦文集卷首　　慶應義塾所藏

## 五、文之の著書と門人

著書

南浦文集の異本四種

文之の著書は南浦文集、聖蹟圖和抄、決勝記、襟帶集等なるが、南浦文集は門人如竹に因て刊行せられたり、然るに南浦文集には異本數種あり、一に寛永二年本、二に寛永六年本、三に慶安本、四に古寫六冊本是なり、寛永二年本は活版にして、其の卷尾には「寛永乙丑仲秋四條寺町校正刊行」と識し、編者の跋文なく、印行書舗の名もなく、總て三卷、詩文合して一百九首あり、如竹の編刊せるは此の本ならん、寛永六年本は島津國史十九卷文之傳の註に。

寛永六年本の非識

舊有南浦文集印本三卷、詩文合一百九十餘首、蓋其徒弟所編集、跋曰、文集一卷、詩集一卷、戲言一卷、寛永己巳梓行云、而其題曰戲言者、鄙褻可憎、恨不使當時有識者爲此翁藏拙耳。

とある者就ち是なり、慶安本も亦三卷にして、卷尾に慶安二暦季秋中旬中野道伴刊行と識し、跋文一篇あり、曰く。

慶安本の跋

南浦戲言、前建長文之老師薩州人之所作也、(中略)老師在世之日、以所自著之詩

文使予謄寫焉、然詩與文混雜而不分其部類、不定其卷帙、辭世之後、予始表章之。又編次之、別爲三卷、文集一卷、詩集一卷、戲言一卷。今壽之於梓、以遺愛於後昆云

刊本の異同

爾寛永己巳季秋下澣、末裔

知るべし此は島津國史の註に引く所の跋の原文にして、寛永六年本梓行の時に作りし者なるを、然れば慶安本は寛永六年本の再刊なるや明なり、扨跋には末裔とのみありて名なく、誰が作とも知る由なし、原本には名ありけんを削り去れるなるべし、或は文之高弟の學之などが編刊せし者にや、刊本三種の上中二卷は、目次略同じきも、中に小異あり、寛永二年本には、恭畏と唱和の詩を除きて、論戰の二書を收め、六年本及び慶安本には、論戰の二書を除きて、恭畏唱和の詩を載せ、且つ道學先生の嘲を受くべき戲言をさへ收めて、外交文書中の須知(外蕃通書には示論唐商文とあり)一篇を脫したるが如き用意不用意は、霄壤の差あり、異本第四の古寫本は島津忠濟公の所藏にして、南浦文集二冊、南浦棹歌三冊、南浦戲言一冊、計六冊あり、小楷の善寫にして、訓點をも加へたるが、編次は刊本と同じからず、島津國史の同じ註に。

南浦棹歌

近聞大龍寺藏其、其は南浦文集也寫本、借而觀之、其詩文一百九十餘首、與印本同、其外一千二百餘首、印本所無、合一千四百餘首、編爲六冊、無卷數目錄、其字亦佳、相傳以爲玄昌手筆、題曰南浦棹歌者、詩多可誦、他日庶鏤諸版云爾。

玄昌手筆の文集

とある者、就ち是れ島津公の文庫に歸せし古寫本なるべし、予嘗て請ふて之を觀しに、其の筆蹟殆ど素書と相似たれば、文之の眞蹟と傳ふる者、果して信なるべし、予は島津家の印行あらんことを望む者なり。

南浦戲言と風俗

南浦戲言には卑猥なる事ども多く、山本秋水の鄙褻憎むべしと爲せるは一理あれど、文學上及び風俗言語の史料としては、誠に面白き者なり、且其の戲言は、一休宗純の狂雲集より脫胎して、更に俗語を活用せる、實に後世狂詩の祖と謂ふべく日本文學史を叙して狂詩に及ぶ者の忘却す可からざる人にして、銅脈寢惚恐佛安穴蜀山の輩は皆其の子孫なり、今其の一例を示さん。

狂詩の題

一筆書音忝奉存、戴之幾度更披翻、此方留滯强三日、何樣罷歸即扣門。

天目捧來朱漆臺、隨分茶子法師梅、宇治難叶唯雲脚、三服挑膏迷惑哉。

出入官門夜未明、年々公役又誰成、尾張普請更迷惑、匪當出銀人亦行。

老僧寒極意如燒頻手數珠新富專想是今朝拋萬事社家奴僕捕參錢。

莫怪年頭遲扣門老來膝弱待天溫起居振舞無調法御祝坐敷斟酌存。

文之の門人

伊勢貞昌

學者安碩

文之の門人は伊勢貞昌國老稱兵部少輔を翹楚と爲す、貞昌は文學あり、政事の才あり、家康召して旗下と爲さんとしゝも、辭して就かざりしと云ふ、亦實に當時の賢大夫なり、一日雪ふる、貞昌詩を賦して文之に示しゝに、文之悅びず、雪には四民難儀するを、國老として景色の好きを樂むが如きは、政を爲す所以に非ずと諫めしとぞ、文之の人を敎ふる道ありと謂ふべし、扨嗣法の弟子には、學者名は玄碩學之の門人一溪名守榮、一溪の門人日東に至るまで、皆文之の衣鉢を傳へしが不門名は慈宜に至つて、法を備前松翠寺の無聊和尙に嗣ぎ、學術も亦蕃山と同時なれば、王學にや染みけん、士人其が文之の學に非ざるを惜めりと云ふ、而して文之の學統を傳ふる者は如竹散人なり。

## （八）披玖聖人

### 上、如竹散人▲王侯の師

如竹の出生

桂菴文之の著書を上梓して、其の學を世に行ひし者は如竹散人なり、如竹は九州薩摩潟沖の小島なる屋久島安房村の人なり、長風浪を破つて薩摩洋を過ぐる者は、海上に一は高く一は長き二島を望むならん、長きは種子島、高きは屋久島なり、二島並に種子島氏の舊封、朝鮮陣後島津氏の直轄と爲る）にして、法華盛行の地たり、如竹の姓は泊氏、父は舵工なり、元龜元年を以て生る、文之より少きこと十五年、

海島の人

舵工の子

安房の本佛寺に入て、法華宗の僧と爲り、名を日章と曰ひ、養善院と稱せしが、既に長じて京師の本能寺に寫し、後ち薩州に歸り、文之和尙に師事して程朱の學を受け、散人如竹と稱して僧名を用ひざりき、其の文之に從學せし由來二說あり、室鳩巢の如竹傳には、如竹鄕里に歸省し、再び上洛せんとして薩の城下を過ぎし時、文之の四書を講ずるを聞き、遂に從學して儒と爲れりと、島津國史も亦之に從へり、

法華僧より儒に歸す

如竹傳の說

漢學紀源は如竹門人愛甲喜春の說に據り、如竹本能寺に在りし時、同寮の僧に勸

藤堂高虎の信仰

められて藤原惺窩が四書新註を講ずるを聞き、此の學薩摩に出づ、其の源を尋ねんに若かずとて、歸國して文之に從學せりと爲す、二說未だ孰れか是なるを知らず、慶長中伊勢の藤堂和泉守高虎に事へて侍讀と爲る、亦二說あり、鳩巢文集は、家貧なるが爲に仕官を東都に求めしに、高虎其の學行あるを聞きて之を聘せりと爲し、漢學紀源は本田親孚の說を引きて、如竹有馬の溫泉に浴せし時、藤堂侯の家老某と語り、某其の學行に服し、歸りて之を高虎に薦めんと思ふも、其の行はれざるを恐れ、我れ天下の至寶を見きとのみ語りて、明らさまに言はず、高虎の再三詰問するを待ちて實を告げゝれば、高虎乃ち悅び、往きて之を聘せしむと曰へり、後說は頗る小說的なり、(同じ書に高虎寺を創して之を居らしむとあれど、津阪東陽の車修錄には寺の事見えず)如竹始て高虎に見ゆるや、之に告げて曰く、鄙人忌諱を知らず、職は盡言に在り、願くは君之を容れよ、然らざれば則辭せんと、高虎曰く、是れ吾が君を敬する所以なり、侯諛の徒、吾れ豈人に乏しからんやと、是より常に左右に在りて裨益する所多し、寛永七年高虎卒し、嗣君學を好まず、因て仕を致して去れり、蓋し慶長の末年に禍を釋きたりとすれば、元和寛永を通じて十六七年





琉球と桂菴漢

琉球國王の師

明人梁澤氏

琉人と文之點

漢學紀林傳の國一

間は藤堂氏に在りし者の如きも、其の事蹟詳ならざるこそ憾なれ。

如竹藤堂氏を去て一旦歸國し、年六十三の寛永九年(或云十年)海に浮んで琉球に游べり、是より先き琉球の圓覺寺には文之の友なる天叟禪翁あり、二州の門下にして文之の同學なる景叔春蘆二僧も亦先師の典籍を携へて跡を此に寄せしこと、南浦の文に見えたれば、桂菴學派は夙に琉球に入りし者の如し、然ればにや如竹は國王の師事する所と爲りて、其の世子に侍讀せり、琉球に流寓せし明人梁澤氏蓋だ如竹を敬し、其の居に名けて顧天菴と曰へりとぞ、此より琉球人は人倫を知り禮義を辨せしが、後世に至りても文之點に非ざれば讀まず、琉使の江戸に至る毎に、文之點四書を購ひ歸れりとぞ、是れ如竹敎化の致す所なるべし。

如竹は二三年許りにして琉球より歸國し、更に大阪に游びて帷を垂れたり、想ふに是れ寛永十四五年の事にして、六十七八の比にもやあらん、鳩巢の父と交はりしは此の時なるが、鳩巢が父より聞けりとて作りし如竹傳には、此の時年八十に近しとあれど、傳聞の誤りなるべし、如竹は實に浪華儒林傳中開卷第一の人なり、居ること久しからずして歸島せし者の如し。

薩摩の侍讀

如竹の直言

同じく十七年には同門の國老伊勢貞昌如竹を薦めて學を講せしめんことを島津氏に勸む、因て召出されて鹿兒島に至り、太守光久の師と爲り、又諸士に敎授せり、光久本佛寺を創して之に居らしむ、如竹人と爲り質直にして文少く、妄に笑語せず、其の王侯と語るも惡憚する所なし、嘗て高虎の前に進言して曰く、人の禽獸に異れるは此の道を行ふを以なり、苟くも此の道を行はざれば、其れ何を以て人と爲さん、禽獸に譬ふれば、君侯は是れ虎狼なり、人實に之を畏る、臣等は是れ狐犬なり、人實に之を侮る、畏るゝと侮るとは異れども、其の獸たるは一なりと、高虎笑て君の言太だ過ぎたる無らんかと云へり、當時聞く者其直言に驚かざる無かりしとぞ、如竹は此に至りて光久に侍讀し、一日孟子を講じて、齊宣王曰寡人之囿方四十里、民以爲大何也に至り、慨然として公に告げて曰く、方今君侯囿を吉野谷山等數所に爲るは、啻に四十里のみならず、豈民は大なりと爲さゝらんやと、光久容を改めたりと云ふ、其直言憚らざるは、率ね此の類なり、又或は傳ふ、某侯の世子凶暴、父侯賢を薩侯に求む、侯如竹を薦む、如竹世子に侍し、常に其の勇を稱しければ、世子悅びて其敎を受け、遂に其の非を悛めたりと、恐らくは附會の說なるべし、如竹光久に事ふること五六年にして暇を乞ひ、屋久島に歸りて殘年を安房の本佛寺に送りしが、明暦元年(或云二年)五月二十五日(或云十五日)を以て歿しき、年八十六、

如竹歿

## 中、如竹の學問

### 著書に勝れる刋書の功

半儒半僧

如竹の學問

如竹佛を去て儒に歸せしも、猶其の頂を圓にし其の袍を方にして佛寺に住し、半儒半僧遂に娶らざりしは、一旦出家せし身の其の本に背かじとてなりけん、且當時の風俗は未だ儒官の束髮を許さゝりしにも因らん、未だ必ずしも深く咎むるに足らず、而して其の學問に至りては、頗る醇粹なるに庶幾し、鳩巢の如竹傳に、其の大阪に來れるは年八十に近く、猶能く强力書を講じたりとあれば、其の壯時の精力知るべく、晩年には近思錄を得て、我に數年を假さば至處に到らんと云ひしにも、其の學んで而して倦まざりしを知るに足れり、其が琉球に適きしは、漢學紀源に、一秀才の明より來ると聞き、之に學ばんが爲にして、秀才を師として四書を講

究し、理學精熟せりとあり、如竹には著述なくして、其の學說を窺ふを得ざるも、鳩巢の言へりし如く、學は博を力めず、精密を尙んで踐履を愼めり、又詩賦を好まずとありて、詩文章は其の得意に非ず。

義利

利出私情害萬端、義循天理樂而安、是非得失命霄壤、相去其初一髮間。

如竹の詩

此の篇の如きは其の學識の萬一を窺ふに足らんか、最も其の道德上の所說を見るべき者は、琉球より其の親族子弟に與へし家訓なり。

如竹の家訓

熊一筆に申候各の身持夜白氣遣に存候に付申入候。

一御公義方御奉公、何事不寄專一候。

一親にこうこふの儀いしやうを進上申、うまきものをもとめ進上申を、こうこふとおもふなよ、親の腹立ざる樣に仕事專一候。

一人はわるかれかし、我一人よかれかしとおもふ心あれば、其のばちにて我が身もあしくなるものに見候。

一人はよかれかしとおもふ心あれば、其のごとくにて我身もよくなるものにて候間、其の心得專一候。

一大酒をのみ、ひるねを不仕候事專一候。

一一年のはかり事は春にあり、春にもの種子をまき不申候得者、年中の被下候ものなく候條、たねをまきつけ候事專一候。

一一日のはかり事といふは、よひからあんじ候て、何のしよくを仕候とおもひ候て、辰の時より出立仕候事專一候。

右之條々能々心がけ專一候

六月十三日　　本琉球より　　如竹印

屋久島安房にて

泊與右衛門殿▲泊彌兵衛殿▲同太右衛門殿▲同善兵衛殿▲

勘兵衛殿▲高茂兵衛殿▲同八左衛門殿

此の忠孝忠恕勤勉の道を諭せる家訓は、今日も諸人の遵奉すべき一大經文に非ずや、而して數十卷にも價すべき大著述に非ずや。

如竹の功

如竹が著述にも勝れる鉛槧の功は、藤堂氏に仕へて江戸に在りし時に成れり、寛

文之點四書の跋

永元年に桂菴の家法倭點を刻し、其翌二年に南浦文集を印行し、同年四書集註文之點を同じく四年に周易傳義を梓行せり、四書集註及び周易傳義の跋に云く。

周易傳義の跋

四書集註和訓近世其說惟多。予之授童蒙者也、傳之於師也、中野道伴翁請鋟諸梓。予也所傳差訛而懼遠師說、以故辭而不許、翁請之不已、於是不得固辭、使人謄寫之、應于其請也、世之觀者是處是之、非處非之幸也。

寛永乙丑季秋吉旦散人如竹書于武州江城

周易程傳本義未有和點、讀者往々苦之、以故吾文之翁旁加和點、以示門弟子也。今也踰恐家醜之顯外、而欲幼學之易曉、故壽之木、以廣其傳云。

寛永第四丁卯仲冬吉旦散人如竹書

文之點の盛行

四書集註の和訓近來其の說惟れ多しとあれば、元和寛永の際に至りては、江戸にも四書和點の傳播少からざりしを知るべきも、未だ世上に梓行されし者はあらざりけん、而して其の梓行は、蓋し此の如竹が師傳に因れる文之點四書を以て嚆矢と爲す、然れば其の書の風行すること甚だ盛にして、寛永十九年壬午には、京都本能寺前藤田庄左衛門にも翻刻せられ、翌二十年癸未乾梅中旬には、江戸に再板せられ、後世各種の訓點本も、亦皆文之點四書を原本として、改正梓行せし者の如く、文之點の特色を存する板本甚だ多し、蓋し德川氏に至りて、四書集註が士人の普通讀本たるに至りし功績は、如竹刊行の力與りて多きに居るを疑はず、周易傳義に至りては、未有和點と云ひ、文之の和點を以て最初の原本と爲すや明かなり、如竹刊行してより、其の傳甚だ盛にして、慶安元祿の重刻再刊と爲りたりき。

文之點詩經

予は近比更に文之點の詩經集註一部を得たり、卷尾に豐雪齋道伴刊と記せり、道伴は即ち如竹が四書を刻せしめし中野道伴なり、文之に詩經の點あるを聞かず、是れ蓋し如竹が自ら訓點を施しゝ者にもや、或は四書及び周易に續きて、五經集註全部をも加點刊行せん志ありしか、將如竹門人の所爲か、今之を知る能はざるも、世に文之の法式に依れる訓點本多きは、桂菴學派の學問敎育に功ある所以なり。

## 下、如竹の德行

### 如竹の門人

德行卓々

如竹の學は浮華を厭ひて實實を尚び、實踐明行を以て主と爲す、故に其の德行卓卓として傳ふ可き者多し。

屋久島の地は、山岳多くして、平原なく、民皆鱗介の利に賴るのみ、概ね皆貧窶なり、如竹已に佛を去て儒に入る、儒を以て自ら活せざるを得ず、是れ其の仕を求めし所以なるべし、既に仕へて厚祿を得るも、自ら奉ずること甚だ薄く、且人之に金を饋れば辭せず、以て蓄積する所あり、人或は其の貪を疑ひしも、此は歸りて其の貧陋なる鄉黨を賑恤せん爲なりき、故に其の藤堂氏を辭して歸鄉するや、悉く其の產業を揮つて親族を賑せり、其の琉球より歸りし時も亦然り、島津光久の如竹を待つこと甚だ優なりしが、如竹骸骨を乞ひて、歸島せんとしゝ時、國老島津久通、養老の俸を賜ひて其の身を終るべき旨を傳ふ、如竹辭退して、日比過分の御扶持を蒙りゐふをもて、老軀を保つに不足なしと申しければ、久通笑つて、聖人臭きことを申すもの哉と云ひしに、如竹襟を正して、某少きより聖人の書を讀みしは、聖人と爲らんとてなり、假令聖人と爲る能はずとも、聖人臭くなりゐへば讀書の甲斐も之あり、御褒詞難有き仕合と申しけるにぞ、久通返す言葉もなくて赧然たるばかりなりける、(久通記圖書と稱し、亦文之に從學せしが、譜牒に精しく、征韓錄島津世錄記等を著はしゝ人なり)十室の邑、忠信丘が如き者ありの語の如く、西海孤島の中に、此聖人臭き人を出しゝは、豈末代の奇特に非ずや、是れ予が掖玖聖人と名くる所以なり、掖玖は屋久の古名なり、扨も如竹歸島に就きては、鹿兒島なる本佛寺を永く立置かれゐやう、法華の徒より願出でけるに、如竹は之を不可とし、寺祿二百石は、良士二人を養ふに足れり、願くば寺を毀ちて士を養へと云へりとぞ、如竹既に屋久島に歸老して、其の民居海に瀕し、井水皆鹹く、居民之に苦むを見るや、悉く其の蓄ふる所の金を出して、工を傭ひ衆を役し、巖を碎き地を鑿ち、泉を明星山に引きて、民間に通ずること數町、之を用水川と稱へて飲料と爲しければ、村民長く其の恩澤に浴し、今も如竹堀と稱して、朝夕の命の泉と爲せり。

蓄積して賑恤す

聖人臭き人

寺を毀ちて士を養へ

如竹溝

一年饑饉に遇ひしに、如竹粟を散じて衆を救へり、門人餘米を存せしを、如竹其の故を問ふ、門人此は師に進らせん爲なりと云ひければ、人の餓死するを視て、我れ安んぞ獨り生きんと云ひて、悉く皆人に與へさせけり。

粟を散じ衆を救す

屋久島には神代杉とて、年古りたる杉の大木ありて、價いと貴し、初め島民之を伐

神代杉の伐採

れば祟を爲すとて、敢て伐る者なし、如竹以爲らく、斧斤時を以て山林に入るは王道の一なりと、乃ち山上に登りて山神に禱り、山を下りて島民に告ぐるやう、之を伐るも憂なし、山神予に告げて、前夜に斧を樹下に挂けよ、斧倒れざる者は神木に非ずと宜まへり、(一說に之を伐て血出でざる者は神木に非ず云々、斧倒れざる木は、伐るとても祟なければ、宜しく伐て利を得べしと、島民之に從ひしより、神代杉は屋久島の名產と爲れり。

**如竹樣の墓**

島民の如竹を信ずること神の如く、其の敎を奉ずること、一に律令の如くなりけるが、其の歿するや、廟を墓地に立てゝ、之を祀りて如竹樣と云へり、如竹人の書を謂ふ、者あれば、必ず經傳の語又は古語を書して之を與ふを常とし、自作の詩文を書せしことあらず、其の書甚だ少けれども、往々島民の家に存する者あり、一年火起りしに、如竹の書を挂けし家は、災を免れければ、如竹樣の書は火事の守なりと稱して、之を佩ぶこと神符の如し、如竹の德澤民に在り、之を敬することを久しして而して衰へず、豈聖人と稱するも恥る所なき者に非ずや。

**如竹の書**

**如竹の門人**

如竹門人甚だ多し、曰く東鄕重經、(稱九右衛門又游學京師、薩摩士人の典型と稱したる伊集院俊矩は重經の門に出づ、曰く竹內助重(名益祐、以直言著)、曰く本田親貞(新右衛門)、親貞は光久の常御供たり、光久將に江戸に覲せんとし、期を刻して令を下す、此の日別宴を開きて、日將に暮れんとするも駕を發せず、如竹も亦來りて奉別し、此の狀を見て、嗚呼忠臣なきかと獨語せしを、親貞聞きて大に怒り、我輩旦夕忠を忘れず、何ぞ其れ不禮なると詰掛けしに、如竹曰く、君を諫むるを忠臣と曰ふ、今君期を刻して發せず、信を下に失ふ、而して一人の諫むる者なきは、忠臣なきなりと、親貞乃ち服して、遂に如竹に從學せり、曰く愛甲喜春、喜春は竹門の魁にして、後ち儒林の一大疑獄を發せり。

如竹散人筆戲

本所刻

# （九）惺窩對文之點の疑獄

## 上、藤原惺窩と林羅山

### 惺窩點と道春點

五山學僧に依て研究せられし宋學の正統は、桂菴に因て薩摩に行はれ、大學刊行と爲り、文之點四書と爲り、其の傍系は大内氏に入て南村梅軒を出し、土佐に行はれて海南學の一派を開きしは、既に畧之を說けり、近世の京學は藤原惺窩を以て祖と爲し、桂菴梅軒に後るゝこと百餘年、若くは數十年、文之と時を同じくして京師に起れり。

惺窩は名は肅、字は斂夫、參議冷泉爲純の第三子なり、其采邑播州細川莊に生れ、七八歲の時、東明和尙に從學し、心經法華等を誦して神童の稱あり、文之が文殊童の名を得たると相似たり、遂に度して僧と爲り名をも蕣首座と稱し、妙壽院と號したりき、東明和尙の師九峰和尙は大江氏にして、儒より佛に入りし人なれば、東明も外典に通せしなるべく、蕣首座の惺窩も此比より儒書を學びしならん、然れど

高高の業性

泉和尚

其宋學を尊信するに至りしは、其の叔父なる京師相國寺の泉和尚が指導なりけん、年十八の天正六年、播州の釆邑をば別所長治が爲に侵掠せられて、父兄難に殉しけるより、(土人其の義に感じ父子三人を葬りて松三四株を植え冷泉塚と曰ふ)惺窩母氏を奉じて泉和尚に京師に依れり、惺窩より少きこと四歳にして同じ比に京師に游學せし江村專齋は、程朱の學を以て加藤清正に事へし人なるが、其の老後の物語に曰く。

江村專齋

幼年の時、洛中に四書素讀教もる人なし、公家衆の内、山科殿知れりとて三部を習ひ、孟子に至りて、本を人にかし出したりとて終に教へず、實は知らざるなり、右の時、外家に道伯と云人論語を講談す、惺窩の叔父宣首座(原註相國寺普光院の僧薫の弟)も、老人と同じく毎度講席に侍りぬ、此の時分妙心寺の南化(秀吉の歸依僧)天龍寺の策彦(入明僧)名あり。

山科殿

道伯

然るにても九州の隅なる薩摩四國の果なる土佐には、四書集註の行はれし時代に、宋學の淵叢なる京都は、却て萎微振はざること如斯き者ありしか、此は蓋し俗間の學を言ふ者にして、當時五山の禪文學は、漸く類唐に趨き古の盛に及ばざること遠かりしものから、猶南化策彦等の如き學僧なきに非ず、而して山科殿及び道伯の徒も、亦蓋し之を岐陽雲章の兒孫に學びしなるべし、道伯は儒醫ならん、宣首座は即ち泉和尚にして、江村專齋と同じく道伯論語の講席に侍りしを見れば、宋學信仰の僧たるや知るべし、而して惺窩も亦泉和尚と學を論じ、且五山の學僧なる承兌靈三の徒と交はれり、其が程朱學を信せし發端は蓋し在京中の事ならん、那波魯堂の學問源流に惺窩初め相國寺の塔中林光院の主と爲りて住持し、中年に見所ありて斯の學を信じ、其の身を改めて還俗し、遂に儒學の宗と爲れりと云へり、惺窩能く玄慧以來の學者が猶佛を去る能はざりし陋習を脱し、名字を改めて儒衣を服し、承兌と眞俗を論ずるや、兌をして語塞がらしめ、正に菅原爲時の囮爾に屈せしと相反して、以て儒林の爲に氣を吐きしは、高見特行、前賢に卓絶すと謂ふべし、然れど同書に、惺窩還俗するも妻子を蓄へず、我れ還俗せしは人倫の棄つ可らざるを貴べばなり、妻子肉食の爲に非ずと云ひ、唯髻後二寸許の下に、髯鬆二三十莖許を、長さ六七寸許に置きて、還俗の驗と爲せりとあるは、未だ實を得ざる者あり、惺窩が妻を娶りて子を生めるは、惺窩文集卷首に載せたる藤原爲經

林光院の主

還俗後の惺窩

惺窩曾孫)撰の系譜畧に「蕭の子爲景後水尾帝に奉仕す」とあるにも知られ、冷泉系圖にも、爲景が實に爲純卿の孫にして惺窩の男なる由を明記せる、亦以て證と爲すべし、其の餘事蹟は諸書に詳なり、必ずしも贅述せず。

惺窩京より播州に歸りて赤松廣通に客たりしが後年明に入らんとして海に浮び、風濤に遇ふて果さず、遂に戸を閉ぢて書を讀み、四書五經に倭訓を施せり、時に朝鮮の刑部員外郎姜沆俘虜と爲りて(逸史科繆の說赤松氏に流寫せり、惺窩廣通の意を承けて、序を姜沆に求めたる座間筆談に曰く。

朝鮮人姜沆

日本の諸家儒を言ふ者、古より今に至るまで、唯漢唐の學を傳へて、而して未だ宋儒の理を知らず、予れ幼より師なし、獨り書を讀む、自ら謂ふに漢唐の儒者、詞章記誦の間に過ぎず、決して聖學誠實の見識なし、若し宋儒なければ、豈聖學の絕緒を續がんや、赤松公今新に四書五經の經文を書し、予に請ふて宋儒の意を以て倭訓を字傍に加へ、後學を惠まんと欲す、日本宋儒の解を譯する者、此の書を以て原本と爲す云々。

四書五經の原本

姜沆即ち序を作りて、盛んに其の學を稱せり、實に慶長四年序に萬曆己亥三月一日とあり)なり。

林羅山

惺窩の門人林羅山、如竹と時を同じくす、名は信勝、字は子信、初め又三郎と稱し、後ち民部卿法印と稱す、年十四建仁寺の古磵和尚に就て書を讀む、亦五山文學の產兒なり、年十八始て朱子集註を讀み、徒を聚めて之を講せしに、清原秀賢之を攻擊して、古より勅許なければ講書を得ずと云ひしを、德川家康聞きて羅山に左袒せり、年二十二の慶長十年、惺窩の門に入り、惺窩羅山を家康に薦め、始て二條城に謁してより、其擢用する所と爲り、子孫世々幕府の儒官と爲り、官學の文權を握て、三百年の敎化を興せり、而して四書の道春點は最も世に行はる、相傳ふ道春點は實に彼の日本宋學の原本と誇りし惺窩の倭訓を祖述せし者なりと、亦文之點が桂菴の家法和點に本くと同じ、惺窩羅山は家康の知を得て天下の上流に據りしかば、學者尊んで百代の儒宗と稱せしが、惺窩歿後(元和五年歿、年五十九)文之の死に先つこと一年(六十八年、羅山歿後(明曆三年歿、年七十五、如竹の死に後るゝこと三年、二十九年の貞享三年に至りて、如竹散人の高弟なる愛甲喜春は、惺窩が文之點刪竊の事實を訐きたりき。

五山文學の產兒

羅山と清原秀賢

林家と官學

## 中、愛甲喜春の聞書

愛甲喜春

竹門の魁なる愛甲喜春、名は季定、一名廣隆、日州志布志の人、人と爲り質直にして、恬淡寡言なり、寛永十七年、年三十六にて屋久島に渡り、如竹に從ふて程朱の學を受け、前後從游すること六年、又易を江夏友賢の子なる二閑に學び、儒醫を以て時に重んぜられ、慶安四年擢んでられて城下侍と爲り、元祿十年に歿す、年九十二なり、其が師の如竹に聞きし話の筆記は、大日本教育史資料に出でたり、曰く。

喜春聞書

我が如竹老師謂く、甲斐信玄公(赤松廣通の誤)の鴻儒惺窩先生は、天下の英才なり、甲斐亡國の後(赤松氏關ヶ原役後に亡ぶ)洛陽に牢落して、而して四書新註に和訓なきを愁へ、自ら中華の地に至り、新註の奥義を傳へて、和訓を點せんと欲す、故に西して坊津に下り、中華に赴かんと欲して風に隔てられ、船を山川の津に泊す、(行狀には筑前より海に浮び、鬼界島に漂着すとあり、其の路順は誤聞なり)是に於て正龍寺に寄宿し、留滯數日、僧の論語を誦する者あり、其の書を取て之を見しに新註和訓にして其の意に稱ひ、一唱三歎して問ふて曰く、此の和訓は何人の點せし所ぞやと、僧答へて曰く、大隅正興寺の住僧文之和尚の點なりと、先生手を拍ちて而して驚然として曰く、我れ中華に赴かんと欲する者、他なし一に新註和訓を點せんが爲のみ、今幸に此の書あり、則ち何ぞ中華に赴かんやと、乃ち其の書を乞ひ得て以て洛陽に達せり、先生新註を講ずるの日、洛陽の書生、聽く者幾千人なるを知らず(誇張に過ぐ)、時に予(予は如竹なり)や本能寺に滯在せしが、同志の僧、新註の講義を聞かんと倡へたり、予れ思ふに新註和訓の濫觴は予の生國なり、何ぞ其の源を尋ねざるかと、忽ち洛陽を辭して、文之和尚の門下に游學する者八年なり、恐や不敏と雖も、章句訓詁の末に至ては、頗る其の義を解す(原漢文)。

四藩野史

薩の士大夫此の說を信じて之を書に筆せし者は寶曆中に成りし得能通昌の西藩野史最も古し、而して惺窩入明の船、風に逢ふて鬼界島に漂着し、坊の津に入ると爲せるは、稍惺窩行狀に合するも、惺窩朱學を一乘院に在りし桂菴に受くと云へるは、二人の時代に千里の差ありて、傳聞の誤なるや明なり、猪鹿倉某の鹿兒島外史も亦此の說を信じ、更に附會するに日新公の事を以せるも、此の書杜撰多く、

漢學紀源の考

信を取るに足らず、而して此の說を舖張して、力を考據に費し、以て信を後人に取りし者は、伊地知潛隱の漢學紀源と爲す、其の說の大要に曰く。

▲▲▲文祿二年の夏、惺窩江戸より洛に歸り、四書新註未だ和訓あらざるを悼み、明に游ばんと欲し、鬼界島に漂到し其の冬棹を回して薩摩の山川に泊り、僧問得を正龍寺に訪ひ、新註和訓を弟子に授くるを見て、文之和尙の點する所なるを知り、此の書を得れば明に入るを要せずとて、問得に請ふて和點本及び桂菴の家法和點を寫し、▲▲▲翌三年猶寺に在りて母の訃音に接し、寫本功竣るを待ちて東歸の途に就けり、筑前の儒醫靑木甫意の著書に惺窩の宋學を弘めしは筑前より掀ると云へるが、蓋し薩摩よりの歸途ならん、惺窩文集載する所の山河の歌は、さだかならねども薩摩の山川にもや、又

僧龍蟠處鎖巖扃、吟向東風地亦靈、雲外欲昏鐘色濕、小樓春雨碧溟々。

杏壇春暮事吟游、今日關西有孔丘、傾蓋論交非邂逅、三生石上舊風流。

の二篇は正龍寺に在りて作りし者なり云々。

喜春は惺窩入明の年月を言はざるも、潛隱は文祿二年と爲し、遂に年代を考へて桂菴門下の問得を引出し、且惺窩集に照して詩歌を援引したる頗る附會を嫌ふも、亦牽合に巧なる者なり、以上は皆私撰なり、島津氏官撰の書に、島津國史と三國名勝圖會とあり、三國名勝圖會は、潛隱の友なる五代秀堯橋口兼柄等藩命を奉じて編纂し、天保十四年を以て成れり、亦漢學紀源と其說を同くし、且惺窩集の逢關西故人の詩前記の杏壇春暮の七絕)は、舊傳に正龍寺の問得に贈る者と爲すと曰ひ、且惺窩桂文の功を竊みて以て名を售ると明記して憚る所なし、島津國史は薩摩第一の大儒山本秋水の、命を奉じて編纂せし者にして、其の繕寫呈上せしは享保三年に在り、西藩野史に後るゝこと四十餘年にして、漢學紀源三國名勝圖會に先つこと三十餘年なれば、喜春の傳說を聞知せざる筈なきに、桂菴文之如竹の事蹟を叙せし處にも、寛永十年二月五日、忍岡孔子堂の釋菜を特書して、桂菴の首倡文之の敎授より、惺羅の講學に及びし處にも、惺窩と文之點との關係は、一言も說及ばず。

三國名勝圖會の剽竊說

島津國史は一言も及ばず

惺窩點對文之點の關係が尤も早く世に知られしは大日本敎育史資料に出でし記事ならん、其後ち漢學紀源の寫本が東京の學界に出るに及びて、學者皆其の博

近人著述と惺窩

洽精確を歎稱し、而して相躍きて而して出でし近人の著述皆材料を漢學紀源に取れるが、一點の疑を此に挾む者なく、惺窩は文之點を薩摩に得て上國に講說すと爲せり、惺窩果して剽竊の罪を犯しゝか。

獄を決する者なし

## 下、惺窩回護說

惺窩にして果して文之點を剽竊して、以て己の獨創と爲し、人を欺き己を欺き、天下後世を欺きし者ならんには、啻に程朱の罪人たるのみならず、孔孟の罪人にして、宜しく鼓を鳴らして攻むべき者たり、若し喜春の聞書なる者或は後人の僞作ならんか、薩人の功を忌み名を妬みて先賢の美を傷けんとせる、其罪決して輕からず、宜しく學問の爲に此の獄を決すべきは、豈學者の責に非ずや、而も漢學紀源を潛隱に得て通讀したりし佐藤一齋は、假令王學を信ずればとて、林述齋の門に在る以上は惺窩の爲に辯ずべきに、只徒に感服せるのみ、現代の學者も亦花岡氏の「朱子學の由來」足利氏の「朱子學の傳來と其の學派」、久保氏の「日本儒學史」、井上氏の「日本程朱學派の哲學」、川田氏の「程朱學派の源流」等、皆漢學紀源の說に從ひて疑

喜春聞書駁論

駁論の否の一

ひを挾む者なし、頗る不穿鑿に似たり、然る中に只一人の戈を執て惺窩の爲に寃を雪ぐ者あり、經史評林に出でし鹿兒島造士館教授山田準氏(號濟齋山田方谷の孫)の「釋桂菴と藤原惺窩」是なり、喜春の聞書及び西藩野史を駁せる要領に曰く。

(一)赤松廣通を武田信玄と爲せるは誤れり、▲(二)惺窩行狀に據れば、惺窩入明は文物を慕ふに在り、喜春の所謂和訓を四書に施さんが爲に非ず、▲(三)惺窩山川に至りしこと、惺窩集及び行狀に證なし、▲(四)西藩野史の坊津一乘院云云は、如竹の言と符せず、且つ此の時桂菴死後八十餘年なり、傳聞信ずるに足らず、▲(五)如竹本能寺に在りて惺窩が新註を講ずと聞き、歸りて文之に從ひしこと、鳩巢の如竹傳と異れり、鳩巢の父は如竹と交りし者、其の言必ず信ならん、▲(六)如竹死後三十餘年、喜春八十二、齡の時の筆記、誤謬なきを保せず。

(一)と(四)とは漢學紀源も亦已に其の誤を辯じたり、(二)は駁論を可とす、(三)は鬼界島に漂着せし者の薩州山川に寄泊せんこと、有勝の順路なり、(五)は大獄の起る所以なるが、如竹の浪華に在りしは六十餘なるを、鳩巢の父は八十に近しと云へる、亦誤聞あり、二者皆傳聞に出づ、未だ烏の雌雄を知らず、(六)喜春說の枝葉に誤謬ある

は、駁論の如きも、其の主眼なる愃窩と文之點との關係に至りては、如何に顏齡なりとも、誤記ある可からず、百歲の江村專齋が雜話は、史料と爲す可き者多きをや、

漢學紀源駁論

次に漢學紀源を駁せる要領に曰く。

(一)愃窩集の四景我有解の文に、文祿癸巳(即ち二年)蒙八州牧伯源亞相家康卿之佳招、而游武之江城、而踰年とあり、知るべし翌三年も亦江戸に在りしを、何ぞ二年入明の事あるを得ん、▲(二)三年春猶山川に在りと云ふも明證なし、▲(三)愃窩が母の訃音を聞きしは在江戸の時なり、山川に在りし時に非ず、集中の古今醫案序に、甲午之歲(即ち三年)予以人事游關左、不幸而母以病終云々、以て證すべし、▲(四)筑前の醫青木某の著書に據て、始て宋學を筑前に唱ふと爲す、談何ぞ容易なる、▲(五)愃窩の高潔豈文之點を竊みて序を姜沆に求むるあらんや、▲(六)愃窩姜沆に謂て曰く、予れ幼より師なし、獨り書を讀む云々、是果して虛僞か、▲(七)姜沆が愃齋記に、其爲學也不由師傳云々、人物の高きこと如此し、尙何ぞ他人の和點を剽竊せんや、▲(八)況んや宋儒の意に據りて和點を加ふるは難事に非ざるをや。

駁論若否の二

愃窩の不德

駁し得て痛快、復た遺憾なきに似たり、然れども未だ必ずしも疑ふ可き者なくんばあらず、(一)(二)(三)の文祿二年入明三年在山川の說は破るとも愃窩入明の途、鬼界島へ漂着せるは、行狀の大書する所、愃窩の和歌も亦以て證すべし、東歸の順路、坊の津又は山川に寄泊するは、明證なしと雖も、必無を保す可らず、(四)愃窩宋學を筑前に唱ふるの說、根據未だ確ならざる、誠に駁論の如し、然れども(五)(六)の愃窩の高潔は、予れ疑ひなきを得ず、愃窩幼にして東明に師事す、而も幼より師なく獨り書を讀むと謂ふ者は、虛言なり、妄語なり、前に玄惠中巖岐陽桂菴、及び一條禪閤清原業忠南村梅軒等あり、而して古今未だ宋儒の理を知らずと曰ひて、己れ獨り聖學賊實の見あるを誇れるは、或は寡聞の致す所と爲すも、舊師を忘るゝは不德にして高潔に非ず、況や宣首座及び五山の學僧より濂洛の學を受けし形迹あるをや、愃窩決して獨學に非ず、虛言妄語の人、豈剽竊を憚らんや、(七)明淸人及ひ朝鮮人の邦人の詩文を評する者は諛言多し、況や姜沆は俘虜にして食客なるをや、主人公の賓師に對して阿諛なきを保せず、(八)文章生英房が游仙窟に於ける、土佐の諸儒が做人底樣子てふ俗語に於ける、以て古人が訓點に苦心せしを知るべし、當時

に於ける四書の訓點、談何ぞ容易ならん、山田氏の駁論も亦未だ必ずしも盡さゞる者あり。

儒林の一大疑獄

如竹喜春の質直なる、好んで人の美を傷くる者に非ず、而して喜春聞書の誤謬あるは、却て後人の僞作に非ざるを證するも、既に誤謬あれば、疑惑を免れず、是れ島津國史の取て史證と爲さゞりし所以か、潛隱の漢學紀源は、功を桂文に歸して、薩摩が宋學首倡の地たるを證せんと欲し、頗る牽強の嫌譫張の病あり、然れども惺窩の鬼界漂着は、固り事實なり、喜春聞書果して僞作に非ずんば惺窩も亦未だ人心の疑ひを解く能はず、之を要するに惺窩の文之點剽竊は、儒林の一大疑獄と謂ふ可し。

惺窩點は寫本

今其の獄を斷せんとせば惺窩點と文之點とを對照せんことを要す、倭板書籍考に、惺窩點四書は慶長三四年時分に出でたり、板行には無しとあれば、寫本にて世に行はれし者の如きも、今や得易からず、又頭書四書大全の點は惺窩點を寫すと聞へたりとあれど、明確ならざるを如何にせん、然らば道春點の惺窩點に於ける、猶文之點の桂菴點に於けるが如きを以て、之を道春點に徵せんか、道春點は同書に元和四年に成りて、文之點以後に刊行すとあれど、其の初刻年月分明ならず、且つ文之點に後れて刊行せし者なれば、文之點と同じからざるは當然なるを以て、證と爲すに足らず、況んや後世の道春點は、天和元年の改正點なるをや、漢學紀源は天和三年長尾某梓行の道春點四書卷尾の文に、近代南浦創加訓點、羅浮復潤色之とあるを引けども、予未だ其の原書を見ず、且つ其の說未だ信憑す可らざるに似たり、文之點四書卷尾の如竹跋文に、四書集註和訓、近來其說惟多とあれば、寛永二年以前、已に數種の訓點ありけん、予は必しも功を文之點に歸せんと欲する者に非ず、而かも亦頗る此の疑獄を斷ずる能はざるを憾む者なり。

天和改正點の跋文

各種訓點本

今存する所の各種訓點本中には往々文之點の痕迹を存する者あり、其後登雲四書(菅玄同點)、道乙點三宅、由的點宇都宮、山崎嘉點(闇齋)、貝原點(益軒)、惕齋點(中村)、後藤點(芝山)、一齋點(佐藤)等出でゝ、專ら世に行はれたり。

# （十）文運の推移

戰國時代より織豐二氏▲加藤清正

予は略已に宋學の源流を說き、聊か私見を述べたり、今請ふ德川氏以前の趨勢を顧みて、文運の推移を略說せん。

僧學と武人の學

應仁以後、天下大に亂れ、元龜天正の際、群雄競ひ起り、干戈相踵ぎしを以て、學問の衰へたるや久しかりしも、斯の文猶地に墜ちざりしは、佛徒の力と武人の學とに因れりき、而して鄕曲の敎育も亦、皆僧學に屬せり、當時の國司守護職を初として一郡一邑の主に至るまで、苟くも佛寺を有せし者の、名僧善知識を招聘せんとするは、德川時代の各藩爭ふて名儒を聘せしに同じく、且つ今日の地方各學校が、校長敎員を選擇するにも似たりき、而して僧徒は東に西に轉住歷游して、津々浦々の果までも文化を分布し、佛寺卽ち學校なりき、當時亦往々儒學を挾みて諸侯の

佛寺卽ち學校

儒生の游學

間に游事する者ありしは、梅軒光宅の徒に徵すべく、其の名の傳はらざる者、蓋し尠しと爲さじ、然れば文武兼備を理想とせる武人敎育は、手習學問の二科を廢せ

武人と學僧

す、分けて名將とも言はるゝ人は、皆儒釋を兼學せしなり、武將の學は前にも往々說及びき、戰國の世に至りて、今川義元は太原崇孚を信じ、毛利元就は慧心に學び、北條早雲は僧に就きて韜略を聽き、其二十一箇條には、手習學問の友を求むべしと戒め、氏康氏政に至りては、九華叟に師事せり、氏政を罵りて菽麥を辨せずと爲す者は、甲陽軍鑑の讒誣のみ、武田信玄は希菴に學び、快川に交り、上杉謙信は天室を師として、後ち叡山に游學し、並に學問あり、亦皆詩を能くす、仁恕集堯信玄の詩を評して、近世儒流決して此の作なしと云へり、信玄嘗て其の父を逐ひしより、終身論語を讀まざりしは、名教に恥づる所ある者なるが、其の家法には論語を引きて學問を勸めたりき、足利幕府は有れども亡きが如く、教化全く衰へて、弑逆相踵ぎ、父子相賊ひて、專ら權詐を尙びしも、猶名教の一縷纔に存して後世に傳はりしは僧學と武人の學との存せしが爲のみ。

名教衰廢

織田信長の尊王

織田信長學を好まざりしも、其の師傅平手清秀が學問ありしは、死諫の書にも知られ、信長悔恨してよりは、復た狂童に非ず、稻葉一徹の文學を稱して之を重用せる、武井夕菴の言に聽きて禮樂を興さんとせる、誠に名君の度にして、其の尊王の大義は、德川十五代をして顏色なからしむ、信長をして大業を成さしめば、文教の興隆、豈家康を待たんや。

秀吉の抱負

誰か豐臣秀吉を不學と謂ふ者ぞ、彼は一を聞きて十を知るの資質あり、況や幼にして光明寺に學びしをや、後ち盧白南化を招きて盧白錄を講ぜしめしことあり、征韓の役、直に明韓をしていろはを用ひしめんと言へる、抱負豈大ならずや、而かも五山の永哲靈三承兌三僧をして簡牘を掌らしめしは、禪僧外交の掉尾なり、足利氏以來、禪僧の外交、功罪相半せり、禪僧が國體と名分とを忘れ、足利氏をして貿易の利是れ視て、國交の體面を失はしめたる、是れ大罪にして、瑞溪周鳳の善隣國寶記は、頗る正名の旨を論じ、本居宣長の馭戎慨言は、切に其の失體を指摘せり、然れども絕海が明太祖と唱和したる、天與が日本國法もて從者の罪を治めんと請ひて、治外法權を全くしたる、承兌が明の封冊を讀みて隱諱せず、以て秀吉をして怒り且つ裂かしめたる、亦禪僧の功と爲すに足れり、但秀吉は封冊を裂きしに、當時通文の役を掌りし景徹玄蘇が、明主の賜號を難有がりつゝ、勅賜本光禪師と稱したるは、陋むべし、當時出征の大小諸侯、皆陣僧を携へて文書を掌らしめたるは、

五山外交の功罪

陣僧

朝鮮役と文運

亦學僧報効の秋なるに概皆俗僧にして辭令體を失へり、軍醫中にも儒學に達せし人(薩摩の軍醫は明人許三官)ありけんも、予れ其の詳を知らず。

朝鮮の役は、世人唯其の武功を賞して其の文敎興隆の氣運を開く所以の者ありしを藐視するが如し、顧ふに天正の末、九州降り關東平ぎ、海内治を思ふの日に文祿征韓の役起り、諸將又征戰に勞し、已に武を外に窮めて、而して文治を内に懷ふや切なり、惺窩は名古屋の行營に出入して、而して出征の名將は經を陣中に講ずるあり、朝鮮は古來文化の淵源たり、儒佛並に經典を彼に求む、鎌倉の時大藏經を誅求し、大内氏の時經籍の贈を迫れり、今征戰に疲れて文治を懷ふの諸將、豈手を崑岡に空しくせんや、凱旋の日、許多の朝鮮本と木活銅活數十萬とを齎らし歸れるは、神功の征韓に圖籍を收めしと一轍に出でゝ、而して德川文學の興隆に資したりき、戰利豈此より大なる者あらんや、此より後ち列侯期せずして皆學に嚮ひしは、實に朝鮮陣の釀せし新氣運なり。

朝鮮本と活字との戰利品

加藤清正の篤學

當時の諸將中、最も學を好みし者は加藤清正なり、初め清正兵學を塚原小才次に學びしも、儒學の素養なく、前田利家が清正及び浮田秀家淺野幸長等に向て、論語の可以託六尺之孤可以寄百里之命臨大節不可奪也君子人與君子人也の章を物語りし時、何とも心付かざりけるが、後ち淺野長晟等と共に惺窩に就きて論語を讀み、略大義に通せしより、關ヶ原役後人に向て、今の世斯の語を事とせざらん者は、恐らくは不義に陷らんと云へりとなり、清正の儒學は程朱を奉じ、江村專齋を五百石にて召抱え、又惺窩門人の那波道圓をも聘して侍讀せしめつ、又羅山の忘年の友に僧屋宗礪と云ふ者あり、曾て東福に游んで禪を問ひし人をも儒員と爲し、上國往來の船中にても、常に書を讀ませて之を聞きけり、或る時伏見にて論語に自ら朱もて書入せし折、用ありて立ちし跡にて、日比愛養せし小猿、人眞似して朱筆を執り、論語に塗抹しけるを清正打見て、汝も亦終南山の猿を學ぶかとて一笑せしと云ふ、清正卒せし時、江湖散人の輓詞の序には、單思於韜略研精於語孟とあり、東福寺の文英清韓が輓詞の序には、忠貫金石志不忘君とあり、嗚呼此の忠は語孟より得來りし者なり。

清正と論語

清韓の鐘銘

此の清韓は清正の家臣の子にて、清正取立てられ、朝鮮陣の陣僧たりしが、其が作りし方廣寺の鐘銘は、忽ち東西二軍の大戰端を啓けり、凡そ文字を以て罪を得し